建築と社会
Architecture and Society

2000 4

特集　こころを癒す環境デザイン



日本建築協会

日本建築協会企画・販売

出版図書一覧

1917年3月に創設された日本建築協会（当時・関西建築協会）は、すでに昭和初期には大阪近辺で住宅博覧会や建築講演会を開く一方、当時は入手しにくかった建築の情報を図書の出版という形で会員に提供していた。

＊

以後、創立周年記念事業として、その時代の動きをとらえて単行本を出版している。

50周年、60周年、70周年、そして80周年に、図書の出版が企画され、現在も継続して発行・販売されている出版物は、以下のとおり。

＊

購入希望者は、㈱日本建築協会事務局（TEL06－6348－0635、FAX06－6348－0634）まで。

日本建築協会創立60周年記念事業

建築技術選書

A5判・130頁～160頁　発行:学芸出版社　本体価格¥1,200～¥1,400

1 茶室の話　岡田孝男
3 マイコンによる構造設計のすすめ（改訂版）　魚木晴夫
5 すまいの語録　茶谷正洋
7 構造計画とやさしい力学1　須賀好富
8 建具の知識と意匠　山片三郎
9 エレベータ・エスカレータ 立体駐車場　木村利雄
10 構造計画とやさしい力学2　須賀好富
13 医院・診療所の計画と設計　池田有隣・船越曄由
14 設計のコンピューター手法　飯塚英雄
16 石垣と石積壁　窪田祐
17 基礎と地盤の手ほどき　中堀和英
18 ショッピングセンターの計画　西脇顕正
19 住宅設計とインテリア　福岡喜久雄
21 住宅の家具　光藤俊夫
23 設備技術者のための建築再入門　光安義光
24 鉄骨構造の話　金多潔・甲津功夫・西沢英和
26 建物と地震災害　竹内吉弘・島田耕一
28 建築金物の知識　立野一郎
30 住宅三備心得帳　平田純一
31 住宅のエレクトロニクス　監修　小林郁
32 建築塗装の手引き　児島修二
33 建築式典の実際　若林嘉津雄
34 建築設計と高齢者・身障者　吉田あこ
36 日本壁　山田幸一
37 身近な耐震設計法　前川陽一
38 住宅の照明　監修　大島博
39 建築を志す人びとへ　日本建築協会出版委員会
特装本 火災安全学入門　岡田光正

選書シリーズは、在庫図書を掲載

日本建築協会創立60周年記念事業「建築技術選書」姉妹篇

〈プロのノウハウ〉シリーズ

四六判2色刷り　発行:学芸出版社　本体価格¥1,600～¥2,500

TQCから見た建設業　荒木陸彦
躯体工事監理のチェックポイント100　須賀好富
空調設備のトラブル50　建築設備トラブル研究会
衛生設備のトラブル50　建築設備トラブル研究会
現場マンのアイデア発想　合原一夫
建築基準法の実際　矢吹茂郎
ニュー組積建築のすすめ　福島孝之　他
建築物の消防法を読みこなすコツ　高木任之
鉄筋工事・本音の現場学　荒川治徳
建築基準法の難解条文を読みこなすコツ　高木任之
工業化住宅・考 これからのプレハブ住宅　松村秀一
鉄骨工事の現場学　石田満裔
建築紛争の実際　岡本辰義
仕上工事監理のチェックポイント　日建設計監理業務研究会
ゼロ災への道 建設現場の安全管理活動　表　一郎
木造住宅のしくみ 在来工法の基本と応用　浅野平八・東　敏博
コンクリート工事のチェックポイント100　加賀秀治
インテリアコーディネートの100ポイント　町田ひろ子監修／松本　茂・村元俊子著
新版 建築基準法を読みこなすコツ　高木任之
木づくりの常識非常識　上村　武
建築関連法規を読みこなすコツ　高木任之
都市計画法読みこなすコツ　高木任之

日本建築協会創立70周年記念事業

選書特装版

B5判　発行:学芸出版社　本体価格¥2,800～¥3,800

構造コストと経済設計　須賀好富
新・建築と設備の接点　宮脇　毅・南部　武
建築設備の健康診断　牧野　茂
外壁構法チェックリスト　飯塚五郎蔵
水にまつわるトラブルの事例・解決策〈建築篇〉　「建築漏水」編集委員会
建築・都市・住宅・土木ー情報アクセスブック　菊岡倶也
建築デザインのための構造計画　須賀好富
場所打ち杭の設計と施工　阪口　理
建築と緑　瀧　光夫
入門・建築積算　生島道春
水にまつわるトラブルの事例・解決策〈設備篇〉　「設備漏水」編集委員会

昭和生まれ　関西の建築家50　1987年

A4判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会建築クラブ朝食会300回記念
講演記録集 **話のはなし**　1997年

B6判5分冊　企画:日本建築協会建築クラブ　1セット5,000円（消費税別）

民間（旧四会）連合協定

工事請負契約約款　A4判のみ取り扱い

工事請負契約書・仲裁合意書・契約書使用上の留意事項
1部¥230（消費税含）送料 実費

日本建築協会創立70周年記念出版

住宅近代化への歩みと日本建築協会　1988年

A4判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会創立75周年記念出版

工高生デザインコンクール入選作品集　1992年

A4判　企画・発行：日本建築協会　定価2,000円

日本建築協会創立80周年記念出版

建築を志す人びとへ

A5判　日本建築協会出版委員会編著　本体価格1,800円

日本建築協会

会告

総会議決お知らせ

平成12年2月23日開催の総会において、監事および本部所属評議員が選任されるとともに、新名誉正会員が推挙されました。

また平成12年度事業計画並びに収支予算が承認されましたので、ここに会告いたします。

1.監事および本部所属評議員改選
2.新名誉正会員推挙
3.平成12年度収支予算書
4.平成12年度事業計画書

1. 平成12年度 監事・評議員改選

●監事／前田　隆司（前田商会）

●本部所属評議員（順不同）

中川　　徹（清水建設）
平岡　　博（大阪市都市整備局）
下村　健治（大阪青山短期大学）
三木　敏男（サングローブ）
村上幸三郎（村上デザイン事務所）
植田　久夫（間組）
大塚日出夫（淺沼組）
上田　眞之（藤木工務店）
塩脇　昭司（錢高組）
高木　嗣郎（大林組）
谷　　哲司（奥村組）
宗田　奎二（竹中工務店）
松田　利男（戸田建設）
柳澤　淳右（安藤建設）
沼本　宣勝（鉄建建設）
辻本　　健（辻本工務店）
前野　　脩（あめりか屋）
浅海　伸之（浅海電気）
矢野　卓生（中央電設）
城口　俊雄（大阪城口研究所）
田中　達夫（精研）
打垣内尚雄（東洋シヤッター）
立野　純三（ユニオン）

以上23名

2. 新名誉正会員推挙

上林　博雄　　竹原　博　　馬田　廣行　　平井　勇

3. 平成12年度収支予算書

平成12年4月1日から平成13年3月31日まで

（単位:千円）

勘定科目	平成12年度	平成11年度	増・減	平成12年度予算内訳
Ⅰ．収入の部				
会費収入	88,071	88,671	△ 600	
個人正会員	32,515	35,452	△ 2,937	14,400円×〔2450−(83+126)〕±35/2
個人正会員（地方）	1,588	1,801	△ 213	12,600円×126人
団体正会員	53,850	51,275	2,575	25,000円×（2000+124）±60/2
準会員	118	143	△ 25	8,400円×14人
事業収入	67,300	71,500	△ 4,200	
会誌収入	58,000	53,000	5,000	広告料等、4,100部×12月×1,179円
契約約款収入	2,200	2,200	0	販売収入
会員名簿収入	0	7,500	△ 7,500	
出版委員会収入	1,500	1,500	0	企画料、講座参加料
事業委員会収入	1,500	1,200	300	見学会、講演会参加料
教育委員会収入	2,000	3,000	△ 1,000	実務講習会参加料
建材委員会収入	100	100	0	
受託事業収入	0	1,000	△ 1,000	研究、調査委託料
雑収入	2,000	2,000	0	建築クラブほか
寄附金収入	100	100	0	
雑収入	1,019	1,000	19	預金利息、会議室使用料
記念事業積立金取崩収入	2,000	800	1,200	
退職給与引当金取崩収入	3,000	8,000	△ 5,000	
借入金	0	10,000	△ 10,000	
当期収入合計（A）	161,490	180,071	△ 18,581	
前期繰越収支差額	0	0	0	
収入合計（B）	161,490	180,071	△ 18,581	
Ⅱ．支出の部				
事業費	66,850	66,280	570	
会誌発行費	56,000	52,000	4,000	印刷費、原稿料ほか
契約約款費	1,000	1,000	0	販売費
会員名簿発行費	0	4,000	△ 4,000	
出版委員会費	1,000	1,000	0	講座開催、学術書等企画経費
事業委員会費	3,000	2,500	500	見学会、講演会、若い会員等経費
教育委員会費	2,800	3,000	△ 200	実務講習会、コンクール経費
建材委員会費	50	50	0	資料収集ほか
日本建築協会賞費	2,000	800	1,200	日本建築協会賞表彰費
受託事業費	—	930	△ 930	研究、調査受託
雑費	1,000	1,000	0	
管理費	91,640	105,496	△ 13,856	
給料・手当	57,000	56,976	24	本給、手当等
退職金	4,000	18,000	△ 14,000	職員退職金
福利厚生費	7,500	7,500	0	社会保険料事業主負担金
小　計	68,500	82,476	△ 13,976	
助成費	4,200	4,200	0	支部への交付金・補助金
会議費	1,500	1,500	0	総会、評議員会、理事会等
旅費交通費	170	150	20	
通信運搬費	1,000	2,400	△ 1,400	電話料、切手代等
集金費	2,000	2,000	0	会費収入振替料等
消耗品費	2,000	1,500	500	パソコン費ほか
修繕費	350	350	0	
印刷製本費	500	500	0	
光熱水費	350	350	0	電気代ほか
火災保険費	20	20	0	
租税公課	4,300	4,300	0	法人税、固定資産税、消費税
清掃費	250	250	0	
建物管理費	4,000	4,000	0	事務所共益費
雑費	2,500	1,500	1,000	新聞購読料、慶弔費、そのほか
小　計	23,140	23,020	120	
退職給与引当金積立支出	3,000	3,000	0	
借入金返済支出	0	5,295	△ 5,295	
当期支出合計（C）	161,490	180,071	△ 18,581	
当期収支差額(A)−(C)	0	0	0	

（注）平成12年度の借入限度額は3000万円とする。

4. 平成12年度事業計画書

日本建築協会は、建築に関わる全ての分野の優れた技術・知識が参画することのできる他に類を見ない団体であり、創立以来「建築を通じて社会に貢献すること」を理念として今日まで多くの業績を積み上げてきたところである。

現在、我が国の社会環境は未曽有の長期不況の渦中にあり、国際競争がますます激化する中で建築界を取りまく環境も一段と厳しさを増してきている。今こそ、会員が一丸となって長年にわたり培われた技術・知識を発揮し、この難局を乗り切らなければならない。

21世紀を目前にした大きな節目に当たる平成12年においては、今一度これまでの歴史を振り返り、さらに英知を集め21世紀に向かって協会の活力ある第一歩が記せるような事業の企画、推進が必要である。

以上のような観点に立って、平成12年度は以下に掲げる事業を実施する。

1．会誌「建築と社会」の発行（編集委員会）

大正6年9月の創刊以来、第2次大戦終戦前後の一時期を除いて毎月発行を続け、会員連帯の手段として、また建築界と社会を結ぶ接点として本会の歴史と伝統を継承する役割を果たしてきた。本年の第81輯発行に当たっては、2000年という新しいミレニアムの年にふさわしい魅力ある紙面づくりをめざしたい。まず、その大きな柱として、「建築と社会」の趣旨にそった社会性をもち、環境に配慮した有意義な建築作品や建築にかかわる論文、記事などを本会会員の投票により顕彰する、読者と選ぶ第1回「建築と社会賞」を実施する。こうしたことにより本誌を通して会員相互の理解と交流がうまれることを望むものである。

なお、長引く不況のもと、建築を取り巻く環境も一段と厳しさを増す現状において、当編集委員会としても、経費節減に努め、会誌発行事業の経営の健全化を推進したい。

2．「建築技術選書」と<プロのノウハウ>の企画（出版委員会）

本委員会は、建築技術の単行本を企画する会である。「出版企画と著者さがし」にアンテナをはりめぐらせている一種の探偵集団ともいえよう。

協会創立60周年記念事業として建築技術選書を企画刊行したが、それ以来こんにちまで、建築図書専門の学芸出版社を版元とし、技術選書39冊・特装版11冊・プロのノウハウ34冊の計84冊に及ぶ単行本を世に送ってきた。

本年度は、さらに委員の結束を固め、よい技術書を出版できるよう努力していく。

また、出版書をテキストに使用した著者の講演会は、例年どおり実施する。

3．講習会などの実施

1）建築工事実務講習会（教育委員会）

本会創立直後から各種技術講習会を実施してきたが、昭和32年度以降、中堅技術者を対象とした講習会を毎年開催し、平成11年度までに延べ67回を数えている。本年度も、現場実務に即応した講習内容のさらなる充実を図るほか、支部と連携して、引き続き本講習会開催の拡充に努める。

2）情報の提供等（事業委員会）

時宜に適したテーマを選び、会誌の特集や見学会との連携にも留意しながら、講習会、研修会を実施するとともに、話題建築物について、その建築の意図、設計の主旨などを発注者または設計者から聞く会を開催する。また、各種メディアを活用した情報の提供と連携についても検討する。

3）見学会（事業委員会）

新建築や地域開発プロジェクトなどを対象とする見学会を毎月1回程度実施する。

また、年1～2回は、茶室、近代建築、町並保存の見学会を行い、当該地域の歴史や伝統文化との触れ合いを通じて会員との交流を図る。さらに、特色ある地方の作品にも注目した企画を立て、地方会員との交流を図る。

4）若い会員の交流（事業委員会）

若い会員の感性と活力を展開するため、サロン形式の集会を適宜開催し、講師と参加者との対話に重点を置き、会員相互の親睦・交流を図る。

4．新建築材料の調査検討（建材委員会）

建築工事における建材選定の適否は、意匠・耐久性はもとより、その建物の機能をも制する最重要事項として、設計・施工を問わず常に苦慮していることである。

また、改正建築基準法の施行（本年6月）を目前にして品質保証の関心が高まる中で、建築材料の品質・性能が一層重視されつつある。

本委員会では、こうした時代の要請に応えうる優れた建材の調査検討を行うとともに、確かな情報の提供に努めていきたい。

5．青年技術者の顕彰（青年技術者選考委員会）

昭和29年度から本顕彰を実施し、平成11年度までに730名の顕彰を行った。

本年度は第47回を迎えるが、例年の通り満35歳以下の会員を対象とし、選考のうえ「建築と社会」誌上で顕彰する。

6．工高生デザインコンクールの実施（教育委員会）

このデザインコンクールは工高生の設計技能の向上奨励のため、昭和30年から毎年テーマを変えて実施しているが、年々参加校が広域化し、応募件数も増加して、まさに全国的規模に発展してきている。

本年度は第46回を迎えるが、さらに大きな広がりと成果が得られるよう努める。

7．工高等建築科優秀卒業生の表彰（教育委員会）

昭和27年度から本表彰を実施し、平成11年度は240校、285名を表彰した。しかしながら、本制度の意味付けは必ずしも明らかではないので、その本旨を明確化し、本年度も学校長推薦により表彰を行う。

8．周年記念関連事業等の実施（協会全体）

平成11年度に募集した「第5回日本建築協会賞」は、選考の結果4件の受賞者を決定した。建築を通じて社会に貢献するという本会の理念の発揚にふさわしい「優秀な業績」として本年度第1回通常総会の場で受賞者を表彰する。

9．会員の増強（協会全体）

社団法人にとって、会員の維持増強は重要な事項である。このため、会勢理事会を中心として会員の勧誘活動を展開しているが、本年度は20世紀の掉尾の年でもあり、新しい世紀に向けて飛躍できるよう、各委員会とも連携し、各種事業の実施を通じて幅広い分野から、特に若年層の入会に重点をおいて会員増強活動を展開する。

10．支部、地方との連携強化（協会全体）

本会の会員組織は、現在、本部および京都・中国・東海・和歌山の各支部ならびに地方会員、準会員で構成されているが、その活動は一部の事業を除き、本部、支部の連携が十分とはいえない面がある。本会の活動は、広域的な視野で展開されるべきものであり、その意味では支部の活動は極めて重要な意味がある。

本年度は、本部、支部の連携強化を推進目標の一つとするとともに、各種事業の展開においても連携を密にし実施するよう努める。

11．調査・研究業務の受託（事務局）

本受託業務は、毎年、公共団体、公的機関その他各方面から建築に関する調査研究委託を受けて実施してきたが、昨年度は、関係業界や地方団体の研究費の低減により、委託事業が著しく減少した。本会としては、調査研究の委託が随時引き受けられるよう常に万全を期して、その受託体制の整備に努める。

12．図書閲覧制度の充実（事務局）

本会は、昭和63年度から本会所蔵の図書や資料を「資料公開規程」を制定して、会員をはじめ一般市民の利用に供してきたが、所蔵図書の量は著しく増加している。本年度は所蔵書図書の点検整備を行い、協会ならではの貴重な図書を除き、不要なものは廃棄するなど管理の適正化に努める。

13．業務の効率化等（事務局）

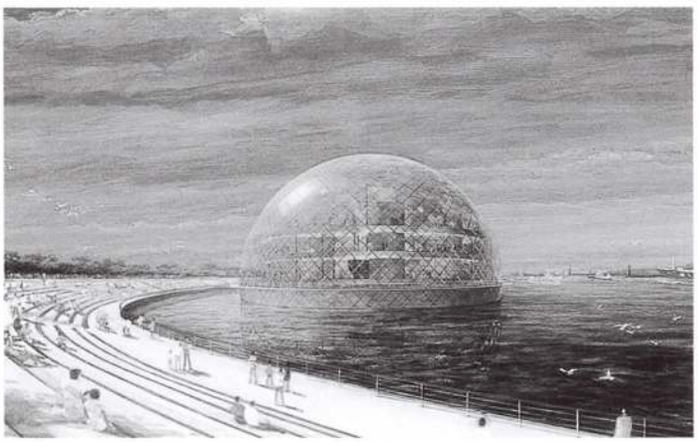
本会の事務局体制は、総務、編集および事業の三課制を採っているが、年々その事務量が増加している。このため、事務の合理化に努めるとともに、事務経費の節減に取り組んできた。昨年度は会員名簿の電算システム化を計画したが、財政的な問題もあり実現に至っていない。

インターネット等新しい情報処理について、各委員会等からの要望もあるので、出来るだけ早期の実現を目指し、パソコンを導入し業務処理の効率化を努める。

14．その他

本会は、建築関係友好諸団体との協力・協調に努めながら、本会の目的に整合する適当な事業の企画に対しては、後援または協賛を行う等これを支援してきた。本年度も他団体の優良な企画に対し、同様の措置を実施する。

なにわの海の時空館
（大阪海洋博物館）
見学会

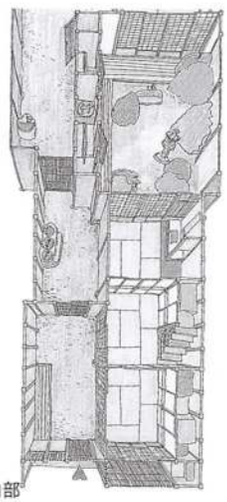


大阪市では、「市制100周年記念事業」として、海や港とともに発展してきた大阪の歴史や、広く人と港や海とのかかわりなどについて、市民に楽しく理解してもらうことを目的とした、「なにわの海の時空館」を咲洲コスモスクエア地区に建設中であります。「大阪の海の交流史」を基本テーマとし、主展示物として、大阪の今日の発展を築いた礎ともいえる千石積級「菱垣廻船」を、長さ約30m、高さ約26m、幅約7mの原寸大で学術的考察にもとづいて復元しています。当館は、大阪港の主航路に面した位置にあり、海に映え人々の目に強く印象づけられる大阪港のランドマークとなるよう、直径70m、高さ35mの半円球が海上に浮かぶイメージの海上展示館として計画されています。そして陸上エントランスから海中道で結ばれた海上展示館の中心には、復元「菱垣廻船」が展示されています。
（大阪市港湾局）

●建築概要
所在地　大阪市住之江区南港北2
　　海浜緑地内
発注者　大阪市港湾局
設計監理　大阪市港湾局
　　ポールアンドルーアーキテクトジャパン
施工　大成・不動・東洋JV
敷地面積　33,537.45㎡
建築面積　6,251.47㎡
延床面積　20,884.31㎡
構造規模　S·RC、B2·5F

日時　2000年5月17日(水)
　　14:00—16:00
講師　葛原栄一／大阪市港湾局
　　企画振興部企画主幹
　　越智暁人／ポールアンドルーアーキテクトジャパン
　　大阪事務所長
　　宇都宮良／JV作業所長
集合　現地／大阪市住之江区南港北2
　　＊地下鉄ニュートラムOTS線
　　「トレードセンター前」より徒歩約10分
定員　50人 ＊申込多数の場合は抽選
参加費　会員1,000円、一般2,000円／税込
申込　5月10日(水)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
　　①催し名:なにわの海の時空館見学会
　　②氏名
　　③個人会員·団体会員·一般の別
　　④職場·学校名
　　⑤参加証郵送先
　　⑥連絡先電話番号
　　をお知らせ願います。
　　＊参加証を5月11日(木)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
　　大阪市北区梅田1-1-3-2100
　　TEL.06-6348-0633
　　FAX.06-6348-0634
　　〒530-0001
主催　㈳日本建築協会
　　事業委員会見学会小委員会
　　担当主査：塘　伸夫/東畑建築事務所
　　杢谷通夫/大成建設設計部

まちなみ見学会
第4回
奈良市奈良町


町家の内部

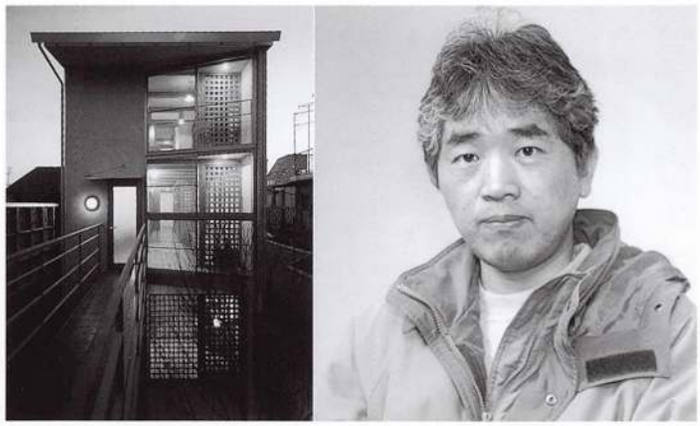
日時　2000年5月27日(土)
　　13:00—16:00
講師　岩城秀幸／奈良市都市計画部
　　計画課課長補佐
　　喜多恵吾／奈良市都市計画部
　　計画課景観係長
　　小林広育／奈良市教育委員会
　　文化財課技師
　　森井直良／奈良まちづくりセンター
　　副理事長
見学先　元興寺（国宝・平成10年世界遺産登録）
　　今西家書院（重文）
　　藤岡家住宅（重文）ほか
集合　奈良町センター会議室
　　奈良市東寺林町38
　　＊近鉄「奈良駅」より徒歩約10分
　　＊JR「奈良駅」より徒歩約15分
定員　30人 ＊申込多数の場合は抽選
参加費　会員1,500円、一般2,500円
　　＊学生は500円引
　　＊入館料を含む
申込　5月19日(金)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
　　①催し名:まちなみ見学会
　　②氏名
　　③個人会員·団体会員·一般の別
　　④職場·学校名
　　⑤参加証郵送先
　　⑥連絡先電話番号
　　をお知らせ願います。



　　＊参加証を5月22日(月)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
　　大阪市北区梅田1-1-3-2100
　　TEL.06-6348-0633
　　FAX.06-6348-0634
　　〒530-0001
主催　㈳日本建築協会
　　事業委員会見学会小委員会
　　担当主査：松本　剛／大阪府

「奈良町」は、江戸時代末頃から明治時代にかけての町家の面影を今に伝え、落ち着いた風情を漂わせています。行政地名としての奈良町という場所はありませんが、世界遺産にも登録された元興寺の旧境内を中心とした一帯を「奈良町」と呼んでいます。
このあたりは奈良時代の平城京のうち東部に突き出た外京と呼ばれていた場所で、神社・仏閣が多く、また「迷路のような小路を歩くと歴史の横顔に逢える」—そんな町です。
奈良市においても、奈良町固有の景観を守り、その良さが活かされている「まち」へと発展させていくために、奈良市都市景観条例により「奈良町都市景観形成地区」を指定しています。
陽春、このような古都のまちなみ探索に出かけませんか。

講演会
性能規定における木造デザイナーのための木構造



※光と風を通す耐力壁"面格子"

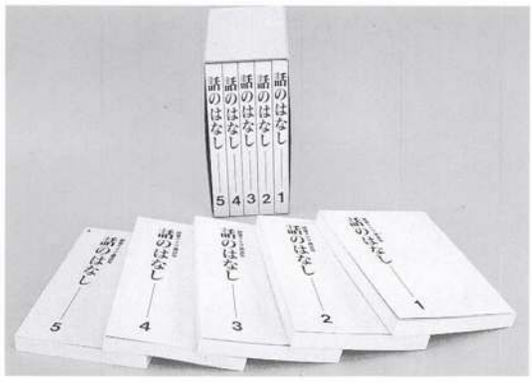
木造は日本古来の伝統ある建築であり、多様性に富んでいます。５年前の「阪神・淡路大震災」により、古い伝統的な木造住宅の多くが倒壊または大破などの被害を受け、比較的新しい木造住宅も少なからず受けて圧死者が出て、多くの教訓を残しました。一方、建築基準法の改正により４月以降、木造住宅においても品質確保の法律や性能設計が要求される時代が始まります。
本講演では、木造住宅２階建の問題点と思われる「壁量計算で終了していた耐震性能」、また「市販雑誌のスパン表で決定されていた梁成等」を見直して、なぜなのか等をお話しさせていただき、木造住宅デザイナーの皆様と共に考えたいと思っています。「品確法」及び「性能規定」に対処して考えていく上で、これからの木造住宅はどうあるべきかを参加者と一緒に考えたいと思っています。　（田原　賢）

田原　賢（たはら・まさる）
1958　岡山県生まれ。
1979　大阪工業技術専門学校建築学科卒業。
　　都市企画設計コンサルタント入社。
1989　田原建築設計事務所設立。現在に至る。
専門分野：木構造

日　時　2000年 5 月26日(金)
　　18:30―20:30
会　場　日本建築協会サロン
　　＊大阪駅前第３ビル21階
講　師　田原　賢
　　田原建築設計事務所主宰
定　員　30人　＊申込多数の場合は抽選
参加費　会員 1,000円、一般2,000円
　　＊学生は500円引
　　＊税込
申　込　５月19日(金)までに、ハガキ、FAX、電話でお申込み下さい。
　　①催し名
　　木造デザイナーのための木構造
　　②氏名
　　③個人会員・団体会員・一般の別
　　④職場・学校名
　　⑤参加証郵送先
　　⑥連絡先電話番号
　　をお知らせ願います。
　　＊参加証を５月22日(月)に発送します。
申込先　㈳日本建築協会事業課
　　大阪市北区梅田1-1-3-2100
　　TEL.06-6348-0633
　　FAX.06-6348-0634
　　〒530-0001
主　催　㈳日本建築協会
　　事業委員会情報小委員会
　　担当主査：瀬戸川　葉／関西電力

講演記録集
「話のはなし」残部頒布します!

昭和47年6月に発足した「建築クラブ」（日本建築協会会員有志の集まり）は、毎月1回、大阪市内のホテルに学者やジャーナリストをはじめ政界・経済界・文芸界・スポーツ・芸能界など広い分野から講師をお招きして、お話を聞く朝食会を開いております。
1997年、この朝食会の第300回を記念して、講演速記録を集約し、最終的に118回分を5冊1セット（1冊平均約320ページ）の本に編集いたしました「話のはなし」の講話の内容はとても多彩で、「おもしろい話」「貴重なはなし」「裏ばなし」などがいっぱい詰まっています。
残部を建築クラブの格別のご好意により、1セット・5,000円(消費税別途)でおわけできることになりました。ご希望のかたは電話またはFAXでお申し込み下さい。



B6判　5分冊

申込先：日本建築協会事務局
　　TEL06-6348-0635
　　FAX06-6348-0634

読者と選ぶ第1回『建築と社会賞』

読者アンケートにご回答下さい

日本建築協会誌「建築と社会」では、新世紀の幕開けとなる2001年初頭より、本誌掲載の建築作品、論文、記事を対象に本会会員の投票による顕彰制度、読者と選ぶ『建築と社会賞』を実施します。

本賞は、「建築と社会」という本誌の趣旨にふさわしい、社会性、環境などに配慮した有意義な建築作品や建築にかかわる論文、記事などを顕彰するものです。なお、その選考方法は、会員参加を考え、会員読者の投票による第一次選考及び、編集委員会で定めた選考委員会での第二次選考を経て決定いたします。

4月号については、下欄の読者アンケート用紙をご利用下さい

〔選考対象〕

読者と選ぶ第1回『建築と社会賞』は、2000年1月号～12月号の本誌「建築と社会」の「作品作風頁」「本会支部作品頁及びそれに準ずる作品頁」に掲載された建築作品及び、「特集頁」「シリーズ頁」「実務の頁」「投稿欄」・その他頁に掲載された論文、記事の中から選考する。

〔選考・スケジュール〕

●第一次選考

「建築と社会」2000年1月号～12月号の各号に読者アンケート用紙(FAX送付用)を掲載し、会員読者から送付いただく。また、2000年12月号には会員読者の投票用ハガキを綴じ込み、双方に準拠し第一次選考を行う。12月号には、選考要項、選考委員名などを掲載する。

●第二次選考

「建築と社会」編集委員会で定めた本賞選考委員会で、第一次選考を通過した作品、論文、記事などを該当者より提出された審査資料に基づいて選考する。

●発表

入賞者は、本人に通知するとともに、「建築と社会」2001年4月号で発表。同年4月に開催される編集委員会総会で表彰予定。

〔表彰内容〕

作品　　1～3点
論文・記事　1～3点
各入選作品・論文・記事に対し、賞状、記念品を贈呈する。

切り取り線

「建築と社会」読者アンケート

2000年4月号

「建築と社会」では、読者の方々のご意見を参考に、充実した誌面づくりをめざしております。今月号で、とくによいと思われた作品、記事、その他についてのご意見をFAXでご送付下さい。
なお、このご意見は、読者と選ぶ第1回『建築と社会賞』の1次選考に反映されます。

□とくによいと思われた作品

よいと思われた理由

□とくによいと思われた記事

よいと思われた理由

□その他、本誌についてのご意見や、取り上げてほしい内容などがありましたらご記入下さい。

送付先：
㈳日本建築協会
「建築と社会」
FAX 06-6348-0634

お名前 _____

勤務先 _____　TEL _____

日本建築協会会告

第5回日本建築協会賞入選発表

日本建築協会は、建築界における総合団体としての性格にもとづき、建築に関わるあらゆる分野において社会に貢献した団体または個人に対して、その業績を讃えるとともに、わが国文化の向上と公共の福祉に寄与することを目的として日本建築協会賞を選考し顕彰することとしている。

今回、その第５回選考にあたり各界に応募を呼びかけたところ、締切日の平成11年10月29日までに11件の応募があった。

これが選考にあたっては、日本建築協会選考委員会（委員長：薬袋公明氏、他同委員９名）を設けて、数回にわたる選考を重ねた結果、下記のとおり、日本建築協会賞３件、同　特別賞１件を選定した。日本建築協会賞には、賞状並びに賞牌、副賞として50万円を贈呈、また、特別賞には、賞状と賞牌を贈呈する。

表彰式は、本年６月28日㈬に開催予定の本会の第１回総会において行う。

●日本建築協会賞

耐震診断及び改修計画の評定システムの策定と、耐震診断の判定機構の確立

㈶愛知県建築住宅センター理事長 **角岡　照一**

このシステムは、昭和53年度から耐震構造委員会を設置し耐震診断の判定をしてきた体制を、阪神淡路大震災後、耐震診断の量的拡大に対応しつつ品質の確保を維持するために発展させたもので、１次判定をする判定部会および最終確認を行う耐震構造委員会から構成されている。

判定部会では、日本建築構造技術者協会に加盟する民間の優秀な構造技術者と大学の構造研究者を事前に判定委員として多数選定し、その中から構造技術者２名、研究者２名で１次判定が行われる。

量的問題は、判定に必要な回数の部会を開催することで解消し、さらに構成員を固定した耐震構造委員会で１次判定の最終確認を行うことで品質のバラツキも是正され、質の高い耐震診断の判定が可能となる。

当センターは県内唯一の判定機関として一手に耐震診断を実施してきた。耐震診断の大量受注という状況下で、品質確保のため様々な組織運営の工夫を重ね、関係機関の協力を得て、このような判定機構を確立した。さらに当システムを活用して「建築物の耐震改修の促進に関する法律」の認定にかかる耐震改修計画の評定システムを早期に立ち上げ、耐震改修の促進を図ったことは、他の都道府県でも参考とされ、採用されるようになった。

これらのシステムは、今後、建築基準法の性能規定化など必要とされる性能の認定や性能評価のシステムを広く各地で立ち上げていく上でも、一典型として参考になるものと考えられる。

●日本建築協会賞

氷蓄熱及び躯体蓄熱空調システムの開発と普及

㈱竹中工務店　取締役社長 **竹中　統一**

1980年代、オフィスのOA化に伴う夏期電力使用量のピークが年々高まることを予想し、今後、氷蓄熱空調が主流になるとの判断にたち、早くから「新蓄熱プロジェクト推進室」を設置して技術開発に努め、日本の電力事情の改善という極めて公益性の高い分野まで波及効果のある事業展開を行った。

当時、他社が氷蓄熱の研究・開発段階にある中で独自に「氷を貯める」「氷を溶かす」「氷を使う」という観点から、氷蓄熱技術を確立させ、全国各地の代表的な建物に積極的に導入するとともに、

１．ペーパークリスタルシステム（VCS）の開発

２．躯体蓄熱空調システムの開発

と併せて、二次側空調の搬送動力を60%低減し、空調のイニシャルコストも20%～30%の削減を可能とし、その省エネルギー性やランニングコストの低減効果は高く評価されるに至っている。

更に、この技術の普及は、わが国における昼夜の電力需要のアンバランスを緩和し、ひいては大気の温暖化やエネルギー資源の枯渇等を抑制し、地球環境の改善にも大いに貢献するものと考えられる。

●日本建築協会賞

建築情報管理に関する実践と啓蒙及び一連の著作等

建設文化研究所 **菊岡　倶也**

氏は法律学を修了後建設省建築研究所に入所、以来建築分野を中心とする情報管理の重要性に着目するとともに、(財)日本建築センターに移ってからもその実践と啓蒙に努めた。1970年に入ってからは建築関係の専門誌・紙等に数多く寄稿し、建築情報管理の重要性を説くとともに具体的な啓発活動を重ね、各種団体や機関に対する助言と建築設計組織の中で生まれてきた情報のスタッフへの支援に大きく貢献した。更に、自ら主宰する建設文化研究所で独自の活動を始めてから、多くの執筆活動を展開し、それまでの蓄積を惜しみなく公開し、建築界における情報管理の骨格形成と具体的な手がかりの提供を続けた。

その他、在京の建築情報管理者の研究会を組織するとともに、関西における類似の組織に呼びかけて、毎年「建築情報研究東西交流集会」を行い、本年で20回を数えるなど、人材育成と交流に大きく貢献し、次の世代の建築情報管理に向けての活動が期待される。

●日本建築協会賞特別賞

永年にわたる都市・建築文化の調査研究・指導及び実践により都市文化の向上とまち創りに貢献

中島　一

氏は大学を修了後、建設会社を経て建設省技官として、建築行政・住宅行政に従事。転じて1963年に名古屋工業大学助教授となり、さらには地方自治体においても「建築計画」「都市計画」を研究分野とし数多くの調査研究を行い、その後愛知工業大学教授に就任し「都市景観」を研究分野に含め、豊田市・瀬戸市・犬山市・岡崎市の都市景観条例の制定に尽力した。また、その審議会会長に委嘱されるや「都市景観とはその都市の市民生活の姿」と定義づけ、その啓発の一助として公募方式による“私の好きなまち並み、まちの姿”を提案し、広く都市景観の推進に寄与した。

一方、CBCラジオに「中島一のライフスケッチ」と銘打って、11年６カ月にわたり毎日放送を続けた。これは、市民の生活をとおし「まち創り」に参加することにより「人づくりはまち創り」への認識を呼びかけたものであり、マスコミを通じてコミュニティ創りを目指した手法として高く評価されている。なお、NHKTVの「空間の考え方のおもしろさ」、名古屋TVの「いきいきハウジング」も氏がレギュラー出演し、高く評価された。

1993年に彦根市長に就任するや“ロンリ（理論）、ローカリズム、ロマン”をめざし、A・B・C（アメニティ、ビューティ、カルチャー）のまち創りキャッチフレーズに市民とともに取り組み、その成果はみるべきものがある。なかでも「夢京橋キャッスルロード」の完成は、建設省およびその関連機関など６機関より表彰されている。また、学校公園化構想の一環として独立小学校「若葉小学校」をオープンスクールとして新設、この間にも都市・建築に関する多くの著書を刊行等、建築界に対する貢献は高く評価される。

建築と社会 4 2000
ARCHITECTURE AND SOCIETY
JOURNAL OF THE ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN

1917年創刊　第81集／通巻937号

今月の表紙

表紙デザイン／笹村欽也
建築写真／河合止揚

●旧・甲子園ホテル―武庫川学院上甲子園キャンパス（甲子園会館）―
設計／遠藤　新
施工／大林組
竣工／1930年　兵庫県西宮市戸崎町

■ライトの建築様式を受け継いだこの建物のシンボル意匠は「打出の小槌」。建物全体を貫くモチーフは、打出の小槌から水滴のように「珠」があふれる様子を表現したものである。作者の意志が、「珠」という形をとり、外壁のタイル面や竜山石の石彫をつたわり続ける。どのシーンも見逃せない。この美しい建物を創り上げるには非凡なる才能と最高の技能が必要であったと思う、そして今もなお美しくあるのは、維持管理に携わる大勢の方々の強い意志とたゆまぬ努力の成果と思われる。（笹村）

■特集予告
5月号／測る
6月号／スケルトン&インフィル
7月号／改正建築基準法

編集委員会（平成11年度）

■副会長
金多　潔
薬袋　公明
■編集理事
荒巻　恭士
井上　豊
小島　雄
佐野　吉彦
竹中　統一
立野　一郎
真塚　達夫
松村　慶三
◎宮田　照久
山田　修
■特集小委員会
□計画分科会
★計画系
伊達　憲幸
梅村　宏尚
小浦　久子
※鈴木　克彦
田中　直人
紅谷　昇平
松川　敏正
松田奈緒子
横関　真紀
吉村　英祐
★建築計画系
江副　敏史
大村　昌聡
菅野　忠司
小林　優子
桜井　則雄
※笹村　欽也
佐藤不二男
塚本　史郎
所　千夏
野田　隆史
服部　光宏
★インテリア・住宅系
※石川　佳子
加藤　力
北浦かほる
小梶　吉隆
小島　保人
佐藤　勝紀
中村　孝之
中村　雅人
西田　和子
畑　康之
ペリー史子
水谷　美香
□構造分科会
岩永　速典
※大氏　正嗣
金田　興熙
河野　隆史
木下　隆嗣
岸本　一蔵
佐治　明志
園田　隆一
田中　剛
田辺　太一
陶器　浩一
松村　和夫

□設備分科会
梶井　宏修
河津　隆之
近藤　正一
田ノ畑好幸
西岡　道雄
野口　太郎
堀内　一夫
桝井　貴廣
村上幸三郎
※谷津　和久
山根　敏和
□施工材料分科会
十倉　毅
植田　実
※小椎八重猛
太刀川丈爾
能美　敏男
野口　幸忠
福井　茂和
□法令分科会
池口　和雄
亀谷　周二
黒木　省二
椎名　辰之
田村　俊郎
※浜野　幸雄
■作品作風小委員会
赤木　隆
朝倉　一晃
川上比奈子
倉洲奈千子
杉本　浩
寺岡　宏治
中村　文紀
藤城　義丈
△前川　治彦
牧野　雅一
増田　敬彦
増田　俊哉
山田　俊紀
吉田　健二
■会員企画小委員会
稲木　裕子
大谷由紀子
河崎　敦子
高岡　伸一
髙田　光雄
髙橋　麗子
△塚口　明洋
辻川ひとみ
土田　伸二
福田　瑞穂
■広告企画小委員会
△岩井　武夫
小幡　義明
加納伸太郎
家森　康彰
勝　一弘
小山　昭
斉藤　治久
武田　修示
平松　勉
前田　衛
渡邊　浩文

◎委員長　△副委員長　※幹事

印　刷　2000年3月25日
発　行　2000年4月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市北区梅田1-1-3-2100
電　話　06-6348-0635
振替口座　00910-9-39975
印刷所　青葉印刷株式会社
日本データネット株式会社
定　価　1200円〔本体価格1143円〕

CONTENTS

特集● こころを癒す環境デザイン

[総論]
癒しの概念と環境づくり●高柳和江 — 18
こころを癒す住環境のデザイン●石田章一 — 23

[各論]
住宅での癒しの環境づくり〜マイナスイオンの可能性〜●菅原明子 — 26
医療福祉施設における癒しの環境デザイン●田中直人 — 28
「エイブル・アート」でなぜ癒されるのか●播磨靖夫 — 30
震災遺児の癒しを目指して●樋口和広 — 32
コンパニオンアニマルたちと暮らせるまちに●中橋廣美 — 33
オフィスでの癒しの環境づくり〜NTT京阪奈ビル設計ノート〜●上村廣志 — 34
ヒーリング・ランドスケープ●浅野房世 — 36
「癒し」とは〜坊主バーの試みから〜●清　史彦 — 38
安らぎの旅〜四国遍路〜●梶川　伸 — 40
癒しの空間ビジネス〜サンドセラピーの治癒（砂塩温熱サロン）〜●力石秀夫 — 42

[みてあるき]
癒しの時・空間●小浦久子／鈴木克彦／田中直人／紅谷昇平／松田奈緒子／吉村英祐 — 44

会告
総会議決のお知らせ―平成12年度監事・評議員改選,新名誉正会員推挙,平成12年度収支予算書,平成12年度事業計画書―,なにわの海の時空間（大阪海洋博物館）見学会,まちなみ見学会④奈良市奈良町,講演会・性能規定における木造デザイナーのための木構造,講演記録集「話のはなし」残部頒布します,読者アンケートにご回答下さい,第5回日本建築協会賞入選発表 — 1

作品作風
平安女学院大学 — 8
西心斎橋ニューズII — 10
トヨタカローラ新大阪箕面営業所 — 12

gallery
ダブルウォールコンプレックス（藤井豊史+中村一美）●中村文紀 — 14

建築の眼
古都の景観を見なおす●宮崎興二　バラバラでいっしょ●中山詳三
コンピュータ出力問題●遠藤秀平　都市の表象●桑田和明 — 16

W
建築家の本棚（若林広幸）●辻川ひとみ — 48

法令コーナー
被災建築物応急危険度判定制度の現状●岡田有資 — 50

構造の頁
現実となったF14T超高力ボルト●宇野暢芳 — 51

設備の頁
水栓器具からの鉛溶出低減技術●後藤　晶 — 53

基礎講座A
文章は細心にして大胆な暴走がいる●山田　修 — 55

基礎講座B
電気系防災設備の概論●西尾　勇 — 56

information
「エットレ・ソットサス展―その仲間たちとの軌跡」,特別展「万博開封」と「万博遺跡探検隊」,大地の記憶―いのちのかたち「山本正道展」,「フェルメールとその時代」展,アルヴァ・アアルトを訪ねて,第3回近代建築講座,福祉住環境コーディネーター2級,そごう百貨店の保全・活用を要望,建築指導課和泉分室の設置,「住まいとコミュニティづくり活動助成」の助成対象者決まる,J-SaPa施設デザインコンペティション受賞作決定,「環境共生住宅団地」を初めて認定,平成12年度「建築設備診断技術者」講習, — 61



正門から本部研究棟を見る



手前：情報メディアセンター　奥：レク・ジムセンター

作品風作

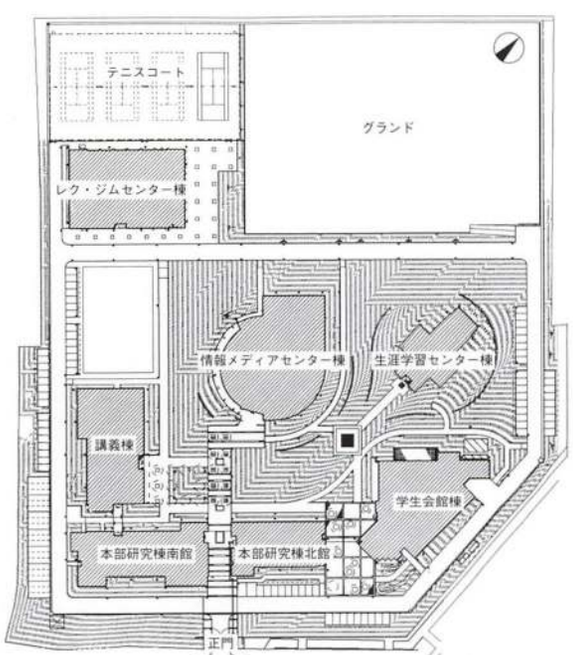
設計監理■
一粒社ヴォーリズ建築事務所

施工■
西松建設関西支店

平安女学院大学

新設の四年制女子大学のための建物である。１学部２学科、１学年の定員は280名。湖南のまち、守山市のスポーツ・文化ゾーンに隣接している。はるか北西に比良山系を眺む田園地帯に三方を囲まれている。南東の前面道路は将来、幅員31mの幹線道路となる。
建物配置は低層・分散型とし、建物相互間に生れる外部空間を積極的に造り出す。前面道路と平行に配置された本部研究棟は、隣の市民ホールと壁面線を揃え、直交する講義棟と共に中庭を守る障壁とした。キャンパス中央にある情報メディア・センターは、機能的にも大学の中心である。円形のプラン及び、一部をピロティにすることで、真ん中にあることの閉塞感から開放した。
小さな礼拝堂をもつ生涯学習センターは、大学の精神的中心である。軸線を対角に振ることで、そのことを強調すると共に相対する建物との対立を避けた。本部研究棟のゲートを抜けると、全ての建物の入口が確認できる。居心地のよい中庭にするために、見通しの良さと、ある程度の閉鎖性を与えた。建物の色調は、土系の舗装と調和する濃いめのアースカラーとした。

（米田賢一／一粒社ヴォーリズ建築事務所）

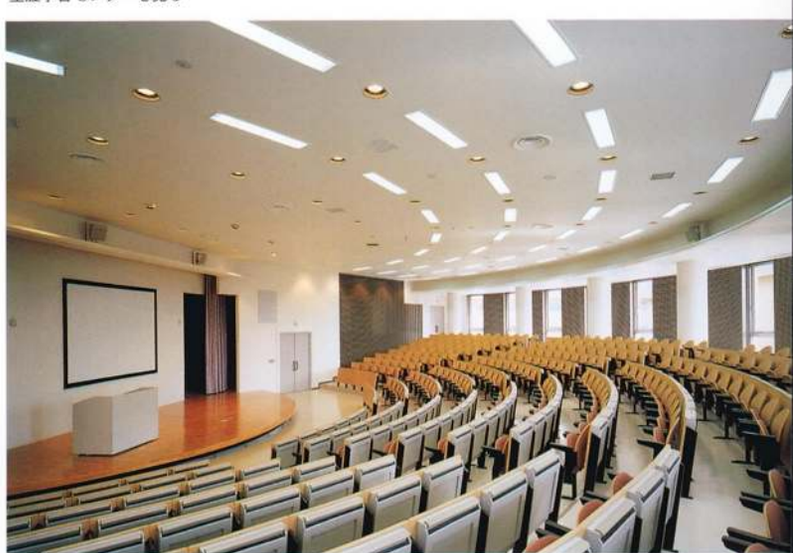


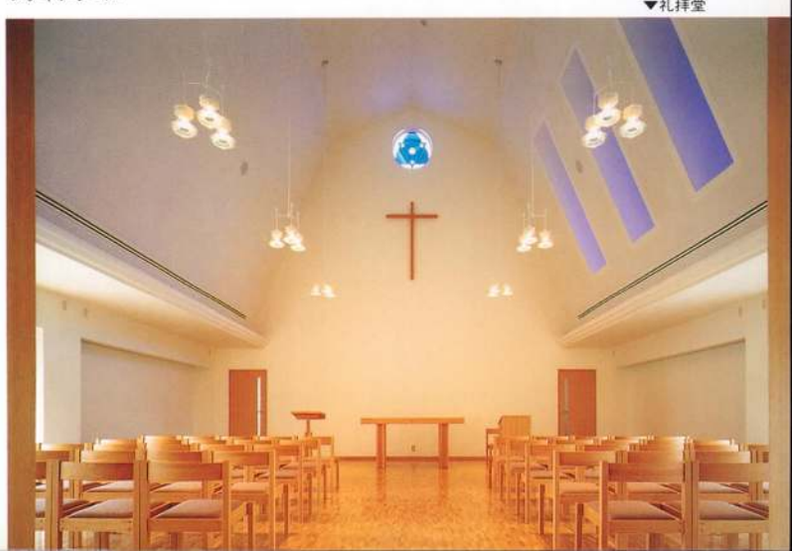
配置図　1：2600

所 在 地 ——滋賀県守山市三宅町250
敷地面積 ——39,491㎡
建築面積 —— 6,705㎡（６棟分）
延床面積 ——11,436㎡（６棟分）
構造規模 ——RC（一部S）
工　　期 ——1998年11月～2000年１月
最 寄 駅 ——JR東海道本線・守山駅
撮　　影 ——島　修一


手前：情報メディアセンター　奥：本部研究棟


生涯学習センターを見る


メディアホール


▼礼拝堂



作品
作風

設計監理■
大林組本店一級建築士事務所

施工■
大林組

西心斎橋ニューズII

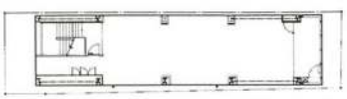
この建物は、「アメリカ村」と呼ばれる西心斎橋の一画に建っています。ここは休日平日を問わず、10代・20代のたくさんの若者が集まる、「心斎橋」という大阪の名立たる繁華街のなかでも、最もポテンシャルの高い場所のひとつです。

日中はほとんど歩行者天国の状態となる狭い道路に面して位置する、比較的小規模な商業施設として建築的にどのようなアプローチができるのか？　それが我々の当初からのテーマでした。

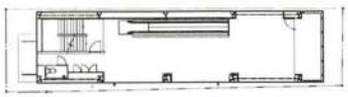
敷地は間口６ｍ程度のうなぎの寝床のような形状であり、必然的にファサードは道路に面した東側の一面のみとなります。

立地条件と建物用途を考慮し、周辺の雑多な環境や装飾過多の近隣建物群から一線を画しながらも、インパクトのあるファサードづくりを目指した結果、ディスプレイを兼ねたガラスを主体としたカーテンウォールのファサードデザインにたどり着きました。内部からのモード発信と外部からの視線獲得という機能を形態化した、ファサードの透明感と存在感がこの建築のねらいです。

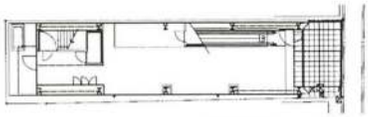
（山田耕治、槻尾輝雅／大林組）



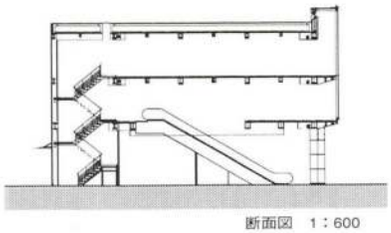
3階平面図　1：600



2階平面図　1：600



1階平面図　1：600



断面図　1：600

所在地 ―― 大阪市中央区西心斎橋2丁目18-16
敷地面積 ―― 174.43㎡
建築面積 ―― 132.87㎡
延床面積 ―― 381.34㎡
構造規模 ―― S、3F
工　　期 ―― 1999年６月～1999年11月
最寄駅 ―― 大阪市営地下鉄御堂筋線・心斎橋駅
撮　　影 ―― 山川高弘（大日フォトスタジオ）







南側外観

▼南側外観（右がショールーム棟、左が整備工場棟）

作品風作

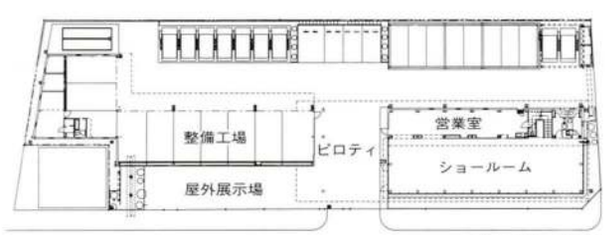
設計監理■
竹中工務店

施工■
竹中工務店

トヨタカローラ新大阪箕面営業所

トヨタカローラ新大阪箕面営業所は、箕面の山並がせまる神戸と京都を結ぶ主要幹線道路に面した郊外型自動車ショールームである。老朽化した自動車ショールームと整備工場を、営業を続けながら段階的に取り壊し、より質の高いサービスを顧客に提供するために建替えられた。設計にあたり、ロードサイドの看板建築が並ぶ中で、いかに街並に配慮しながら存在感を高めていくかがテーマであった。敷地の間口の広さを活かし、整備工場(1期工事)とショールーム(2期工事)を、それぞれ別棟で前面道路に対して並列配置した。「ガラス箱」のショールームからは昼夜を問わず展示車と接客風景を、「面」で構成された整備工場の切り取られた開口からは整備風景をそれぞれ積極的に「魅せる」ことで、顧客から信頼と安心を得ることを狙いとした。また、これら2つの建物に紅葉をイメージした山吹色の一枚屋根を架け、箕面の山並を見通すことの出来るピロティ空間を創出した。このピロティ空間は顧客を迎え入れるゲートとしての役割を持つ。さらに2つの建物の共用空間であり、箕面の山並を背景とした接客風景を「魅せる」もう一つの空間として、顧客と従業員の活気に満ちた接客の場となることを期待している。

(橘　保宏／竹中工務店)



1階平面図　1：1000

所 在 地 ——大阪府箕面市牧落3-20-21
敷地面積 ——1,805.01㎡
建築面積 ——　765.25㎡
延床面積 ——　858.61㎡
構造規模 ——S、2F
工　　期 ——1998年11月～1999年11月
最 寄 駅 ——阪急箕面線・牧落駅
撮　　影 ——庄野　啓（フォト・ビューロー）



ピロティ



ショールーム



▼夜景

gallery

ダブルウォールコンプレックス

設計　Studio S.E.A
藤井豊史+中村一美

化学メーカーの工場敷地内の、応接・事務・研究所の用途を持つ事務棟と、社員食堂・浴室等の用途を持つ厚生棟とが併存する複合用途施設である。

屹立する二枚の独立壁は、工事敷地全体のゲートであると共に、機能や利用時間帯の異なる両棟を適当に切り離すエクスパンションとしても働く。また、そこに挟み込まれたブリッジは、インテリアの外部表現であると共に、廊下・休憩所・避難通路・庇といった複合機能を発揮する。

建物平面は、敷地が持つ二対の位相のずれた都市軸をそのまま取り込み、二種類の直交座標によって構成される。一方の軸はパブリックな用途部分の、他方の軸は社内的な用途部分の基準として使用されており、その相互干渉が、建物内外にドラマを生み出す。位相差はそのまま外観にも現れ、一対は煉瓦張り、他はシルバーメタリック塗装の外壁として姿を見せる。

圧倒的なボリュームの独立壁とそれが従える列柱群は、古代建物のオーダーをも想起させる。そして、そこに角度を持ってぶつかるメタリックやステンレスなどの現代素材・・・時代さえをも超越した複合体が出来れば、と考えたのだった。



ふじい とよふみ
藤井豊史
1957　大阪生まれ
1983　大阪大学大学院前期課程
　　環境工学専攻修了
1983～　㈱大杉喜彦建築綜合研究所
1992　㈲ Studio S.E.A.設立

なかむら かずみ
中村一美
1958　大阪生まれ
1981　奈良女子大学家政学部
　　住居学科卒業
1981～　上田篤アトリエ　他
1989～　自営
1992　㈲ Studio S.E.A.設立

撮　影—喜多　章
企画編集—中村文紀（作品作風小委員会）







古都の景観を見なおす

宮崎　興二

京都の景観を保存しようという運動が昔から盛んに行われている。その運動の攻撃目標の最たるものは高さで、60mを越えてはならないこととなっている。ところがなぜか、高さ131mの京都タワーや、高さ848mの高みから京を見下ろす比叡山頂回転展望閣については、建設当初はどうであれ、今やだれも何もいわない。それどころか京都タワーはローソクのようだからありがたいという声さえあがっている。そういえば回転展望閣の方も僧の編み笠のようである。となると、どんなに高くても、かたちが気に入ればよろしいということになる。

では京都タワーや回転展望閣のかたちはほんとうに京にふさわしいのだろうか。じつは両方とも丸まるヌメヌメした曲面でできていて、直線的な碁盤目に覆い尽くされた簡素な美を誇る京にはふさわしくない。もちろん、曲面の中には円錐や円柱のように直線を動かせてできるものもあって、せめてそんな曲面なら京に似合うかも知れない。しかし、京都タワーは楕円を回転させた展望台と放物線を回転させたレストランからでき、回転展望閣は双曲線を回転させた屋根をかぶる。じつは、この三つの曲面は、直線では絶対にできない、いいかえればどう寝ころんでも京には似合わない、曲面のビッグスリーなのである。古都の景観は高さでなく「かたち」からこそ見なおすべきである。

京都大学人間・環境学研究科教授

バラバラでいっしょ

中山　詳三

烏丸通りに面した東本願寺の土塀に大きな看板が掛かっている。カラフルな文字で『バラバラでいっしょ－差異を認める世界の発見』と書かれている。目にした瞬間、すべてを理解した訳ではないのになぜだかハッとした。もう一度ゆっくり読み直してみて、ようやく心が落ち着いた。

妻が4年程前に障害者の施設を設立し運営している。パレットのリサイクルやボトルフラワーの制作を主な仕事とした共同作業所のようなもので、最低賃金保障を目指して頑張っている。

それまでハンディのある人達と接することはほとんどなかったが、以来施設を訪れたときや休日のバザーで綿菓子屋やふうせん屋を手伝うときなど、一緒になることがある。初めはどう接したらよいのか分からず必要以上に優しくなったりした。でもそのうち隣れみや同情によって理解したつもりになること自体が問題ではないか、と気づいた。あるがままを受け入れ、普通に接すればよいのだと。

そのようなときに『バラバラでいっしょ』に出会った。

そうなんだ。みんな顔や声が違うように、性格や様々な能力も皆違うんだ。違うことこそ当たり前なんだ。

看板の文字が一字ずつ違う色で書かれている、その深い意味に気づいたとき、心も身体も軽くなり、やわらかな気持ちになった。

京都府土木建築部住宅課長

コンピュータ出力問題

遠藤　秀平

昨年末から2つ程のコンペに参加した。1つはオープンコンペであり、もう一つは2段階の指名コンペであった。これ迄にも多くのコンペに参加してきたが、今回は敷地写真のデータ合成などの要求も有り、特にCGなどコンピュータによる作業の比率を高くした。このコンペでは、CPUの処理速度の向上もあり順調に作業をすすめることができた。ところが最終の出力に多くの時間をとられ、予想外のストレスがたまってしまった。

多くの設計事務所で囁かれている嘆きであると思うが、画像の処理能力の向上にくらべ出力環境が追い付いていないことがストレスを増大させている。また写真と同じように美しくなったがゆえに時間を必要とし、モニター上の色との違いなど様々な課題があり再出力のケースが多い。そして、昨今のエコロジー問題が拡大する中、我々のコンペに費やすエネルギーも勘案するとなおさら再三のペーパー出力が気にかかる。

2つのコンペ中にコンピュータのさらなる能力アップの必要を感じ、またその向上は今後のコンペをさらに刺激的なものにかえてくれることを実感した。あと数倍の処理速度の変化は基礎データの共有などエネルギーの浪費を抑えながら、提案もバーチャル空間になり、仮想体験審査など大きな変化を起こしてくれる。そして、もうすぐ可能なバーチャルコンペの真価は、なによりも出力時のストレスを解消してくれることにある。

遠藤秀平建築研究所

都市の表象

桑田　和明

近鉄奈良線で京都に近づくと、駅ビルが次第に巨大な姿を現わし、街をすっぽり覆ってしまう。路線がカーブしているので終点への斜めからの進入はきわめて緩速、いつも、まざまざとその凄さを感じさせられる。その圧倒的な存在は、建築と呼ばれることを超えているようで、複合機能を内包する「小都市」といえるスケールである。

10年程前「北米・カナダの都市環境と建築思潮の視察」に参加したとき、「都市の色彩」についての報告書のなかで、ミシガン湖畔から遠く望んだシカゴの姿に感動し、「この景観は1人の作家の作品ではなかった」と書いたことがある。

京都駅ビルは、その立地とスケールのために、近視的な閉鎖感に対する表象上の解答を出さなければならない使命を帯びていた。新幹線のプラットフォームの長さを超える東西の巾と、天に聳える丈のプロセニアムをもつ舞台が京都に浮かぶ。街を背にしたその面は、出入の変化をつけた3つの分節に区分され、ガラスや曲面をもつアルミや原色のものが、形・材料・色の相互作用によって不連続的連続を構成していた。

新幹線でアクセスすると、駅ビルは京都の風景に、いきなり幕をひく。物議をかもしたタワーは見えず、旅人に幕前の楽しみを与えようとしているのだろうか。

松村組品質環境管理本部長

建築の眼

こころを癒す環境デザイン

いよいよ2000年。20世紀に築かれてきた価値観を大きく転換しなければならない時代の到来である。「ものを得る」ことを裕福とする時代は終わり、「こころを育む」ことに価値を見出す時代である。しかしながら、現代社会はリストラによる社会的ストレスの増加、家庭崩壊や学級崩壊、生活環境の変化によるPTSD（心的外傷後ストレス障害）などが多発し、それらを改善するための「こころの癒し（ヒーリング）」が求められている。「こころを癒す場」は、現代社会にはどこにあるのだろうか。本特集では、さまざまなストレスに病む現代人の「癒しの場」を、生活空間の中から再発見するとともに、「こころを癒す」環境づくりに取り組む各界の実態を紹介する。

計画分科会幹事●鈴木克彦

総論

癒しの概念と環境づくり●高柳和江

こころを癒す住環境のデザイン●石田章一

各論

住宅での癒しの環境づくり～マイナスイオンの可能性～●菅原明子

医療福祉施設における癒しの環境デザイン●田中直人

「エイブル・アート」でなぜ癒されるのか●播磨靖夫

震災遺児の癒しを目指して●樋口和広

コンパニオンアニマルたちと暮らせるまちに●中橋廣美

オフィスでの癒しの環境づくり～NTT京阪奈ビル設計ノート～●上村廣志

ヒーリング・ランドスケープ●浅野房世

「癒し」とは～坊主バーの試み～●清　史彦

安らぎの旅～四国遍路～●梶川　伸

癒しの空間ビジネス～サンドセラピーの治癒（砂塩温熱サロン）～●力石秀夫

みてあるき

癒しの時・空間

●

小浦久子／鈴木克彦／田中直人／紅谷昇平／松田奈緒子／吉村英祐

総論1

癒しの概念と環境づくり

高柳和江

癒しの環境とは

癒しの環境とは、訪れる人が病気を持った細胞の塊として扱われないところ、人間として、『病を持っている人間』として主体性を持てる環境である。病院が刑務所と違うのは、病人が主体性を持てることである。いやなら出て行けることである。肉体的苦痛をとるために行ったはずの病院で、肉体的苦痛をさらに与えられる、これが拷問でなくて何なんだろう。検査や手術という名目では、がまんしなくてはという気になる。十分な説明を受け納得すると、患者が治療の主役となる。このとき、設備や医療施設の安全は基礎の基礎である。痛みや苦痛をとるためのテクニックは当然求められる。安心できる治療を受けられることは医療の本質である。さらに病人の免疫が高まり、病と闘う力が与えられるところが、癒しの環境である。

●

私は癒しの環境の理念を、患者の権利を守る環境、個人の尊厳を守る環境、生きる実感がわく環境、チーム医療が受けられる環境、社会に参加できる環境と考えている（**表1**）[1]。いずれも、体力や精神力が弱ったとしても、人間として享受できる権利がある環境だからである。

表1　癒しの環境の理念
- 患者の権利を守る環境
- 個人の尊厳を守る環境
- 生きる実感がわく環境
- チーム医療が受けられる環境
- 社会に参加できる環境

患者の権利を守るためには、患者の権利を知らなければならない。1970年代に米国病院協会が制定した患者の権利章典によると、第1条は患者は熟慮し尊敬されたケアを受ける権利があるというものである[2]。第2条、第3条は主治医から診断、治療、予後について完全な情報を受ける権利、処置や治療を行う前にそれを行う医師の情報、インフォームド・コンセントを与えられる権利があるとする。こうしたインフォームド・コンセントを尊敬をもって受けるには、外来でも、入院病棟でも、個室でプライバシーが守られる環境が必要だ[3][4]。外来の中待ちで、カーテンやアコーディオンカーテンでは他人に話も聞かれ、顔も、身体さえも見られてしまう。病棟でも、ナースステーションの片隅では患者が尊敬されることにはならない。

●

個人の尊厳を守る環境とは、人間らしく存在できることで、寝ること、排泄、食事はその基本である。大部屋はプライバシーで問題があるし、ベッドは硬くて眠れない。自分の好きな絵や写真をかざる、このための自分だけの壁が欲しい。病人にとって排泄は基本である。欧米では患者ひとりに一つのトイレがある[5]。日本では絶対数が少なく、洋式も少なく、臭く、汚く、狭く、点滴台や荷物、コートなどを持って入るには不便で、病院のトイレ環境はあまりにも貧しい。いまだにスリッパに履き替えさせるところもある。食事は人間の楽しみの一つであるが、それを奪うのが冷たい給食である。各病棟に配膳専用キッチンをつくると同時に、家族が使えるキッチンが欲しい。食事時間も内容も選べるとありがたい。

自然と語り合い、水に思いを託すことで、また動くものを見ることで人は元気になり、生きている実感がわく。チーム医療が受けられる環境としてナースステーションではなくスタッフステーションを、医師もコ・メディカルも使えるステーションとしてつくる。病棟薬剤師の部屋を設け、薬剤管理は点滴薬の調整をふくめ、別室でできるようにする。カンファレンス室を設け、互いのコミュニケーションを図る。社会に参加できるように社会との接点を増やす。たとえば新聞の配達、郵便の受付、電話の設置など、看護婦の手を煩わせずに、社会と結びつけることは重要である。病棟のベッド以外に行くところをつくること、面会室もいくつかつくる。ほっとなごむ癒しの空間を演出することは重要である。子供のプレイルームに相当する大人のデイルーム、ボランティアルームも必要である。

●

癒しの環境の要素には心理的環境、身体的環境、空間的環境、治療的環境がある（**表2**）[6]。心理的環境とは、なんといっても落ち着くことのできる環境である。待合室が無機質なものから家庭的な雰囲気に移行しているのは、この流れであろう。身体的環境は椅子がゆったりとして、ベッドや枕などがふかふかでリラックスできるものであること、空間的環境は天井の高さ、空間のひろがりなど。家具や壁の素材などがアットホームで居心地よい。サンディエゴ小児病院の待合室（**写真1**）には、小さな洞穴がつくってあった。治療的環境は病院が病院らしくなく、白熊の診察台や、壁一

表2　癒しの環境の要素
- 心理的環境
- 身体的環境
- 空間的環境
- 治療的環境



写真1　親が子供の手術を待つ待合室、片面は全面窓—サンディエゴ小児病院—

面に戸外の大自然を描いた放射線照射室などの工夫がある。

ストレス反応

大学病院の外来に来る患者の８割は、ストレスからくる病気である[7]。複雑系で経済の低迷が続く日本では、社会的にも経済的にもストレスだらけ。心理的ストレスが身体に影響を及ぼし、病気という身体的ストレスを与える。ここで病院の環境を冷たいと感じる心理的ストレスがあれば、さらに身体的にも影響がある。こうしたストレスで免疫機能が下がる。

表３　ストレスに対する人間の反応
- 闘争と逃走という「抵抗行動」
  ――カノン
- 降伏と忍従という「凍結行動」
  ――セリエ

ストレスに対する人間の反応には二つの形がある。闘争と逃走という「抵抗行動」をおこすこと、もう一つは降伏と忍従という「凍結行動」になること（**表３**）。前者ではアドレナリンが高まり、脈が速くなり、血圧が上がり、瞳孔が散大する。高血圧から脳卒中になったり、心筋梗塞になったりする。後者では、ストレスから胃潰瘍になったり、うつになったりする。一般的に日本人はこちらが多く、小さなストレスを溜め込み、悪循環に陥ることが多い。病気というストレスに対して緊張をときほぐし、落ち着きリラックスできる環境と、患者に元気が出る環境で凍結行動を解除し、病気と闘うぞという気概を育てる環境を、癒しの環境という。

患者が認識する医療環境分析

患者が入院したとき、時期によって１）医療環境、２）身体的環境、３）生理的環境、４）生活環境、および５）みとり環境の５つの環境を認識する（**表４**）[8]。このおのおのに、ハードとソフトおよびサービスが必要になる。

表４　患者が感じる医療環境認識
- 医療環境
- 身体的環境
- 生理的環境
- 生活環境
- みとり環境

１）医療環境

患者が病院に来るのには、二つのルートがある。救急と一般外来である。救急は突然の症状、怪我で、本人は混乱している。家族も本人以上に興奮している。生きることが最も優先する。救急外来で一番大切なのは、生命の安全という確固たる安心感を患者に与えることである。救急車の搬入場所が人目につかず、吹きさらしではなく暖かいこと、救急車のストレッチャーから救急室のベッドへの転送がスムーズであることなど、入り口のハードも安心感を高める。

一般外来の病院のロビーは、大きくて天井の高いものが多い。さあ、どうだ、大きな病院だろう、しっかり、待ってもらいますよといっているみたいだ。カウンターが一列に並び、隣からも後ろからも話の内容はまる聞こえだ。ここに、そろってカウンターに向けて長いすが並ぶ。

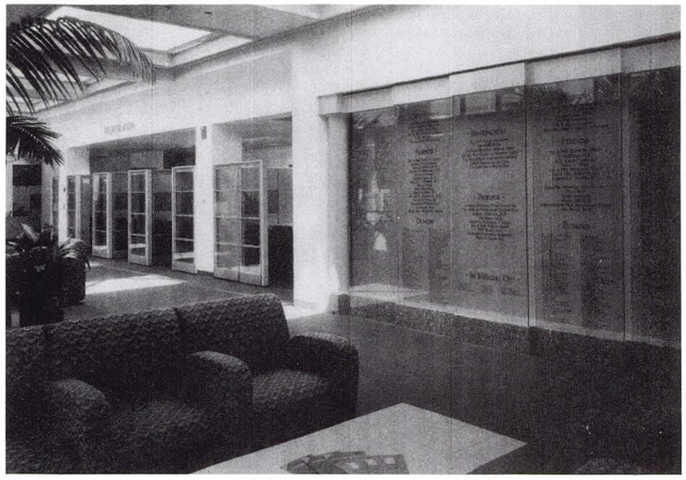


写真２　外来には、ひとりずつ会計を含め事務的な相談ができる個室がある

患者の権利はプライバシーを守るところにある。総合案内のあとは、個室ですわって、事務手続きをとれることが望ましい（**写真２**）。会計もここを利用できれば、完全に守秘義務が守れる。初診受付が早朝に長蛇の列で、昼過ぎは会計が長蛇の列。早朝の会計は無人で、昼過ぎの初診受付は閑散としている。空間的にも人間の配置でももったいない。コンピュータ時代の受付は、患者中心の空間づくりが可能である。手続きの間患者と家族がゆったりとした安楽椅子にすわって、コンピュータの端末は病院側と本人が見ることも可能、行き先も示してくれる。ついでに言えば、これだけクレジットカードが汎用されている時代に、病院の支払いだけが現金というのは問題である。ここから盗難などという余計な問題まで派生してくる。待合室は家庭的雰囲気で、隣の人と顔を合わせずに、でも家族で固まれるように、椅子の配置を考える必要がある。

２）身体的環境

病人は痛みがあり、精神的にも病気になったことでストレスがある。睡眠と傷の治癒は大きな相関がある[9]。ベッドで安らかに眠れることは必須なのに、病院では眠れない。原因の一つは騒音である。廊下や部屋にじゅうたんが敷いてないので、看護婦の声や医師のスリッパの音がうるさい。医療器機の器械音も耳につく。モニターやナースコールは緊急を知らせるためのものであるから、他人が鳴らしたものであっても気になる。大部屋では他人の出すうめき声、痰を出す音、咳、いびき、話し声など音だらけだ。

ベッドは硬くて眠れない。米国ではICUのベッドでさえ、やわらかい。心臓マッサージなどのいざというときは枕もとのボードを胸の下にいれる。硬いベッドマットは腰にはよいというが、高齢者は褥創ができる。夜中に寝返りを何度も打たないと寝られない。せめて、眠れるベッドと枕を。

３）生理的環境

五感に合わせて、生理的な癒しを部屋によって具体化する。病人は聴覚が一番鋭敏である。目をつぶっていることが多いし、死ぬ間際まで耳は聞こえる。騒音がないだけではなく、水のせせらぎや風のそよぎ、小鳥の囀りなどの心地よい音、家族の声などの安心する

音、バックグラウンドミュージックなどが聞ける環境をつくる。触覚はシーツの感覚、ベッドの手すり、電話の受話器の持ち手、テレビのチャンネルの握りなどで感じる。トイレの便座の冷たさも患者を凍えさせる。病室の素材は自然の物はエネルギーを発するとのことで、フロリダ地域医療センターでは珊瑚礁のような切り出し岩を使っていた。視覚は脳にインプットする情報が大きい。病院の待合室も家庭的なインテリアが多くなり、病室にも、家庭を思い出させる木材などが使われることが多くなった。落ち着くからである。食事は多くの患者にとって病院の唯一の楽しみである。味覚を刺激することは生きる糧である。臭覚は木々の緑や花の匂いで代表される。最近ではアロマテラピーも盛んになってきたが、これが健康な社会生活をしている人にだけ可能で、肝心の病気の人に与えられる病院の匂いは、消毒薬、トイレの匂いや厨房からの醤油の匂いしかないというのはなんとも不可思議な現象である。新しい建物では新建材のホルムアルデヒドの匂いまで加わり、大なり小なりシックハウス症候群にまで発展する。

4）生活環境

面会は癒しにもなり、ストレスにもなる。患者への面会人は、親しい家族と義理でたずねてくる友人などにわけ、前者はいつでも、後者は時間指定・場所指定をして、入院患者の平安を乱さないようにする。家族は患者が心を開くことができるので、より落ち着き、自己治癒力を高めることができる。多床室では他の入院患者に気を使って面会がつらい。患者が会いたい人にだけ会える、面会人がチェックできるシステムをつくる。場所も心が浮き立つ面会室が欲しい。

患者図書室など、患者が情報を仕入れることができる部屋は入りやすい場所にあり、入りやすい雰囲気が必要である。図書やインターネット利用など、内容の充実も求められる[10]。瞑想室など患者や家族の泣き部屋は必須。病棟キッチンも家族が患者の好きなものを作り、また、家族がコーヒーをゆったりと飲むために必要である。家族の控え室は家庭的なインテリアでゆったり休めるような椅子の配置など精神的に疲れている家族のための癒しの空間がいる。

5）みとり環境

亡くなっていく本人のニーズに応えられる、みとり環境が欲しい[11]。家族が心地よくみとれることも大切だ。家族のための宿泊室、補助ベッドの用意も欠かせない。患者さんのために医療器械が隠せること、患者さんが最期まで見たいものが置けること、そして音楽が聞ける設備をそなえる。窓から戸外が見られて、心が自然とつながっていることが必要だ。また、患者によっては暗い環境を望む人もいるので、二重の分厚いカーテンも必要だ。

癒しと免疫

癒しの環境では、免疫反応が高まる。免疫が高まれば、病気になりにくく、病気は治りやすい[12]。

重症治療室に10人の大学生を３泊４日入院させたところ、緊張と怒りが高まって混乱し、ICU症候群で見られる症状と酷似した症状を示した[13]。隣のベッドの患者が死ぬという修羅場で、次は自分の番かと感じたという。活気が減少し、疲労が増し、うつ傾向が増加し、ストレスと闘う方向にはなっていなかった。高圧酸素室という狭い空間に入った模擬患者では、室内での自分を、棺桶の中みたいとか、昆虫採集の虫みたいと、マイナスのイメージで客観視していた。ほとんど全員に、緊張が高まり、疲労が極度に増加し、うつ傾向が増加し、非常に混乱しするという「凍結行動」が見られた。ここで、笑いのビデオを見せたところ、疲労、混乱は少なかった。免疫力を示すNK活性は凍結行動群では低下し、笑い群では上昇した。癒しをもたらす環境としては、ノーマン・カズンズが笑いで病気をなおしたことが有名である[14]。内視鏡や画像診断などの発達で、医療の診断治療の過程での閉鎖環境はさらに増える傾向にある。今後の医療環境は、癒しを意識したハードとソフトを設定することが、患者の治癒力の向上に結びつくのではないかと考えられた。

環境のハード、ソフトそしてアプローチ[15]

ハードには建物、内装、サイン、照明、緑、庭園などがあり、北欧では建設費の１％はアートにまわす習慣がある。ソフトは職員である。技術的な職員のレベルと接遇の医療提供者、技術的・社会的なもののサービスである。サンディエゴ小児病院には魔法と微笑みがいっぱいの癒しの環境ですという注意書きがある。確かに魔法には発見がある。笑みもこぼれる。微笑みはサービスの基本であるが、職員本人がしあわせと感じていなければ、微笑みもない。職員の休憩室を含め、患者さんのことを忘れて憩える場所が必要である。

技術的・社会的なサービスはインフォームド・コンセント、クリニカル・パスやインターネット情報を含む患者情報提供システムである。プレントリ運動をしているグリフィン病院では、情報提供を患者中心に行うためにナースステーションに壁がなく、患者に情報を開示している。

現在は、医療提供者が中心の機能優先の病院であるが、機能優先だけではなく、患者優先、患者が主体性を持てる理念をふまえたハードが必要である。この意味で、ハードで分離をきちんとすることは大切である。米国のプレントリー運動の病院では、ナースステーションは存在しない。患者さんのそばで、直接看護をするハードと

表5　癒しの環境

A．ハード――建物、内装、サイン、照明、緑、庭園
B．ソフト――
　a．医療提供者（技術的、接遇）
　b．技術的・社会的なもののサービス
　　インフォームド・コンセント、クリニカル・パス、患者情報提供システム
　c．社会的接触
　　家族、友人、ボランティア
C．アプローチ――食事、笑い、芸術、音楽、代替医療など

システムにしておけば、とくにナースステーションは必要ない。婦長室も管理棟におけば、病棟のど真ん中におく必要はない。病棟のど真ん中には患者のためのリラックスルーム、家族室、図書室がある。病棟の真ん中にある図書室は薬の情報でいっぱいだ。インターネットで最新治療法を患者に知らせる役割も行っている。病棟は患者のものなのである。ディズニーランドのように、関係者がどこから出てくるのかわからない工夫をする。ホテルのように従業員の出入り口、通り道、働いている場所が一般ゲストにわからないようにする。現在の病院は関係者以外立ち入り禁止の札が大きく、立ち入り禁止の中にいる人間が主導権を握っていて、患者は「おじゃまむし」とひがんでしまう。職員は別の動線で出入りしてリラックスでき、気持ち良く、効率良く働けるようにする。関係者以外立ち入り禁止の札をはずせる構造をつくるべきだ。

●

アプローチには食事、笑い、芸術、音楽、代替医療などがある。ロンドンのチェルシーアンドウェストミンスター病院は美術館の中に病院があるのかと間違えそうなほど、現代アートに囲まれている。エデン運動をとりいれている米国のサンディエゴのヘリテージセンタはペット、子供、植物で患者と職員のQOLをあげているという。

社会的接触として家族、友人、ボランティアなどがある。外来と入院患者動線をはっきり分離する。外国の病院に行って不思議なのは、外来や廊下を歩いていて病人を見かけないことである。まず、そういうところを歩ける元気な病人は退院している。外来は社会そのものであるから、ホテルの廊下ではゆかたとスリッパで歩けないように、病院外来や廊下も社会の中と認識され、パジャマ姿はない。フロリダ医療センタは病院の中が地域の場で、広いロビーには川が流れ、木々の小道があり、地域の人が露店を出している。

パジャマ姿の患者にはプライバシーと尊厳がない。日本の病院では外来に検査や診察のために行く。病室のほかに憩うところがないために、外来に行くのだが、外来と入院患者動線を分離する構造が望まれる。外来患者や面会人が必要なところ以外に行かないですむように、サイン計画はしっかりしておく。看護婦の動線は短くても患者動線は長い病院もある。歩くのさえつらい患者にとって不便なだけでなく苦痛である。少なくとも、間違わない道、歩きやすい道、わかりやすい道、歩いていて楽しい道、もっと歩きたくなる道などが病院には求められている。

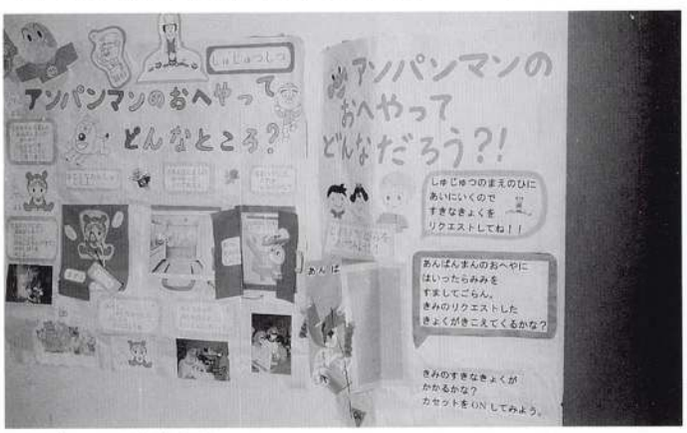
ストレスをとる環境

患者がストレスをおこさない構造的に安全な環境求められる。免震構造、ライフラインの確保などとともに、トイレに閉じこめられたり、ドアにはさまれたりすることのないように、ミクロの面でも安全を考える必要がある。泥棒がはいらない社会的安全も求められる。リスクマネージメントというソフトの安全が求められ、そのためのハードが必要になる。

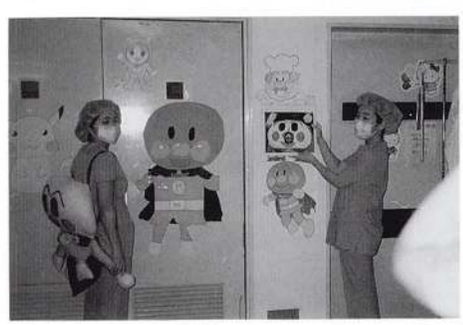
このためには、母のふところのように100%安全な場所が必要であり、現実逃避ができる環境がいる。レストラン、喫茶室、温室、多数の小さな憩いの場や瞑想室など、病院でも多くのことができるはずだ。

活気を生みだす環境

病院環境で冷たいとされるトップは手術室、二番目は検査室である。こうしたところでは、患者は待つこと、待つことに耐えることを要求される。このような場面では、前向きに病気と闘う姿勢を育てることが求められる。まず、現実を忘れさせる手立てがいる。好



△写真3　手術棟入り口 ―右は中央廊下。入院から手術日まで、いつでも家族が見に来ることができる―



▷写真4　手術室前室入り口 ―術前訪問時、受け持ち看護婦がアンパンマンを背負って待つ―



写真5　部屋には鳥かごが二つ。子供と老婦人のひととき

きなものを見せる。発見や驚きは立派な癒しのキーワードである。絵であれば数えるものを与えることもよい。やる気を出させる環境が必要だ。動くもの、動きを連想できるもの、想像力を働かせて明るく前向きに将来を目指せるような環境が必要だ（**写真3、4**）。

活気を生みだす環境として、スピリチャルな支援まで行うのが米国でブームをおこしているエデンの運動だ。一般に、施設に入っている高齢者は孤独で、絶望し、退屈している。だから無気力で死ぬのを待っている。1991年に始まったエデンの運動は長期療養施設入居者にエネルギー、活気、そして生命への愛を与え、入居者のQOLを高めようとするものである。小鳥のさえずり、ペット、こども、植物をいつも身近におくことで人間を元気づけるという理念なのである。入居者がケアを受ける受動の存在でなく、ペットや植物を育てることで癒される能動の効果がある。

痴呆とアルツハイマーのサンセットヘリテージ施設は、普通の家のようにアットホームなつくりである。バルコニーもあるが、それより外には出られない構造になっている。鳥かごがあちこちにあり（**写真5**）、ぬいぐるみのような犬が4匹も静かに歩き回っている。猫も堂々と犬と同居していた。子供が遊び、食事をつくる手伝いをしている。入居者の洋服も、表情も明るく、職員が何かといえば手を差し出し抱きかかえスキンシップを良く取っていた。

動物の感性は人間以上であるらしい。入居したばかりの老婦人が夜中にさびしくて泣いてしまった。小鳥がその異常を察して鳴き出した。小鳥の異常を知らせる声を聞いて、夜中の2時に60人の人が老婦人をなぐさめるために集まってきた。こうした親切な人の集まり、これがエデンなのだ。そして小鳥にこうした能力があるのだとは驚きである。ホームで亡くなる人も多い。亡くなる人は犬にはわかるらしい。その人の部屋にいて、追い出さない限り出ていこうとしない。終末期には、そばについていてくれるだけで癒しになる。犬はこれを実践しているのだ。犬のやさしさにはびっくりしたと職員は言う。

こうして、ペットが人間に生きることの大切さを教え、生活を豊かにしてくれる。田舎の美しい風景の庭で24時間看護で介護を受ける。ほかに、高度先進リハビリテーションや点滴治療も行うほか、統合的なアクティビティを高めるエデン運動の施設もある。

みとりの環境

病院で亡くなる人が8割をこえる日本であるが、畳の上で死にたいと望む人は多い。人生を回想し、亡くなるぎりぎりまで生を実感し、死後を肯定的にとらえることができるみとりの環境が必要である。このためには、リラックスできる家庭的な構造、家族や友人が気軽に立ち寄れる場所であるべきだ。生命を考えさせる動きのある水、木々、大自然が見えることも重要であろう。最近は病室から直接家に帰る方が多くなったが、霊安室は依然として大切である。霊安室と剖検室、家族控え室が地下の寒々しいところにあり、裏口から出ていってくださいという時代は終わった。外来患者入り口とは別に、入院関係者が通る玄関を大小二つ、さらに職員通用門をつくればよい。どこをどう通ろうとそのときの状況によればよい。霊安室を屋上につくった病院もあるが、屋上という眺めがよく癒しを多く取り入れられる環境は生きている患者さん、家族に開放した方がよいと考える。星を眺めて生きる希望を燃やし、末期癌から生還した患者さんの手記もある。病院は生きる人、家族を亡くしてもこれから生きつづけていこうとする人々の利用の方が多いのである。

●

癒しということを患者の立場に立って理解すること、ハード、ソフト、アプローチのどこから始めてもよいが、できることから行うことが肝要である。日本中が癒しの環境になることを願っている。

参考文献

1）高柳和江，癒しの環境1：癒しの環境とは，看護教育，36(3);4-7，1995.1
2）高柳和江，岩崎　榮，吉中　穣，説明された上での患者による治療の選択，日医新報，3569;95-97，1992
3）高柳和江，インフォームド・コンセントのインフラ整備が急務(上)，ばんぶう，78-82;1995.8
4）高柳和江，インフォームド・コンセントのインフラ整備が急務(下)，ばんぶう，84-86;1995.9
5）病院のトイレ，癒しの環境研究会会誌
6）高柳和江，癒しの環境8：医療施設における癒しの分類，看護教育，36(8);632-635，1995.8
7）高柳和江，なぜいま，「癒し」の時代なのか?，ばんぶう，184;22-27，1996
8）高柳和江，患者が感じる医療環境認識，医療病院管理学用語辞典第二版，ミクス，2000
9）Krachman, Samuel L; D' Alonzo, Gilbert E; Criner, Gerard J. Sleep in the Intensive Care Unit. Chest.107(6):1713-1720,June 1995
10）高柳和江，病院患者図書館の必要性――癒しの環境として，病院患者図書館，22，1・2，18―31，1999
11）高柳和江，死にかたのコツ，飛鳥新社，1994
12）Cornock, Marc A. Stress and the intensive care patients: perceptions of patients and nurses. Journal of advanced Nursing. 27(3):518-527,March 1998
13）Tanimoto,S, Takayanagi,K., The Psycological and Physiological Effects of an Intensive-Care Unit Environment on Healthy Individuals, Clinical Performance and Quality Health Care 7:77-82,1999
14）高柳和江，病院を「癒しの環境」につくり変える：安らぎが得られ患者の意欲と自然治癒力高める医療空間を，ばんぶう，1999.1-56-59
15）高柳和江，癒しの環境10：ハードがソフトを規制する，看護教育，36(10);844-847，1995.10

（たかやなぎ　かずえ　日本医科大学医療管理学教室）

総論2

こころを癒す住環境のデザイン

石田章一

その言葉の響きで古くから使われてきたように思われる「癒し」だが、わが国でよく聞かれるようになったのは、1988年、読売新聞の文化欄に造語として登場してからだいう。では本稿のテーマである「こころを癒す住環境のデザイン」は、現代の社会現象の側面に過ぎないのだろうか。

世界保健機構（WHO）が、設立された1948年に提唱した健康の定義とは、「単に病気ではないことではなく、“身体的、精神的および社会的に良好な状態”を指す」というものである。癒しが「健康になる」ことであるなら、同様に自分のからだとこころの癒しのほかに、社会との繋がりが健全なものでなければならない。

しかし、茶の間に飛び込んでくるニュースは、人のこころの傷や病が原因と考えられる事件や社会問題が余りにも多くなっている。また一方では、多くの人が家でなく病院で生まれ、高齢社会を経験して病院で死ぬ時代となったことも合わせて、癒しの場のもつ意味はますます重くなっている。

私たちの安らぎの場、癒しの中心である「住環境」のデザインは、未来に向けた、より本質を究めることが求められている。たとえ昨今の世相としての癒しが一時の流行であったとしても、「こころを癒す住環境のデザイン」への追求は決して流行に終わってはならず、こころとは、癒しとは、住環境とは、デザインとは、を多くの知見を動員して、ともに深く考えなければならない社会のテーマであり、キーワードであると思う。

私は、30年以上にわたりデザイナーとしてデザイン会社を経営してきた。刹那的で迎合的なデザイン業界の風潮に飽き足らず、人に喜びをもたらす独自の領域だけを専門とすることに決めて、ここ20年近く、医療や健康の世界に広くかかわってきた。

このテーマに、私ができることは、医療とのかかわりから得た知識や情報をもとに、この4つのキーワード、「こころ」「癒し」「住環境」「デザイン」のそれぞれと、その相互の結びつきについてのトピックを述べるしかないと考えている。

そのエッセンスのひとつは、病院や診療所の医療者に寄り添ってきたデザイナーのひとりとして、また治療や療養環境、患者～医療者間のコミュニケーションについての企画提案者として、さまざまな改革のシーンに参画してきた経験から住環境を考察するものである。とくにいま医療の質の重要なパートである看護をとりあげ、看護婦らがいまも仕事の原点、心の支えとしているナイチンゲール、その知恵から癒しの住環境へのヒントを探ろう。

ふたつには、たまたまそうした病院運営のビジョン追求のなかで、縁あって1998年、人間と歴史社（東京）からキャロル・ヴェノリア著による「呼吸する環境」を監訳し出版したが、その2年間におよぶ翻訳作業を通じて得た環境認識と住宅への小さな知識かもしれない窓からその風景を叙述する。

みっつに、私は医療の言葉をもっと深く知りたいと思い、ここ1年、京都・桃山にある京都国際社会福祉センター（KISWEC）で、医療、福祉、教育などの現場で適用される援助理論や人間理解のさまざまな知見や手解きを学んできたが、ここで触発された意識をもって住環境のデザインがいかにあるべきかを見渡してみよう。

ナイチンゲールに学ぶ住環境

いま医療提供の現場は、サービスの経済性と質の向上という二律背反で悩んでいる。患者満足の多くの部分を占める看護の質にも、人間的温かさやスキルを重視してきた従来のプロセス医療に加え、マネジメント導入による成果を重視した成果医療へと移りつつある。

看護といえば、一般には、かのナイチンゲールにイメージが結びつくが、このような現実とのギャップを越えて、ナイチンゲールに関する出版物はよく売れているらしい。

フローレンス・ナイチンゲールは、ビクトリア朝の繁栄期、献身的な看護の先駆者、慈善者として知られるが、看護について多くの著作を残しており、「癒すのは自然であり、看護はそのために整えることである」というなど、自らの看護経験を通して得た思想と論理、健康についてのプリンシパルを述べている。なかでも住居・建物の環境と健康の日常的な関係には多くの紙幅をさき、空気、水、光、音といった自然と人間のかかわりに注目し、それを強調している。

住環境にふれた一例では、「看護覚え書」序章において「(病気の原因というものは一般に考えられる症状などでなく）新鮮な空気とか陽光、暖かさ、静けさ、清潔さ、食事の規則正しさと食事の世話のうちのどれか、または全部が欠けていることから生じる症状であることが多いということなのである。そしてこれは、病院看護においても家庭看護においても、まったく同様にみられる」と書いている。とくに換気についてはこと細かに指摘し、看護婦が細心の注意と、何をさておいても患者に必要なことは「患者が呼吸する空気を、患者の身体を冷やすことなく、屋外の空気と同じ清潔さに保つこと」であるといっている。とりわけ換気という「小管理」を強調しながらも、1日に2回、窓を開けて新鮮な外気を取り込む、気配り程度の換気の考えを批判し、汚れた空気の出入り口の設置など、建物自体が呼吸する仕組みをもっていなければならないことを主張した。

わが国でもいま、やっと住宅は、熱や光の現象を分析し制御する技術やデザインが開発されているが、一日9割もの時間を屋内で過ごすともいう現代の住環境において、ナイチンゲールの健康や環境に対する感覚や洞察は、未来の住宅が備えるべき基本であり、人が

健康に暮らすための基本、日常の生活文化として活かされなければならないだろう。

地球環境と境目なくつながる住環境

先に紹介した「呼吸する環境」の原著者キャロル・ヴェノリアは、西海岸で活躍する女性建築家である。1996年秋、ボストンで開かれた第９回ヘルスケアデザインシンポジュームの書籍売り場で見つけた原書「Healing Environments」は、多くの手を経て翻訳された。次々に立ちはだかる建築専門用語、しかも建築現場でしか使わない方言まじり？の言葉との闘いの２年間であったが、そこに見えてきたものは、住環境にまつわるすばらしい現代の健康哲学であった。多くの文献から引用しながらも、環境と癒しについての多面的な考察を試みた独自の考えを述べている。

たとえば「環境に境目などない、地球の健康なくして一人ひとりの健康など存在しない」という価値観から「地球環境をよくするには、一人ひとりをとり巻く個々の環境をよくすること」であり、よい環境がほしいなら「誰でも今いるところからスタートできる」ことを執拗に述べている。また「多くの人は、物理的環境が健康に影響していることに気づいていない」とし、人の心身の健康は環境によって変わること。本来「癒しの環境に身を置くとき、人はそれが（自然に）分かるものである」こと。だから癒しの環境のよしあしに「分析などいらない」ともいい、なによりも環境への私たちの感覚と認識の必要性を強く説いている。

この見渡しのきいた提言、女性らしく細やかで日常的な目線が、多くの日本人読者の反響を得た。建築家や医師団体からもお呼びがかかった。ある東京の看護婦は六本木の書店でこの本と出合い、１年でカバーがボロボロになるほど読み返したとメールで伝えてくれた。同書には、設計者にも生活者にも必要な「こころを癒す住環境のデザイン」についてのすべてのエッセンスがあると自負している。

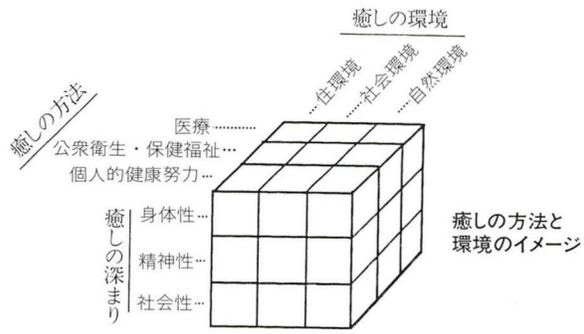
同書でキャロル・ヴェノリアは、空間の健康度の評価や新しい環境の創造の目標として次のことを提案しているから、チェックリストとして紹介しておこう。　※同書より。（ ）内は石田

1）肯定的な自己認識（環境は自らを映し出す鏡である。可能性を認識させてくれる）

2）自然、文化、人間とのつながりを深める（人間を、より壮大な自然体系に属していることを気づかせる）

3）プライバシーを考慮する（自らを知り、アイデンティティを高め、心のバランスを取り戻す）

4）身体に害を与えない（有害な建材だけでなく、生命力を損ない阻害する建物の可能性）



癒しの方法と環境のイメージ

5）意味のある、変化していく刺激をもたらす（気温、採光、音色、健やかさのために適度な変化が重要である）

6）リラックスする時間を生まれやすくする（速いピッチの現代の避難場所をつくり、心身のバランスを整える）

7）生産的な形で、環境と私たちが相互に作用することを可能にする（自ら決定する能力と積極的な感情を高めてくれる環境であれ）

8）一貫性と柔軟性とのバランスを生みだす（時代や社会、季節、家族の変化に対応できる建物環境であれ）

9）美しい（美の創造、体験は直接的、全体的な癒しであり、生命を吹き込む）

かけがえのない生命関係と癒しの環境

社会福祉士やソーシャルワーカーなどの養成を行っている京都国際社会福祉センター（KISWEC）では、医療、福祉、教育などの現場で適用される援助理論や人間理解についての知見や手解きを、福祉系大学や援助経験者を講師に招き、さまざまな援助専門講座を開講している。その内容は、技術訓練をはじめ心理学、行動理論、精神病理学、エコロジカル・アプローチ、家族療法など多岐にわたるが、その根底はどこまでも多面的な人間理解である。

講師のひとりであり、長年、京都府立洛南病院で独自の絵画療法を行ってきたルガール社・山崎俊生氏の講座テキスト（絵画療法）によると、人間は、誰しもなくてはならない生命関係、いいかえれば「それがなくなれば生きて行けなくなる意味関係」をもっているものである。それは想像するより多様であり、氏は、その関係を５つに分けて考えることができるという。つまり自分自身との関係、他者との関係、自然との関係、超越的な関係（宇宙的、無意識世界など）、時間（人生）との関係がそれである。これらの関係をもつことを氏は「信交」といい、人が生きようとする力の源泉であるという。このような生命関係が喪失したり混乱すると、絵画作品の構成能力があきらかに低下すると説明する。たとえば分裂症の患者の絵には、そうした関係が認められないことが多いらしいが、絵を描くことを通じて他者から認められ理解される関係を自覚し、それを契機に回復に向かう例もあるという。ちなみに、氏の絵画療法の独自性は、分析を一切やらない点にある。セラピーもクライエントも一緒になって描く。そしていま描いた絵を語ることで自分や大切な関係に出合い、癒しに向かうという一種の自己療法なのである。

また、同センター・理論講座の家族療法では、たとえば家庭内の問題児の治療にも、家族全体を面接するということを学習する。来談する家族によってさまざまに異なる関係パターンがあるのだが、その観察によって家族関係の把握から少しずつ問題を紐解いていく

のだ。つまり問題は、問題児にあるのではなく、その環境にあり、家族の関係の歪みにあるということである。

このようなこころの癒し、治療の専門家の現場を見ていくとき、癒しの器としての住宅は、生命関係や循環する家族関係とりわけ住人がかかえる複雑な問題、こころの深い癒しについて、いったい何ができるのだろうか。

私は、こころの癒しとは「自己にとってかけがえのない意味、生きがいを知覚すること」ではないかと考えているが、これからの住宅や都市には、このような生命との関係性、人間理解の理論をどのように図面化するか、その感性と構築技量が、いま必要だ。癒しや援助の理論を備えた建築家の活躍が待たれている。

癒しを生みだす力、感じる力

癒しは、自己と外界、人と環境との関係や相互作用、その全体性への認識ではないだろうか。しかし、この現世を創世した神は意地悪である。個々の事象・事物は目に捉えることはできても、それらのつながりや全体性は、こころの目、察しの目で見ぬくしかないようになっていて、客観の場には、ものごとをなおさら複雑にしてくれる。癒しは、つながり、関係性とその循環・調和の結果である。目に見え手にとることのできる物性を、どのように変えてみてもこころの癒しにつながるものではない。

私は、最近、全く違うとされる事柄においても「相互につながってひとつ」であると感じることが多い。たとえばスタートとゴール、表層と本質、問題世界と問題点、組織と個人、若者と老人、マーケティングとセールス、こころと身体など、すべてはチューブを巻き返したように、あるいはメビウスの輪のように、結局はひとつで、そのつながり関係そのものが本質であり、現代は、分けて考えることが原因でおこる問題がまことに多いことに気がついてきた。

だからデザインは、いままで分けられた両者の概念を並べて、そこに新しい循環のための組み合わせを考えることではないかと思えてきている。デザインは、アートとサイエンスを通訳し、表層と本質の循環を促すことのできる唯一の高級な実学でなければならない。

先のキャロル・ヴェノリアによる「呼吸する環境」では、癒しの環境にはふたつの意味があるとしている。ひとつは「人を癒す空間を見つけだし造り上げていこうとする」こと、もうひとつは「私たち自身もその空間によって癒しをもたらす者になる」ということである。癒しは癒しを感じとることができる者にこそ提供の資格があり、またそうすることで癒されるという関係になっている。看護婦は、患者を癒す存在には違いないが、癒さなければならない患者その人に労われたとき、もっとも深い癒しに入るということを聞いたことがある。看護する者される者を超えて、自らヒーラーとなる生き方が、癒しの環境をつくり自らも癒される。患者と看護婦を分けて考える観念には、この癒しの世界は存在していないのではないか。

聖マリアンナ医科大学・長谷川和夫氏は、著書・森田療法入門のなかで、第2次大戦中ドイツのユダヤ人収容所で辛酸をなめたオーストリアの精神医学者フランクル博士が、ドイツ軍に抵抗したユダヤ人がアメリカ軍により解放されると同時に神経症や心身症になった事実に着目し、人間は本来三つの価値に向かうと考えたことを書き、これはそのひとつ「態度価値」を優先する生き方であると紹介している。「態度価値」とは、不安があろうがなかろうが、自らの態度を「ありのまま」に整えることであり、そうすることで、どんな前途も開けてくるいうこと。学問的に価値を規定するのではなく、まず外形を整えることが重要であることが書かれている。

一般には、なんでも外形、外観は軽視され後回しにされることが多い。とくに日本人に多いのだが、ここでいう全体性、関係性を考えると、表層は必ず本質に循環するから、なんら不思議なことではない。自ら手をあげ態度を示す生き方は、キャロル・ヴェノリアの自ら他者を癒そうとする生き方であり、フランクル博士のいう態度価値に通じるものである。

さいごに

癒しの住環境は、生命との関係性に満ちた場であるといえる。建物が病むことは、人が病むことにつながり、地球が病むこと、つまり地球環境を傷つけることになる。

花人・川瀬敏郎は、花器がなくても、どんな場所でも、花を「生ける」ことができるという。こころの住環境と人の関係はこの花器と花に似て、どちらに重点をおいて考えるものでもない。両者は自らバランスをつくる。誰にとっても、もっとも快い環境は場所により、折々の季節により、こころの綾により、また別の環境によって絶え間なく変化していると考える方が自然だろう。しかし、それは完全を期すものではない。森田療法のありのままを実践するなら、多少の欠点、難点は受け入れることでバランスがとれてくる。

環境の設計においてもあらゆる可能性、全体性をさぐらねばならない。環境のなかで暮らすことにおいても、感じる力と自らヒーラーとなり、他者を癒そうとする生き方、黙って態度価値を優先する生き方がすべてである。

また、住環境の癒しを創造するには、生活者の視点をもち、生活者に提案支援する態度価値としての、自らヒーラーになろうとする意気込みの設計と建築がほしい。それは必ず通じる。生きる意思と他者の受容をもって自己を異化しつづければ、宇宙の呼びかけに共鳴し新たな生命を生みだすことができる。より深い人間理解のための知識、情報、ネットワークを駆使していきたいと思う。

本稿が、読者とともに「こころを癒す住環境のデザイン」を考えるきっかけづくりにでもなれば、このうえない喜びである。

参考文献

1）Florence Nightingale 著・薄井坦子訳「看護覚え書」、現代社
2）Carol Venolia 著・石田章一監訳・神木妙他訳「呼吸する環境」、人間と歴史社
3）山崎俊生著「親のない天才たち」、ルガール社
4）長谷川和夫著「森田療法入門」、サンマーク文庫
5）漆崎一朗・栗原稔監修「QOL その概念から応用まで」、シュプリンガー・フェアラーク東京

（いしだ　しょういち　ヘルスケアデザインコンサルタント
日本 HIS 研究会理事・事務局長）

各論1

住宅での癒しの環境づくり～マイナスイオンの可能性～

菅原明子

「癒し」全盛の世の中、新聞ニュースでも「癒す」というネームを聞かない日はないぐらい、日常生活にいきなり密着してきた言葉のようだ。女性誌などでも「癒し」に関する特集が売上を左右するとか。「癒し系の人」というジャンルも登場している模様である。昨今の、環境や健康に対する一般の人たちの意識・行動等を見ていると、あながち一時の「ブーム」というわけでもなさそうである。

アロマテラピーやガーデニング、旅行など「こころを癒す」ものが世にあふれているが、まだ「即効果」的な癒しが全盛のようだ。疲れたから癒す、ストレスまみれの心を癒す、そんな感じである。項目的には対処療法的な癒しで十分かと思うが、やはりその根底にあるのはくつろぎのある、ゆったりとした生活リズムのようなものではないであろうか。気分や精神的なもの、そしてその先にある健康は、やはり身体の生理的な効果によると思われるので、今後、癒しは「毎日の意識しない日常空間」という方向へいくように思う。

「住宅環境」はいろいろな意味で私たちを癒し、健康にする重要な場所であるのは間違いない。その大切な居住空間で私たちが毎日呼吸し、身体に取り込んでいる空気に関して、マイナスイオンテクノロジーを使った「癒し・健康」の可能性を見ていきたい。

シックハウス

シックハウスという言葉が、新聞やニュースをたまに賑わせる。その筋の専門家や市民運動の団体、環境に気を使う人たちの間では知らない人はいないであろうという言葉である。

昭和の30年ぐらいまでは、私たち日本人は「木の家」いわゆる木造住宅に住んでいた。障子や襖があり、畳の上で多くの時間を過ごす生活であった。日中は適当なすきま風が通り、クーラーのない時代、真夏などはかえってそよ風が心地よさを誘ったものである。家の周りにも緑が多く、四季それぞれの花が咲く風景も随所に見られたように思う。この風通しの良い心地よい木造家屋というのは、言い換えると「マイナスイオンをたくさん発生させる空間」とも言えよう。現代の住宅事情はというと、気密性やプライバシー重視のつくりになってきており、アルミサッシやビニールクロス、新建材の化学物質資材で、当時の木造住宅のような「心地よさ」はなくなってしまっている。この「心地よい」という感覚の話を、科学のお話に持っていくキーワードが「マイナスイオン」なのである。

化学物質過敏症の原因となりうる物質

食品と添加物等	穀物や魚介類、タマゴ等のタンパク質、食肉に残る家畜用の抗生物質や成長ホルモン剤、野菜や果物の残留農薬、着色料、甘味料、保存料、燻蒸剤、防カビ剤、果物等の成熟剤やワックス、包装用のプラスチックの可塑剤、缶の裏張りに使われるフェノール樹脂
衣類	ホルマリン、防虫剤、防炎加工剤、防湿加工剤、接着剤などの有機溶剤、染料、クリーニング店の加工剤、合成繊維の下着、折り目をつけるパーマネントプレス剤、柔軟仕上げ剤
室内の汚染物質	ビニール製品の可塑剤、ペン・新聞・雑誌のインク、タバコの煙、ストーブの燃焼ガス、生花などに使われている農薬
大気の汚染物質	松くい虫防除用の空中散布剤、トルエン、ベンゼンなどの有機溶剤、自動車の排ガス、燃焼ガス、工場からの汚染物質
日用品	香り入り石鹸、ハンドクリーム、ヘアスプレー、うがい薬、義歯接着剤、香水

最近の住宅事情で、化学物質過敏症などの新しいアレルギーが取りざたされている。国の方でも室内の揮発性有機化合物の標準値は定められてはいるが、健康へのポイントとなるであろう有機化合物同士の複合的な指標はまだない。そんな中で、都市型の生活者の住空間はマイナスイオンの少ない、つまりプラスイオンの多い空間での生活を余儀なくされている。夏冬一日中まわるエアコンからは有機物の死骸などが吹き出し、室内の揮発性有機化合物の濃度もかなりの高水準にある。換気が必要と外の空気を取り入れれば、浮遊粒子状物質（SPM）等が室内に入り込んでくる。健康に良いとか悪いとかいう証拠・データの問題でなく、こういった意識することができない様々な環境を一番感知するであろうものが「心地よい・心地よくない」という癒しへと繋がる気持ちではないかと思う。

それでは、そういった揮発性の物質を出さなければ良いではないか、というのが現在の環境問題等に見られる解決方法であるが、住宅に関しては、ではみんな木造住宅に戻ろうというわけにも行かず、別の建材を開発して使用していくことでしか解決できない。便利さと機能性、そして「脳」の快適を求めて発達してきたこの100年の方向は、「身体」の健康と引き換えであったのかもしれない。

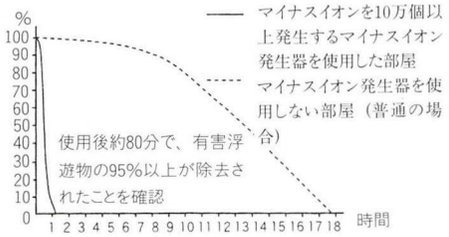
マイナスイオンの仕組み

巷にはマイナスイオンと名の付く商品が多くでている。真偽のはっきりしないようなものも目につくが、一方で、学術レベルではマイナスイオンの持つ人体への工学的な実験データや検証例も多く、「快適さ・心地よさ」を科学的に分析した結果も多い。また、クリーンルームや消臭に関してはすでに市民権を得ているようだ。

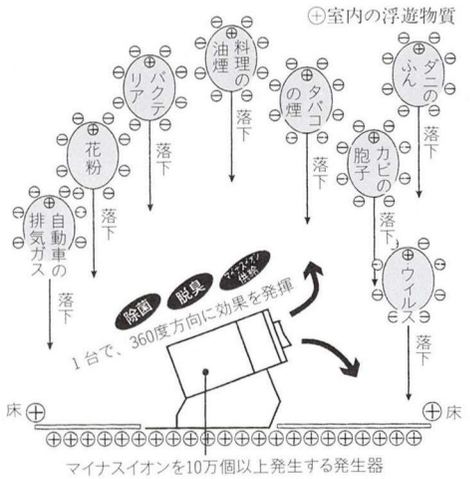
この100年で大気中のプラスイオンとマイナスイオンの比率は逆転してしまい、プラスイオンの方が多く存在する、というデータもある。実際にイオンカウンターを持って街にでて測定してみると、空気の悪そうな所ほど、プラスイオンの数が圧倒的に多い。

マイナスイオンというのは、大気中に存在するある一定の大きさ以下のマイナスに帯電している物質の総称である。主に空気中の水（H_2O）の分子に電子がくっついたものと考えられる。つまり、室内のマイナスイオン環境は「湿度」と大きく関係してくるのである。

人間は呼吸をすることで酸素を取り込み、二酸化炭素を吐き出す。周りの空気を循環させて生きていると言うこともできる。大気中のプラスイオンは $H_3O+(H_2O)n$ であり、これは水素イオンの電気



マイナスイオン発生装置使用時の空中の有害浮遊減少度テスト
（イタリア　パドバ大学実験室試験）



室内の浮遊微粒子に対するオアシス効果
（イタリア　パドバ大学内実験室でのテスト結果）

的な性質を帯びている。皮膚や呼気から体内に入る空気中のプラスイオンは、活性酸素様の働きで血液などを酸性に傾ける。電子を奪うのである。その結果どうなるか。各所での細胞の老化を進めることとなる。それに対してマイナスイオンが大気中に多い場合、血液中のプラスに帯電した水素イオンと中和し、酸性度を元に戻す働きがあると考えられる。phが弱アルカリにキープされるのである。

私たちの身体はホメオシタシスという生体維持の機能で成り立っており、血液は常に弱アルカリに保たれている。これが崩れることは健康のバランスを崩すことであり、様々な疾患への第一歩である。マイナスイオンとプラスイオンの比率が逆転して、恒常的にプラスイオンの方が多い大気は、私たちの体の血液中の ph を酸性の方へ傾け、まさにそのバランスを崩している、と言うこともできよう。

マイナスイオンに関しては、自律神経系への影響を示す実験データが多くある。マイナスイオン発生器をかけた室内に１時間ほどゆっくりしていると、体温の上昇がサーモグラフなどで見て取れる。脳波の測定でも、アルファ波が多くでているようだ。主に私たちが「心地よい」という状態は、マイナスイオン環境で多くでている。健康になるというより「身体の崩れたバランスを元に戻す」という表現の方が合うようだ。まさに「癒し」のテクノロジーではないか。

マイナスイオンは、大気中の水分に含まれる酸素を体内に円滑に取り入れる作用がある、という説もある。一定時間の安定した酸素の供給で恩恵を受けるのは、身体の恒常性を司る自律神経を調節する視床などの大脳辺縁系であっても不思議でない。もともとマイナスイオンの方が多い大気中で生活するようなつくりになっている私たちの体にプラスイオンが多い環境になってもたらされる弊害を、「元に戻す」働き、これがマイナスイオンの効用ではないかと思う。

日常空間のイオンバランス

マイナスイオンやプラスイオンは生活の様々な場所でどのくらいの比率で存在するのか、イオンカウンターを持って街にでてみた。

シックハウス症候群発祥の地であるアメリカでは、不動産業者が入居前にイオンカウンターでプラスとマイナスを測り数値を顧客に見せた上で契約するという話も聞く。訴訟国家アメリカらしい話だが、わが国の不動産売買契約時の重要事項説明書にマイナス・プラスイオンの数値が掲載されるのも、そう遠くはないのかもしれない。

コピー・ファックス・パソコンなどのあるオフィスではマイナスイオン50、プラスイオン150という比率がでた。単位は個数／ccである。この場合、窓を開けて空気を入れ換えると瞬く間にマイナスイオン1000、プラスイオン500とマイナスイオン環境に変化する。建物の前の公園がマイナスイオン環境に一役買ったのか。ゲームセンターに行くとマイナスイオン30、プラスイオン40と若干のプラスイオン環境であった。多摩川べりではマイナスイオン270、プラスイオン120。カラオケボックス内ではプラスマイナスともにカウントできなかった。タバコを吸い、アルコールで会話が弾むとまた違うのかもしれない。

大まかに言って、自然環境に近いほどマイナスイオンが多く、人工的な環境、とくに電気製品などの多い場所ではプラスイオンが多い状態にあると言えるのかもしれない。

マイナスイオンの可能性

「癒し」の時代に向けて、私たちの身体の生理的な健康を「調節」するマイナスイオンテクノロジーは欠かすことができないものとなるであろう。「心地よさ」の基準は、生活行動から需要と結果が生まれる現在の「癒し」を突き詰めていくと、「バランスを戻す」という点に行き着く。その意味で、癒し系のモノや行動とは違い、睡眠や、その生活のすべてのベースである住環境が「癒し」に対して持つ役割は多いように思う。しかし現在、マイナスイオンテクノロジーを使った様々な日常品や建材も多くでており、マイナスイオンの発生する壁紙や、室内発生器、空気清浄機、はたまた寝具から下着までバラエティに富むが、トータリティのない「マイナスイオンテクノロジー」のラインナップである。

国の生活環境審議会などで論議される排気物などの空気に関する「規制」は、大切ではあるが、どちらかというと「病気にならない」ための方針であり、「病気にならない＝健康」という図式がちらほら見える。しかし今トレンドの「癒し」は、「健康」という、病気臭さを綺麗におおった「心地よさ・快適さ」の追求であり、目に見えない化学物質に満たされた環境に対する、個人の「感覚からの反撃」とも言えるのではないか。であれば、当然そこにはマーケットが存在し、しかもそのマーケットは巨大なモノであろう。

私たちを根本から「癒す」可能性を持つマイナスイオンテクノロジーに、より多くの業界・識者が目を向けて、日常生活に多く取り入れられる機会が増えることを願ってやまない。住環境はまさにその「基本」であり、最も可能性のある場所でもある。

崩れたバランスを「元に戻す」のが「癒し」であり「心地よさ」であるなら、21世紀のその答えは「マイナスイオンテクノロジー」であると確信する。

（すがわら　あきこ　菅原研究所）

各論2

医療福祉施設における癒しの環境デザイン

田中直人

まもなく20世紀を終え、すさまじい勢いで競争を繰り返してきた「戦い」の世紀から、人も地球も癒されるべき「癒し」の世紀を迎えようとしている。住宅をはじめ道路・公園などの公共空間においても、人にやさしいさまざまな環境デザインが展開され始めている。特定の人に対応する考え方から、より多くの人、できればすべての人を対象にしたデザインが求められている。近年、地球環境の視点に立った意識が高まり、生活の中で、人にやさしいと同時に環境にやさしい環境デザインが求められようとしている。

医療施設や福祉施設は、ともに高齢者や障害者をはじめとする人々の体と心を癒す環境として、重要な役割を果たすものである。しかしながら、その専門的サービス提供の合理的実現を追求する中で、本来備えるべき癒しの環境としての要素が十分に検討されないままに過ごしていることも多いと思われる。これらの施設の計画においては、より高度な設備の導入や施設整備が図られているが、入院患者や入所者をはじめとする利用者や関係職員の立場に立った環境づくりとしては課題が多い。すなわち、日常の生活環境におけるさまざまなストレスからの解放やコミュニティの形成といった人間的環境としての視点はまだまだ少ないと考えられる。

癒しの環境へのアプローチ

従来、患者本位の質の高い医療行為は、採算を無視して無駄な経費をかけなければできないという誤解があった。しかし、少ないスタッフと経費でも、職員が意識を改革して効率的な運営を図り、質の高い医療と患者に対するサービスの向上を図ることは期待できる。心身ともに弱っている人たちの体だけではなく、心から安らぎを感じ、癒される環境づくりは、本来、医療施設には当然備わっているべきものである。

しかし、実際はどうだろうか。長時間待たされ、やっと診察してもらっても、まるでベルトコンベアに載った品物のようにあちらこちらを巡るシステムは、まるで工場のようである。看護婦さんをはじめとするスタッフのやさしい応対でほっとすることもあるが、大抵は逆の経験の方が多い。大勢の待ち合う空間はただ雑然と、おおよそ癒しとはほど遠い環境である。体の不調に関してのさまざまな不安やいらだちに加えて、世の中の縮図のような他人のしやべる内容が知らずのうちに耳に入ってくる。まわりにいる人の苦しそうな暗い雰囲気から、自分が病気でなくとも病気になってしまいそうな気さえしてくる。そんな時、誰の心遣いかわからないが綺麗な花の姿や絵画などにしばし見とれたりする。

高齢者や障害者の施設は、これまでの制度やいきさつから多くのタイプが存在する。いずれにしても、これらの施設も医療施設と同様、本来的に心身ともに癒されるべき性格の強い施設であるべきだが、実際はそのような環境を実現している例はまだまだ少ない。老人ホームや重度障害者施設なども、一見すると病院と何ら変わらない印象を受ける。個人の生活より、世話をする管理者の側に立った合理化が前面にあって、その入居（入所）期間にかかわらず、生活空間としての快適性は我慢することが当然といった感じである。

永くそこにいれば、入居者相互のコミュニティが自然にできるものである。共同の生活空間も必要となる。心を癒す環境も必要となる。多くの施設を訪れていつも感じるのは、当初の施設計画でもっと考慮すればよいのにと思うことが多いことである。逆に関係者の皆さんがの現有の施設の制約を超えて、やさしく潤いのある環境にしようと努力している姿にも出合う。さまざまなこれらの工夫やアイデアは、癒しの環境デザインに多くの示唆を与えてくれる。

癒しの環境づくりの調査

人にやさしい癒しの環境デザインへの手がかりを得るために、私たちは兵庫県下の医療福祉施設552施設に対して、癒しの環境づくりに関して調査を実施した。この結果の一部を紹介したい。

■医療福祉施設における癒しの概念

医療福祉施設における環境づくりにおいて、「癒し」がどのような概念で捉えられているかを「ノーマライゼーション・バリアフリー」「アメニティ（快適性）」「ホスピタリテイ（もてなし）」「コミュニケーション（交流）」「アイデンティティ（独自性・らしさ）」「セラピー」「芸術性」などのキーワードで尋ねたが、癒しという概念は「アメニティ」という概念ともっとも関係しているという結果であった。ついで「コミュニケーション（交流）」「ホスピタリテイ（もてなし）」「セラピー」という順である。いずれの概念も、具体化するにはさらに多くの要素を検討しなければならないが、従来の医療福祉施設で導入されてきたバリアフリーなどの物理的環境整備だけでは、基本的な認識として不十分であることは間違いない。

同様に、癒しの環境づくりを行う場合に重視している事柄について、「快適性」「人間性」「自然性」「利便性」「参加性」「経済性」「芸

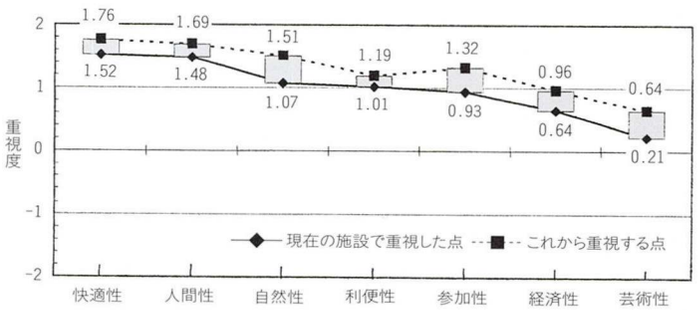


図1　癒しの環境づくりで重視する点

術性」の７項目を示して尋ね、現在の状況とこれからの方向に分けて、５段階で評価した。各項目ごとに「重視した」から「重視しない」までを「２」から「－２」に計算した結果を**図１**に示す。

これより、現在の癒しの環境づくりを行う場合には「快適性」「人間性」を重視しており、これからもさらに重視していく傾向がある。これらは現在、将来ともに主となる要素である。また、現在の施設ではやや重視している程度であった「自然性」や「参加性」に関しては、さらに重視する傾向にある。将来的には、利用者の参加をうまく仕込んだ形で、より自然の環境要素を取り込む環境デザインが重要になってくると思われる。

■癒しの環境づくりの現状と評価

医療福祉施設において癒しの環境づくりがどの程度整備されているか、その現状を、40項目の具体的事物を示して評価していただいた。これらの事物は、「癒し」と関係あるものとして施設に導入された事例のあるものを、既存の文献およびヒヤリング調査から整理したものである。大きく分けて、「施設の設備」に関するものと、「施設の利用者へのサービス」に関するものからなる。これらについて、現在の導入状況、癒しの環境づくりへの目的度、効果度などを１、０、－１の３段階で尋ねた（**図２**）。

その結果、「施設の設備」などのハード面に関する事物の導入は高いが、その目的度や効果度においては今後導入がもっと図られてもよい事物が多いこともわかった。これらを実現するためには、施設の環境を物理的に整備していくだけではなく、入居者などの生活の細やかな面にまで行き届いたプログラムが必要と思われる。さらに、そのプログラムは決して画一的に入居者に強制するものではなく、それぞれの興味や関心に応じた自主的な参加、取り組み、あるいは味わうことのできる余裕のあるものであることが大切と思われる。

おわりに

これからの医療福祉施設は、住宅を中心とした地域環境の整備の中で重要な役割を担う。施設内容の計画においては、国内外の各種事例の調査や評価を通じて、よりきめ細かな計画要件が見出されるだろう。一律の標準化したメニューとして「癒し」の環境デザインが展開するだけでなく、原点に立ち返って「人にやさしい環境」を考え、これからのよきモデルとなる施設や住宅の設計提案をめざしていく必要がある。

本稿で紹介した各施設の調査については、越智正和君をはじめゼミの諸君のワークによるところが大きく、ここに感謝したい。

参考文献：越智正和「アートによる癒やしの空間デザイン手法に関する研究―医療福祉施設における癒やしの環境づくりに関する調査」摂南大学修士論文2000.2.

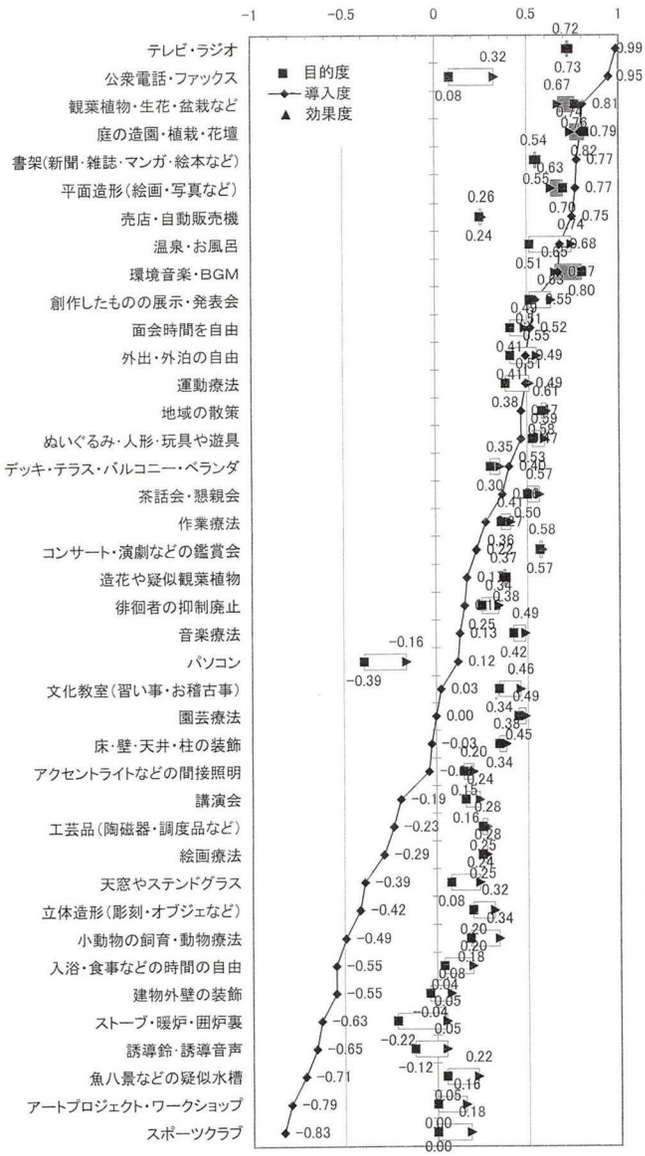


図２　癒しの環境づくりへ向けた事物の導入とその評価



リハビリテーション病院の喫茶コーナー
職員と利用者が共通で利用している。柱に掛けられた絵は、この病院に入院していた患者が退院後、「ここに飾って欲しい」と寄贈したもの



リハビリテーション病院の中庭
園芸療法がこの庭で行われている。患者の出入りは自由



リハビリテーション病院の建物正面にある池
もともとこの池は近所の子供たちのプールにと考えていたが、近隣の人々が釣ってきた魚をここに放したのをきっかけに、金魚や鯉を入れて、地域の交流の場とした

（たなか　なおと　摂南大学教授・工博、都市環境デザインネットワーク代表）

各論3

「エイブル・アート」でなぜ癒されるのか

播磨靖夫

私たちが推進している「エイブル・アート・ムーブメント（ABLE ART MOVEMENT）」が今、新しいアート運動として注目されている。世界的に見てもアートの分野のアウトサイダーに対する関心が高まっている。それに呼応するかたちで、私たちが始めた新しい視座で「障害者アート」を見直す取り組みが評価されだした。

もともと、これは硬直した日本社会を質的に変化させる市民文化運動として始まったものだ。新しいアート運動をとおして、「社会の芸術化・芸術の社会化」をはかることをめざしている。その一環として、1995年から大阪、東京などで「エイブル・アート」展を、全国各地でフォーラムやワークショップを開くなど急速な展開をしている。



このアートで元気になる―東京都美術館99.2.16～3.22―

これに刺激されたのか、ここ数年のあいだに全国各地の美術館やギャラリーなどでも「障害者アート」の展覧会が企画されるようになってきた。そうしたことも反映して、今年の現代用語を解説したデータブックにも、「エイブル・アート」という言葉が初登場している。アウトサイダー・アートのひとつとして単に取り上げているものもあれば、新しいアート運動として紹介しているものもある。

「アートは時代を映す鏡」といわれるが、「エイブル・アート」にも現代という時代が色濃く反映している。例えば、障害をもつ人たちの心の不思議な働き（魂の表現）から生まれてくるアートには、現代アートが見失ってしまったものがある、という発見がある。さらには、「障害者アート」を包み込まないような美学は普遍的ではない、それを排除するのは排除する側の概念の枠組みの方が悪い、と芸術の概念が原理的に深いところで広がってきていることもある。そして、何よりも人間をアートをとおして人間的に解放すると同時に、人間としての尊厳を獲得するという新しいアート運動に対する時代の共感がある。

これまで「障害者アート」は存在したにもかかわらず、既成のアートからは無視されるか、低級なものとして見られてきた。その理由のひとつには、日本社会における芸術に対する偏見がある。優れたアートは、美術教育を受けた人か、美術家のもとで修業を積んだ人によって生みだされるというものである。もうひとつは、福祉に対する偏見である。日本社会において福祉はマイナーなイメージが強いが、そうしたところから生まれるアートもまたマイナーだと考えられてきたのである。

生命のセレブレーション

そこで私たちは、障害をもつ人たちが人間として本質的にもっている価値を中心にして、その精神的活動に価値を与え、その社会的役割を実現していけるアート運動を構想した。具体的には、彼らのアーティスティックな活動を、治療目的としてではなく、一人ひとりの「可能性としての生」を実現するための「術」としてとらえるところから、さまざな可能性を見いだそうとするものだった。

こうした考えに基づいて、まず社会的に価値の低められている人たちの社会的イメージを高めると同時に、その能力を高めることに取り組んできた。それはまた、障害をもつ人たちが自己のアイデンティティを形成することと、自己のサブカルチュアを形成することに深く関係している。

このような新しいアート運動を発想した背景について、述べておかなければならない。今から30年前、新聞記者をしていた私は、障害者問題のキャンペーンと取り組んでいた。その当時の日本は高度経済成長の時代で、生産性や効率を優先させるあまり障害をもつ人たちのような社会的弱者を切り捨ててきた。そればかりか人と人を連帯させたり、あるいは人びとに活力を与えたりする文化のポテンシャルも軽視してきた。

取材をとおして、「障害者」と呼ばれる人たちに共通するものを感じた。それは、ほとんどの人たちが自己主張をしないということだった。人間が自己主張するには、自己表現する力がないとできない。自己表現する「術」をもたないとできない。さらには、自己表現をまわりの人から受けとめられた経験がないとできない。

どのようにしたら自己表現力を高めることができるか。そこで考えついたのは、障害をもつ人たちの胸のうちにある思いを詩のかたちで表現してもらうことだった。つまり、人間としての喜怒哀楽を表現し、それにメロディーをつけてみんなで歌うことを始めたのである。これが25年間もつづいている「わたぼうしコンサート」「わたぼうし音楽祭」の始まりである。

この音楽イベントは、障害をもつ人たちの「こころ」を癒し、社

会で活動するきっかけとなっている。と同時に、これに参加した人たちも「こころ」を癒し、元気を得ている。これは、まさに現代の生命のセレブレーションである。

創造活動を通じて癒しが生じることを知った私たちは、次に胸のうちにある思いをメルヘンに、生きた歴史を自分史にする「わたぼうし文学賞」を創設し、さらには、障害をもつ人たちの語り芸を競う「語り部」コンクールを開設した。これらは詩のうちにある音楽性、文学性、演劇性に着目し、それぞれを芸術文化として高めていくことをもくろんだものである。

元気になるアート

詩とか文学ような言語による自己表現も可能性をもっているが、一般的に言語化できるのは「こころ」の表層の世界のことといわれている。つまり、誰にも言葉では伝え切れない感じ、自分しか分からない気持ち、意味になり切れない思いというものがあるはずである。新たに展開している「エイブル・アート」は、そのようなものをイメージによって表現する創造活動である。

そこから生まれる作品は、言語化することのできない、まさに無意識のうちに育まれた「なにものか」の表現ともいえる。この「なにものか」とは何かというと、「自然」ではないかと考える。人間というのは自然の一部であるが、人間という自然が生みだすもうひとつの「自然」がアートではないだろうか。

そういう意味では、障害をもつ人たちのアートはまさに生きものであるといえる。無心でつくられるアート、遊びのなかから偶然つくられるアート、そのなかに世界あるいは宇宙とつながる秘密が隠されている。それが私たちの心に通じてくるのではないか。

これまで開いた「エイブル・アート」展に来た人たちの感想の多くが、「ここに来て幸福な気分になった、癒された、元気づけられた」というものだった。障害をもつ人たちのアートにあるコスモロジーが、私たちを包みこみ、私たちのなかで失いつつあるが、まだいくらかつながりをもっている自然というものと、どこか通じあっているのではないだろうか。アートをとおして「自然」と「自然」がふれあうことによって、癒されたり、元気になったりするのではないだろうか。

このように「エイブル・アート」は、私たちの美術の概念をはるかに超える表現が多い。これまでの知識と技術のアートではなく、直感によるアートに美的価値を見いだそうとすることは、概念化された美術とはまったく逆の方向の美術かもしれない。そこに戸惑いがあるのも確かである。

「彼らの絵を素直に認めたい自分がいる。だけど認めたくない自分もいる。彼らの絵を認めてしまったら、これまで自分が受けてきた美術教育を否定してしまうようでとても怖い」

これは美術を専攻している学生の感想であるが、制度化された美術の主流にいる人たちほど「エイブル・アート」に対する反発が強いのも事実である。その一方で、現代アートが失ったもの―人びとを幸福にしたり、癒したり、勇気づけたりする、本来、アートがもっていたもの―に魅力を感じる人たちが多いのも事実である。

最善の自己になれる社会

「エイブル・アート」のもうひとつの魅力は、場所を特権的に選ばないことである。どのような場所でも斥けようとはしない。このように場所との親和性に富んでいるということは、ある種のポップ性があるということでもある。例えば、「エイブル・アート」の作品がホスピスの病棟に飾られて末期ガンの患者を癒したり、クリニックの治療室にかけられ病人を励ましたり、オフィスで展示され人びとを和ませたりしている。さらには、知的障害のある人の作品が、横浜市の磯子区の新公会堂の緞帳の図案に採用されたように、都市の公共空間に取り入れる動きもでている。

このように「エイブル・アート」は、美術館という制度に認知されることを最終目的にしているのではなく、インサイド・アウトサイドという枠組みを超えた新しいアートの境地を拓いていこうとするものである。

「スモール・イズ・ビューティフル」という言葉で有名な経済学者シューマッハーは、これからの時代は「一人ひとり、ひとつの宇宙であることがあらわになる」といっている。20世紀は「組織の時代」であったが、21世紀は「個人の時代」になるといわれている。まさに個人が「ひとつの宇宙」として存在する時代がやってくるというのだ。

実は「エイブル・アート・ムーブメント」では、展覧会などをとおして「個人の数だけ宇宙がある」ことを明らかにしてきた。そこから一人ひとりが障害とともに生きながら最善の自己になっていける社会がつくれないかを考えてきた。

これは障害をもつ人たちだけの夢ではない。どのような人間でも、かけがえのない生命を大切にし、自分の人生を自分でデザインし、自己実現をはかりながら幸福を追求する権利があるはずである。そのような権利を保障することが、これからの社会目標であることも提案していきたい。

（はりま　やすお　財団法人　たんぽぽの家理事長）

各論4

震災遺児の癒しを目指して

樋口和広

戦後最大の災害となった阪神・淡路大震災。愛する人の命も住み慣れた家もコミュニティごと根こそぎ破壊し、奪っていった。あの震災で親を亡くした遺児は573人、うち110人は両親を失った。

先日実施した遺児へのアンケート調査によると、この5年間に2人に1人の遺児が「親の死が自分のせいだと思ったり、自分が死んで他の家族が生き残った方がよかった」と感じ、4割の子は「死にたいと思ったことがある」と回答している。そして、あれから5年たった今なお、9割の遺児たちが何らかの形で震災によるいわゆる「心の傷」に苦しんでいるのである。

震災後、「癒し」「心のケア」といった言葉が急速に広がっているが、本来の「ヒーリング＝healing」のほかに、「リラクセーション＝relaxation」や「セラピー＝therapy」までもがごちゃ混ぜになって「癒し」の意味としてとらえられている。

震災遺児たちの癒しに必要なのは、まず心の内を自然な形で吐き出すこと、そしてその対象となるもの（主に人）である。内面の吐き出しによってストレスなどが発散され、複雑にからまった気持ちが整理されていくのである。時間の経過や安らぎのある空間（建物）、そのほか視覚や聴覚、嗅覚によるリラクセーションなどは、それ単独では深い心の傷を癒すことはできないが、触媒的な役割として重要な意味をもっているのである。

●

あしなが育英会では昨年1月、日本初の遺児のケアセンター「レインボーハウス」を神戸市内に建設した（**写真**）。日本設計ならびに本間組の担当者とは、感情を吐き出す触媒としての建物のあり方について100回以上のミーティングを重ねた。

キーワードは「家」である。地上5階建てであるが、道に面した部分は低層にすることでそびえたつ施設というイメージを払拭した。また、コーナー部を円形にすることで柔らかい雰囲気づくりを行った。玄関を敷地の奥に配置することで、子どもたちが気持ちの切り替えを行う時間と、建物がコの字型になり、各部屋の見合いが発生する。だから、どこにいても人の気配がする。





火山の部屋

玄関を入ると全館絨毯敷きとなっており、素足で歩き回れるようになっている。子どもたちとそれ以外の人々の動線を建物の東西で分け、遺児たちが使用する空間は絨毯に緑の縁取りがある。これは、子どもたちが見知らぬ客と遭遇して緊張したり、善意の励ましの言葉（例えば「遺児なんでしょ。かわいそうだけど頑張ってね」等）に傷つかないように配慮しながら、子どもたちが隔絶感を感じないクローズスペースにする苦心の策であった。

子どもたちが利用する「癒しのゾーン」には、用途別に大小12の部屋があり、形も長方形、正方形、円形、扇形と様々である。壁紙などの内装、時計や机などの家具についても部屋ごとにそれぞれ別のものを用いた。これらも施設のように均一的なものでなく、家庭のファジー感覚を取り入れたかったからである。

「おしゃべりの部屋」には円形にソファが並べられ、人数によって3種類の円がつくれるようになっている。互いに悩みや悲しい体験を話し合う。学校と違って、同じ経験をした遺児同士だから気兼ねすることもない。共感が「どうして自分だけこんなに辛い目に」という思いを吹き飛ばし、前向きなエネルギーを生み出す。

また、「火山の部屋」はサンドバッグがつるされ、床や壁はマグマをイメージした赤いクッションで覆われている。思い切り暴れてストレスを発散することができるのだ。これは、小さい子から大人まで非常に人気のある部屋だ。そのほかにも、亡くなった親の遺影を持ち込んで話しかけたり、泣いたりできる「おもいの部屋」、小学生以下の子が自由にお絵描きや粘土で遊べる「アートの部屋」、6歳以下の子が電話ごっこや地震ごっこをして遊ぶ「ごっこ遊びの部屋」などがある。

普通の企業や施設では効率とコストパフォーマンスが優先され、「あった方がいいけれど、なくてもかまわない」ものは削られてしまいがちだが、私たちはあえて、「あった方がいいもの」を極力取り入れた。心の問題は決して数字で表すことができないからである。

●

レインボーハウスができて1年、一人の女の子（遺児・16歳）がいきなり私に「ここってええなあ」と笑顔で話しかけてきた。きょとんとする私に「だって、ここはひとつひとつの部屋はバラバラやけど、なんか人がおるっていう『家』みたいな安心感があんねん」。

遺児たちの癒しはようやくスタートしたばかりである。

（ひぐち　かずひろ　あしなが育英会レインボーハウス館長代行）

各論5

コンパニオンアニマルたちと暮らせるまちに

中橋廣美

少子化が進んでいるのに「子供はいらない、でもペットを飼いたい」という若者が増えている。しかし昨今のペットブームは、都心での標準的な住まいとなった集合住宅で様々な問題を生んでいる。

共に生き抜いた動物たちと暮らしたい

大震災のなか、動物はかけがえのない家族の一員として人と共に逃げ惑い、避難した。家族を失い心に大きな傷を負った人、生きる希望も持てなくなった人や不安な毎日の生活を送っている人々は、動物と一緒に暮らすことにより、心の安らぎや精神的なよりどころが得られたと語っている。この大震災では、コンパニオンアニマル、伴侶動物という言葉が多く使われ、動物が持つ一つの役割を改めて喧伝することにもなった。

応急仮設住宅で暮らす被災者のなかから、動物と一緒に恒久住宅へ転居したいという希望が寄せられ、日本で初めてペットを飼うことができる公営住宅が建設された。(市営住宅：2団地／各1棟／69戸、県営住宅：2団地／各1棟／99戸)



ペット飼育可能市営住宅―ベルデ王津2号棟―

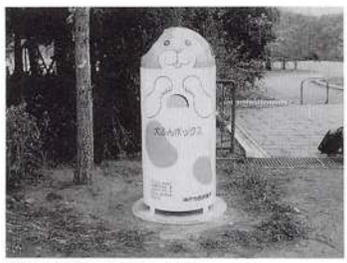
神戸市では、建設に当たり㈳日本動物福祉協会阪神支部、㈳神戸市獣医師会、弁護士、仮設住宅自治会長、建築家で構成した委員の方々により、「ペット問題研究会」を立ち上げ、諸問題を検討していただいた。入居後もペット飼育についての研修会を開催するなどを行った結果、入居後約2年を経過しているが、大きな問題は起こっていない。(本誌99年4月号参照)

集合住宅でのペット飼育

戸建て住宅で、小さいながらも庭があり、犬を飼うことが、一種のステータスであり、日本人の憧れであったように思われる。農耕民族であり、履き替えが必要な日本では、狆(チン)のような例外もあるが、犬は一般的に外に繋がれた番犬の役割でしかなかった。

昭和30年代に本格的に始まった集合住宅は、今日では都心居住の形態として不可避なものとなっている。東京都23区でのその割合は約70%にも及ぶ。集合住宅の先駆けとなった公団住宅では当初、動物の飼育禁止規約はなかったが、集合住宅での暮らしに慣れないうえ、動物の習性を理解せずコントロールできないままペットと暮らし始めたため、トラブルが発生し、飼育禁止となった。

西洋は狩猟民族であり牧畜民族であったために、犬は盛んに利用され、長い歴史にわたって品種改良が行われた。現在の犬は人間の目的(愛玩用も含め)に都合よくつくり出された動物といってもよい。



公園の糞回収ボックス

また、土足文化であり、家の中に動物を入れることも容易であるし、礎石造といったこともあって集合住宅でのマナーも確立されていった。フランスでは集合住宅で犬を禁止してはいけないという法律があるなど、西洋社会ではペットが自然に人間社会と共存している。しかし、糞の放置など日本と同様の問題もあるようだ。

集合住宅における建築的配慮

ペット可住宅のハード面の対応としては、専用シャワーコーナー、くぐり戸付き室内扉、玄関ドアーなどからの飛び出し防止、取り替え可能な腰壁、転落防止のために外部腰壁のパネル化、全体共用としてシャワー及び汚物処理コーナーの設置等々が講じられている。

不動産の宣伝文句としては意味があるが、これらの対応は必ずしも必要があるとは思えない。むしろ飼い主のしつけや全体の管理といったソフト面のほうが重要だと思われる。欧米では、ペットのしつけは子供のしつけと同様に常識であり、専門家もたくさんいる。

建設省は平成9年に「中高層共同住宅標準管理規約」を改正し、ペットに対する考え方を明記している。平成11年にはこの管理規約を受けて「中高層共同住宅使用細則モデル」が発表され、このなかで「ペット飼育細則」が2例挙げられている。

おわりに

人は、動物が持つ様々な能力を利用してきた。人の病気に対して適切な動物を正しく介在させる治療法(アニマル・アシステッド・セラピー：AAT)が研究され、諸外国では、すでにこの治療法を取り入れている病院がある。アメリカでは心の介護を担う介護犬も盲導犬と同様に認知されている。犬や猫などのペットを人間の仲間や心の支えとしてとらえ、都心で共生できる環境を整えていきたい。

最後に集合住宅で犬を飼育して実感した言葉を紹介したい。

「犬のサイズにかかわらず家の中に迎え入れ一緒に暮らせば、愛玩するためのペットでもなく、便利な番犬でもない、人間の最高の友達だということがきっとわかってもらえる」(能勢の動物保護ボランティア団体「オーク」代表：エリザベス・オリバー)

(なかはし　ひろみ　神戸市住宅局住環境整備部主幹)

各論6

オフィスでの癒しの環境づくり〜NTT京阪奈ビル設計ノート〜

上村廣志

すでに在る豊かな自然環境を、在りのままに残す部分と手を加える部分とを重ねることにより、新たに再生したランドスケープと、そこに配置される建物とが、相互に深く絡み合い、「建築＋ランドスケープ」が一体化された、創造性を鼓舞する全体環境をつくり出したいというのが設計の基本姿勢であった。

緑・水・光・風といった自然現象の変化自体が、「建築」と「ランドスケープ」の相互に浸透していくような領域を創り出す。そのために、画一的で長大な空間ではなく、分節されたマッスの連結によって生み出されるアルコーブにランドスケープを咀み込ませ、相互浸透的でヒューマンな構成とすることで、建物の内・外部を移動する視線が様々に重なり合う、豊かで柔らかな空間の創出を試みた。それを第一のテーマ「ランドスケープオフィスの構築」と設定した。

建物内部では、「水＋ライトコート」に沿って廊下・階段スペースを廻らすことで、研究者の動きと、光・水・風といった自然の移ろいを重ね合わせる構成を試みた。単なる動線機能から離れて、「自然と人」あるいは「人と人」のコミュニケーションを誘発するような動線空間をつくり出すことを意図したもので、それを第二のテーマ「ストリートコミュニケーションの誘発」とした。

また研究室あるいはオフィス内部の設計については、ワークの体制・形態の変化に対応して自在にコントロールできる環境をつくり出したいと考え、第三のテーマ「アメニティ・フレキシビリティの高い空間の創出」とした。設計上は次のように具現化を図った。

「ランドスケープオフィスの構築」

1）「建築＋ランドスケープ」の空間構成　ヒューマンスケールで分節した空間を、地形と絡み合わせた配置・断面計画を設定することで、ランドスケープとの一体化を図るとともに、豊かなアルコーブを持ち、柔らかで変化に富んだ環境空間の形成を試みた。

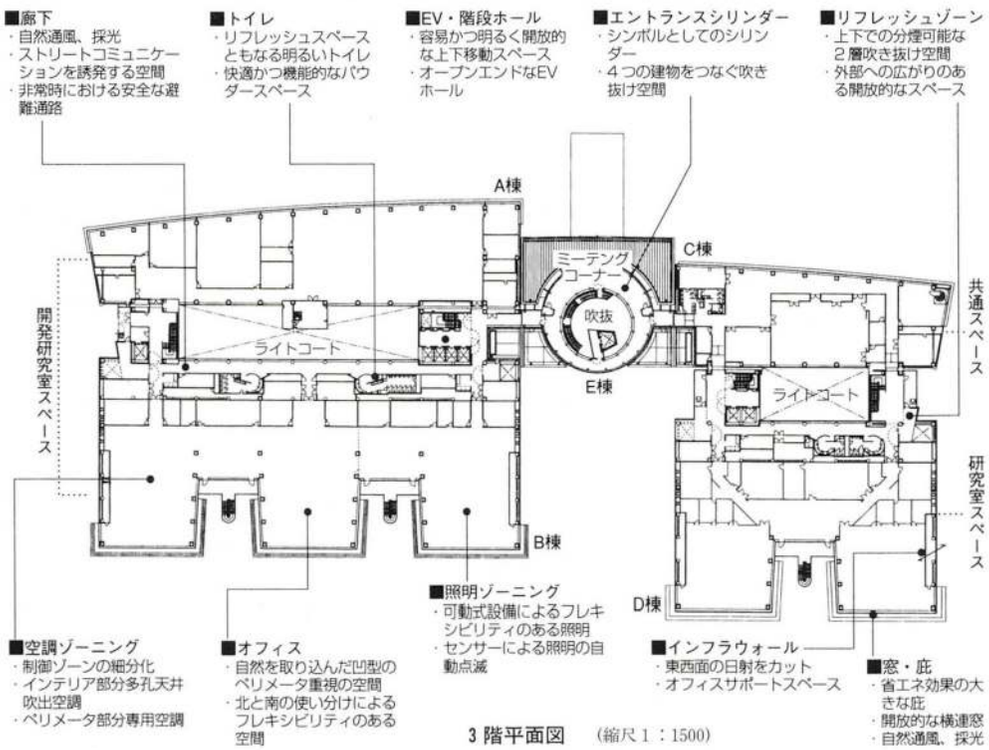
2）凹型オフィス空間の構築　凹型の広がりのあるペリメータを通して、オフィス空間と、保全・修景を図ったランドスケープの緑とが咀み合った、親密で一体感のある建築環境をつくり出すことで、研究者にとって集中の場であると同時に、緑に囲まれた安らぎを感じさせる創造的な研究環境の実現を試みた。

3）自然通風・採光・眺望の確保　L型外壁PC版の庇の下に取りつけたFRPルーバーで直射光をカットし、熱負荷軽減を図りつつ、ランドスケープへ連続していく豊かな眺望の確保を試みた。

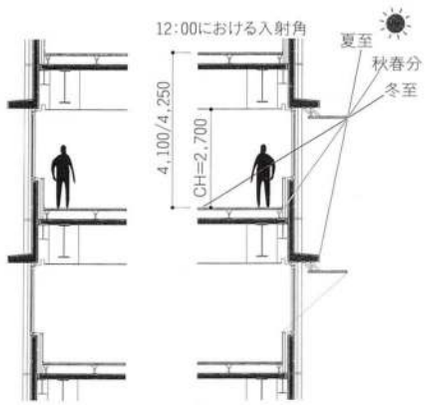
4）アウトドア・ワークスペースの確保　オフィス部から丘陵部への自由なアクセスを確保することにより、「あずまや」（電話・建物・LAN等の付帯設備付き）・遊歩道・バーベキューコーナー等を含めた、敷地全体のランドスケープが、研究者にとっての新たなワーキングスペースとして機能する環境を考えた。

「ストリートコミュニケーションの誘発」

自然の移ろいが映し出される「水＋ライトコート」と、それを周



3階平面図　(縮尺1：1500)



研究開発室断面　(左／北側、右／南側)

研究・開発室南側開口部
L型PC版の庇下に設置された半透明FRPルーバーは、緑への眺望を確保しながら直射光をカットし、壁面の熱負荷軽減に貢献している。



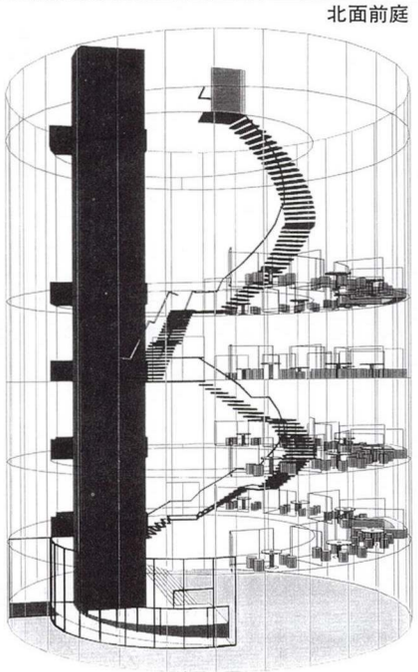
北面前庭



エントランスロビー



エントランスシリンダー内観



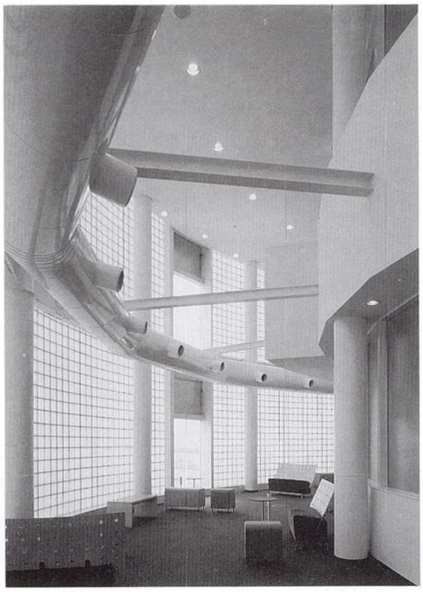
エントランスホールイメージ CG



ライトコート夜景



エントランスシリンダー夜景



ミーティングコーナー

廻する廊下・階段スペースにより、研究者が安らぎとコミュニケーションを得られる動線空間を創り出すとともに、2層吹き抜けのリフレッシュコーナーを廊下の両端に設け、「自然」との接点として、開放感と広がりのある眺望の確保を図った。

「アメニティ・フレキシビリティの高い空間の創出」

研究体制の頻繁な変更に照明・空調が追随できるフレキシビリティの高い、省エネルギータイプの研究環境の実現を図った。

1）可動照明システムの開発・採用　オフィスレイアウトの自由性と省エネルギーへの配慮から、ボックスレールとセットになり、移動・取り外し・増設が自由な「可動照明システム」を開発・採用した。

2）多孔吹出空調方式の採用　レイアウトの自在性と緩やかで快適な気流分布の確保を図るため、空調ダクトを使用せず、多孔天井からの直接吹き出しと多孔カーペットの二重床スペースからの吸い込み方式を採用した。

（かみむら　ひろし　株式会社エヌ・ティ・ティ ファシリティーズ
都市・建築設計本部建築デザイン部担当部長）

各論7

ヒーリング・ランドスケープ

浅野房世

「2000年は新世紀の始まりか、はたまた20世紀末か」などという型にはまった議論は別として、私たちを取り囲む雰囲気がワサワサと落ち着かない。世の中がこのように混沌とするのは、世紀末現象ともいわれる。

昨年の流行語の一つに「癒し」という言葉が選ばれた。大型書店の棚は「癒しコーナー」が設けられている。フロイトからユング、哲学書、宗教の本、○○セラピー、等々。私も興味があるので書棚に近づく。本の内容よりもむしろ「誰が興味を持っているか？」について興味があるからである。しばらく観察して驚いた。ずいぶん若い人が本を手に取って読んでいる。流行の服を身につけた綺麗なお嬢さん、チャ髪の青年もいる。これをなんと判断すればよいのだろうか？

一方、多発する不可解な犯罪やその若年化、あるいは宗教が原因と考えられる事件。

癒しは「流行」ではなく、現代社会が求めている「ニーズ」として位置づけられるようである。私は、ランドスケーププランナーの立場から環境における「癒し」について考えてみたい。

癒しという言葉

「癒し」という言葉が一般に使われるようになったのは1980年代である。それまでは、宗教や医学の分野において専門用語的に使われていた。この言葉が新聞などの一般に使われるようになったのは、阪神淡路大震災の罹災者に対して使われ始めて以来である。

この癒しという言葉の語源を調べてみると、言葉の持つ本来の意味がよくわかる。癒し“Healing”は、目的語を持ってはじめて文章が成立する他動詞“Heal”を調べなければならない。ヒールは「全体」を意味する“Whole”に語源を持つ言葉である。これは、健康“Health”と同じ語源である。

すなわちヒーリングは「全体的に健康にする」ことを呼ぶ。治療は、一般的に手術、薬、理学療法等を用いることによって、疾病の部位を治すことに視点がおかれるが、これは時として必要のない部分にまで、影響を及ぼすことがある。薬でいうなら副作用もそうである。

一方「癒し」は、疾病部位のみに注目するのではなく全人的に検討し、何が問題かを見つけ、矯正していく行為といえる。例えば胃潰瘍の患者に、胃潰瘍の薬を処方するだけではなく、胃潰瘍の後ろに隠れている、その人の持つストレス等の疾病原因を解明し除去を目指すものである。

癒しとは、「本来人間の心と体が持っている“力”に、何らかの原因によって歪みが生じたとき、その歪みを修正する行為」を呼ぶものであるといえる。したがって、単に肉体的のみならず、精神的な面を含む両面からの修正が必要である。

花と緑と癒し

さて、つぎに花と緑と癒しについて少し考えてみよう。「緑があると癒される」「花を育てると癒される」あるいは「園芸療法」（紙面の都合でこのテーマは別の機会におくることとする）という言葉を多く聞くが、これらと癒しの関係についてである。

最近の郊外型大型店舗を見ると、園芸コーナーにずいぶん多くの床面積をとっている。もちろん園芸関連商品が売れ筋商品だからである。

この園芸ブームは、1990年代になって一部ファッション雑誌やインテリア雑誌が、屋外空間に目を付け始めた頃から拍車がかかった。それまでの食卓を飾るテーブルフラワーや、色とりどりの花を盛りつけるアレンジフラワーから、屋外に花を盛りつける（？）ことに視点が変化したのである。この少し前からのダイアナ妃に代表されるイギリスブームも、追い風になったといえよう。

園芸店では園芸材料の代表品種であるパンジーやマリーゴールドのような一年草の供給が減り、ハーブ等の宿根草と呼ばれるイングリッシュガーデンには欠かせない輸入植物が店頭を飾り始めた。「イギリス」＝「イングリッシュガーデン」＝「ファッショナブルなガーデニング」という公式が成り立ち、それとともに「土・花・種」を扱っていた昔からの園芸店は“ガーデニングショップ”へと華麗に変身していった。

しかし“プリクラ”や“たまごっち”のようなつくられた「流行」であるなら、熱は少しずつ覚めるものであるが、このガーデニングブームは一向に覚める兆しがない。これは私たちの中に、花や緑を求める何かがあるからである。



『かかわる緑』—園芸作業を行う—　ジョエル・シュナイバー記念庭園（アメリカ）

われわれの祖先は森に囲まれて暮らし、進化は森の中から始まった。私たちのDNAの中には、「三次元的に森に囲まれて暮らす生き方」(猿は樹上生活をした初めてのほ乳類である)がインプリンティッドされている。緑に囲まれた空間を恋うと同時に、現在のような高度情報処理社会の中で園芸は、情報処理や解読をわれわれに強いない行為なのである。精神的に安定したい、平安な心がほしい、圧迫感から逃れたい、様々な理由で癒しを求める人々にとって、花や緑を育てることは的を射た行為だったのである。

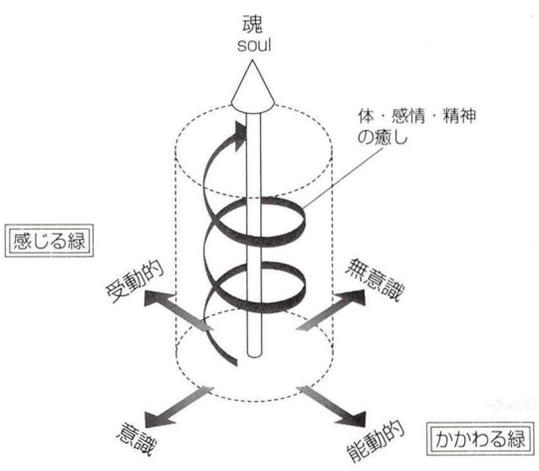
ヒーリング・ランドスケープ

では、つぎに癒しと風景、環境、の関係を考えたい。

環境から癒されるのには、二つの極があると考えられる（下図）。一方の極は先に述べたガーデニングや園芸療法等の「植物を育てる」などの「かかわる緑」の極である。もう一つは、風景を眺めることによって癒される「感じる緑」の極である。ヒーリング・ランドスケープとは、この両極を含む環境整備であり、その空間に身を置くことによって全人的に癒されるものである。人はあるときは積極的に緑とかかわり、あるときは受動的に緑を感じ、そのときに必要な癒しの方法を無意識のうちにも、選択しているはずである。

このヒーリング・ランドスケープという概念は非常に新しいものである。アメリカのランドスケープの世界では1995年に専門誌で特集が組まれたが、それ以前は耳にしない言葉であった。またアメリカでは、ヒーリング・ランドスケープは医療機関等の屋外空間で実施されるものであると考えられ、現在もその傾向がある。

1996年、私が公共空間（すなわち公園や公開空地）におけるヒーリングランド・スケープの調査にアメリカを訪れたときは、医療施設を専門とするランドスケープアーキテクトに怪訝な顔をされた記憶がある。



ヒーリング・ランドスケープ

ヒーリング・ランドスケープの役割

しかし「医療機関を利用する人だけが、癒されるべき人」であろうか？「高齢者施設を利用する人だけが、安らぎを求めている人」であろうか？

前述のように、書店で癒しの本を手に取るのは老若男女である。ならば、医療施設や福祉関連施設の限られた空間の中で、癒しの環境整備をするだけではなく、公共空間すなわち「ちょっと歩けば行ける公園」や「街角のポケットパーク」等、誰もが利用できる空間にも、このヒーリング・ランドスケープが必要であると私は思う。ガーデニング人口と同じ、いやもっと多くの都市居住者が癒しの風景を求めている。


ストア・ヘッド庭園（イギリス）

イギリスのストア・ヘッドは、風景式庭園として人気の高い公園である。この庭は、ヘンリー二世がデザインコンセプトに「人生」を掲げ、見事にこのテーマを具現化し、質の高いヒーリング・ランドスケープをつくり上げた。このことはイギリス本国でも、知る人は少ない。しかしこの庭を訪れる多くの人々が「こころ癒される」と感想を述べている。

日本もいよいよ公的介護保険が始まる。高齢者が地域に戻り、地域が「終の住処」となるであろう。そんなとき窓から見える風景が、あるいは病院の行き帰りに眺める風景が、美しいヒーリング・ランドスケープである必要性をわれわれは認識する必要があろう。

（あさの　ふさよ　株式会社エス・イー・エヌコミュニケーション研究所代表取締役）

各論8

「癒し」とは～坊主バーの試み～

清　史彦

大阪はミナミの繁華街、若者の街アメリカ村の南のはずれに「ミナミの九龍城」ともあだ名される古い4階建てのビルがある。その2階に「坊主バー」はある。「バー」だから、お酒を飲む場所なのだけれど、同時に「坊主」と名乗るごとく、カウンター7席の薄暗い店内には仏像や曼陀羅が置かれ、店の2階の4畳半の「仏間」には南無阿弥陀仏の掛け軸まで掛けられている。極めつけは、本物のお坊さんがカウンターに座っていて、飲み客の話し相手になってくれる何とも摩訶不思議な空間である。

来られる方はいろいろだが、話をさかなにお酒を飲んだその感想を聞くと、おおむね「何か落ち着く」「ここは、ほかではできない話ができて楽しい」という声が多いようだ。

成り立ち

坊主バーは、開いてもう7年半になる。私、清史彦とバーテンをしているY君が中心になり、ほか数人の仲間の協力を得て1992年12月に開店した。いちおう今も何とか続いているところを見れば、世間からの一定の評価を頂いているということなのだろう。

●

この坊主バーは、人と人との自然な出会い、流れの中でできてきたように思われる。それは、Y君と私との出会いから始まった。

私は平野区にあるお寺で月に一度、「ひらの聞思洞」という座談会を開いている。それは「自分のことを語り合う集い」で、初めての参加者には自分史を語ってもらい、次回からは「最近の私」を発表してもらう。どこかの誰かの話ではなく「私はこうした」「私はこう思う」ということを言葉にして頂く。世間のことを話題にしてもよいが、それが自分自身にとってどうなのかということが要点となる。そうして数人の参加者がそれぞれ語るうちに、皆で語り合える話題が自然と出て来る。そうこうするうちに、お酒も加わり、いっそう舌もなめらかになり、エンドレスに話が深まっていく。

その場にたまたま参加したのが、Y君。何度か参加するうちに、「清さん、この場はとてもおもしろい、毎晩やりましょうよ」と言い出したのだ。この言葉で坊主バーは始まった。

もともとお寺は、あらゆる人に、世界に開放された場であった。いろんな人が出入りし、それぞれが生きることを語り合った。その輪の中に、私たち坊主もいたのだ。ところが残念なことに、今のお寺の多くは門を固く閉ざしている。いみじくもオウム真理教の信者が「お寺は単なる風景だ」と言った、そのままの姿になりはてている。それは、ひとりの仏教者として、とても残念なことである。だからこそ私として「ひらの聞思洞」なる試みを始めた訳で、Y君の申し出に「そらオモロイ。すぐ場所を探してよ」と私は答えたのだ。

Y君と私が知り合ったのは、その数年前、当時、住吉の神の木にあった「バルボラ」という喫茶店にさかのぼる。「バルボラ」は、私の友人がやっていた喫茶店で、その店主の優しさに引かれて、いろんな人が集まる場になっていたが、その場に、いわゆる不登校の子供たちの溜まり場が「余里路倶楽部」という名でできていた。私も宗教者の端くれだから、不登校にも興味があったので、自然とその「余里路倶楽部」のサポーターの一人になっていたのだ。そこへ来ていた20歳そこそこのY君に「ひらの聞思洞」を紹介し、「いっぺんけえへんか」と誘ったのだ。

●

「そらオモロイ」となって、具体的な店探しが始まった。Y君は以前小さなバーをしていた経験があり、その関係で、数日のうちに小さな場所が見つかった。リースだというが、けっこう安い。私はまた「そこに決めよ」と即決した。

店の内装もY君の友人の芸大生などがやってくれて、店ができあがった。なんと、開業資金は160万円ですんだ。それも私の友人たちも出資してくれ、またカウンターで話し相手になるお坊さんも、友人たちが「それはおもしろい」と引き受けてくれて、またたく間に開店となったのだ。店の名前は、英語で「誓い、願い」を意味するVOWと坊主を掛けて「VOWS BAR」とした。

願い

場を開くにあたって、私たちの願いを「宣言」した。

設立の願いを持って店は順調に動き出した。すると、半年ほどして、マスコミの取材ラッシュが始まった。「お坊さんが何をやらかすのか」ということで、新聞、TV、ラジオ、週刊誌と多くのメディアが来られるようになった。ところがそこで必ず聞かれることが「ここでは、悩み相談をしてくれるのですか」である。取材はいつもこの質問に対する私の問いかけから始まった。

宗教とは

仏教でもキリスト教でも、本物の宗教であれば、確かに人間の悩みに答えてくれる。だが「悩み相談をしてくれるのですか」と聞くということは、その問いの裏に『宗教は悩みに答えてくれるもの。だから、悩みのない者にとっては宗教は必要ではない』という思いが隠されているのではないか。これこそ、日本人の貧困な宗教理解、日本の残念な宗教事情を表しているのである。

と偉そうなことを言ったが、私も仏教、とりわけ親鸞の仏教に出合うまでは全く、その取材記者と同じように思っていたのだ。

●

VOWS BAR　設立宣言　1992.12.10

私が私であることに　なかなか頷けないけれど
事実　私は私だ
物事の道理に　なかなか気付けないけれど
事実は　道理に従っている
この私が今　そのことに気付くことがなかったら
いつ　気付けるか分からない
私は今　全てのいのちと共にその事実に気付いた

自ら真実に生き　真実に生きようとする全てのいのちと共に
この道を求め　この上なき願いを胸に秘め
世界の端々まで　注意深く物事の本質を見通し
あらゆる圧迫を　恐れず歩む

私は今　その真実に触れた
真実を私の核として　今　街に出よう
我々は今　大阪ミナミの地に
あらゆる人々が　水平に出逢う
VOWS BAR（誓いの場）を設立する

ここでひとつのエピソードを紹介しよう。

私は今でこそお寺の住職だが、坊主になる前は、ある総合商社で働いていた。その商社時代、インドの方と仕事をする機会があった。親しくなると、彼は私に「あなたの宗教は何ですか」と尋ねた。そんな質問をされた経験のなかった私は困った。『家にはたまに黒い衣を着たお坊さんが参ってくるけれど、お話を聞いたことさえない。それで仏教者というにはおこがましい』と「私は無宗教だ」と答え、「日本にはお寺や神社がたくさんあって、初詣とか多くの人がお参りするけれど、それらは単なる習俗というべきもので、何かを信じているわけではない。実は中身は無宗教なのだ」と続けた。

するとインド人の彼は『そんな変なことが、この世の中にあるのか』というような顔をして「君は無宗教というけれど、それでは君は物事をどうして決めているのか」と問いかけた。生まれて二十数年間そんな問いを受けたことがなかった私は、この問いにも困ってしまった。しばらく考えて「それは、自分の信念に基づいて、よかろうと思うことをし、アカンと思うことをしないのだ」と応答すると、彼は私を指さして「それがお前の宗教だ」と言ったのである。

もちろん、そのときは私には何のことやら訳がわからず、「変なこと言うやつだなあ」という程度で過ぎてしまっていたのだが、それから数年して縁あって仏教を志すことになり、ある学校で体系的に仏教を学ぶなかで、その出来事を思い出したわけだ。『ああそうか。あのインド人は、このことを言っていたのか』と。

「宗教」と言うとき日本人は、それは自分の外にあって、自分が困ったときや苦しいとき、悩んだときにもたれこみ、すがりつくものと思っている。それに対し、そのインド人が言う意味は、宗教とは『自分の奥底深くにあるもの。自分が考えたり行動したりする、その根本の基準になるもの。それを宗教と呼ぶ』ということである。

だから、その人に悩みがあろうとなかろうと、その人が苦しみを感じていようといまいとかかわりなく、本来、人間存在にとって宗教は必須のものなのである。

坊主バーでの話題は、政治、経済、社会、宗教とあらゆる分野に渡っている。そして、そのことと自分自身とのかかわりが、そこでの話し合いを通して見えてくる。

「癒し」とは

最近、癒しとかヒーリングという言葉をよく聞く。そしてそれこそが宗教の役割であるといった論調もある。が、私には大きな違和感がある。もちろん、宗教は人間を癒す。しかし、これまで述べてきたように、宗教は手段ではないからだ。いわゆる「癒し」を必要とするような人間そのものを問い、そしてそんな人間を生み出す、この世を問うことこそが宗教だからだ。

いわゆる「癒しブーム」は私には「野戦病院」のように思える。戦争で負傷した兵士を治療し前線へ送り返す仕掛けだ。現代はそこまでいってしまっているのだろうが、だからといって、それでいいはずがない。あくまで緊急避難としての癒しは必要だろうが、より本質的なことは、今の私たちの生活を「癒し」など必要としないものにすることである。

私自身を見つめることを通して「癒される」必要のない本来の私を見出し、世の中を深く見つめることを通して人間を、いのちを傷つける有り様を少なくしていくことこそが、本来の癒しなのではないか。

さいごに

人間は本来どこまで行っても割り切れないもの、「余り」のある存在である。人間には闇が、森が、神話が要るのである。ところが現代日本は、それらを街や生活から追放してきた。小さくて暗くて怪しい坊主バーが「落ち着く」と言われることの訳がそこにある。さらに「自分を語る」ことと「落ち着き」の間柄も見逃せない。

同様に「落ち着く」建物、空間の代表は、お寺、神社、茶室などではないか、一般の家なら、床の間、仏間、仏壇だろうが、それもやはり伝統的な和風がいい。それらはすべて「遊び」の空間、即物的な意味のない空間である。それらをなくしてきた貧弱さを憶う。

この余裕のなさは、建築にも責任があるのではないか。効率という錦の御旗の下で思想的に貧弱なものをつくってきたのではないか。

最近、私は地元の平野郷で「町並みづくり」にかかわり、新しい町家の提案を技術者にしてもらっている。その中で今風の安い「都市型三階建て」の提案もしてもらい、小さい敷地でも中庭をつくるような設計も出てきている。このように一部屋減らして、便利さを少し減らしてでも遊びの空間をつくるような提案が、今後あらゆる場面で大切なのではないかと思われる。と同時に、キーワードは、あくまで暗く怪しい、闇、森、神話であって、人間の、いのちの癒しは決して計算ではできないことを忘れてはならないと思うのだ。

坊主バー　TEL 06-6213-4345　19:00～1:00　（きよし　ふみひこ　瑞興寺住職）

総論 9

安らぎの旅～四国遍路～

梶川　伸

「虚往満帰」。四国八十八カ所を自転車で回り始めた時、一番霊場・霊山寺の芳村超全住職から、はなむけに送られた言葉だ。「弘法大師は中国に渡る際、何もあてにせずに行った。でも、たくさんの成果を持ち帰った」の意味だという。約1400キロを走り終わった時、私が得たのは「遍路道には安らぎの仕組みがある」という確信と、それを実感させるたくさんの思い出だった。

1995年12月から96年10月にかけ、2泊3日ずつ9回に分けての遍路だった。先輩記者にもらった自転車「ロードレーサー」に乗った。前回走り終わった所までは公共交通機関で行き、そこで自転車を組み立てて走り継いだ。49歳から50歳にかけてのこと。阪神大震災を取材し、あるいは取材の指示をすることで、おびただしい死に遭遇した後でもあった。人生がわかりかけた気がした時期のどんでん返し。ばく然と「何か」を求めていた。

自転車は素人に近い。山道の多い四国遍路は、ちょっと無謀な旅だった。不安いっぱいだった私を包んでくれたのは、「お四国さん」という、何とも優しい響きだった。遍路道周辺の人は、四国八十八カ所巡拝のことを、親しみを込めて言う。この「お四国さん」の言葉の中に、すべての本質が含まれているような気がする。

例えば、こんなことを経験する。最初の難所は十二番・焼山寺。標高800メートルの山がそびえている。「自転車で登れるだろうか」と、弱気になっていた。すると、「学生さん、お四国さんじゃろ。お接待するわ」と、土産物屋の女性が鳴門金時の焼きイモをプレゼントしてくれた。「学生さん」というお世辞と、温かい焼きイモに勇気百倍。自転車を押し上げ、4時間あまりをかけて何とかたどり着いた。これが大きな自信となった。

「お接待」は、お四国さんの世界の代表的なものだ。お遍路さんを、お金や食べ物などでもてなす習わしがあり、それをお接待という。特に、歩き遍路は弘法大師と同じとの位置づけで、厚くお接待をする。私が知り合った女性の歩き遍路は、「お金だけで数万円をいただいた」と話していた。多い人で数千円、少ない人で100円。数十人が志を託したことになる。数の多さにびっくりするだろうが、それは弘法大師への信仰でもあるし、お遍路さんのバックアップシステムでもある。各地で地域共同体が崩れていく中で、遍路道の周辺には「心の共同体」が残っているともいえる。

この女性はお接待のお礼に、手作りの貝のお守りを渡していた。ちょっとしたものを、お礼に用意している人は多い。心と心の受け渡しで、お接待は一方通行から双方向の触れ合いの場に発展する。

私も、この女性にたくさんお守りを譲ってもらい、お礼にした。お金こそなかったものの、食べ物、飲み物のお接待は随分と受けたからだ。二十番・鶴林寺（標高570メートル）は、厳冬の1月に登った。顔は鼻水と汗にまみれた。ミカン畑の女性が「のども乾くじゃろ。食べてみるで(みますか)」と、ミカンを差し出した。二十七番・神峯寺（450メートル）の下で、自転車を組み立た時のことも忘れられない。おばあちゃんに水をくめる場所を聞いた。おばあちゃんは300メートルほど離れた自宅の井戸まで案内した。「うちの水はおいしいきに」と。水を水筒に入れると、赤飯の差し入れも。近くでもらったばかりだという。「近所の人に見つからんよう、早うしまいなさい」と忠告までしてくれる。寺への途中、2本のボールペンをはし代わりに使い、おいしくいただいた。

六十番・横峰寺（700メートル）から下りる途中のお接待は、ずっと記憶に残るに違いない。梅雨の時期で、土砂降りの日だった。ずぶ濡れの体に、山の冷気がからみつく。下りなので風を切り、ウインドブレーカーを着ていても、ふるえがきた。たまらず、バスの待合所で雨宿り。係の人は親切だった。「雨の中の自転車はつらかろう」。そう言って、その地方の名物だという「カンコロもち」を差し出した。カンコロもちは、サツマイモと小麦粉を練った皮であんを包み、焼いてあった。口から体へと、温かさがしみ込んでいくようだった。

貝のお守りには、不思議な巡り合わせがある。五十七番・栄福寺で、徳島の夫婦遍路に出会った。休みのたびに回っていた。写真を撮ってもらったお礼に、お守りを手渡した。それから3カ月あまりたった。私が遍路を始めた時は、職場が大阪だったが、弘法大師のお導きかどうか、その時は高松勤務に変わっていた。お守りを作った女性は何回かに分けて、歩いていた。香川県に入るという連絡があり、七十九番・天皇寺で出会った。再会を喜んでいると、夫婦が声をかけてきた。「これをいただいた者です」と、遍路用品を入れるずた袋につけたお守りを指さす。栄福寺で出会った夫婦だった。「この女性が作ったんですよ」と紹介し、みんなで偶然を喜んだ。

心の共同体

遍路での出会いには、物語になるものが多い。その理由の一つは、満願までには日数がかかり、喜怒哀楽の体験をする機会が多いことだ。二つ目は、喜怒哀楽を話せる相手が身近にいること。それは遍路同士であったり、遍路とそれを見守る人であったりするが、遍路の一点で共通の基盤がある。だから、「どちらからですか」のあいさつだけで、心の共同体に入り込むことができる。三十九番・延光寺のお参りをすませ、遍路宿のような民宿に泊まった時には、福井県敦賀市のグループと食事が一緒になり、カラオケでデュエットするほど盛り上がってしまった。「これもご縁で」の一言で、すべてが事足り、互いに年賀状のやり取りをするまでになってしまう。こうし

て、お四国の輪は広がっていく。

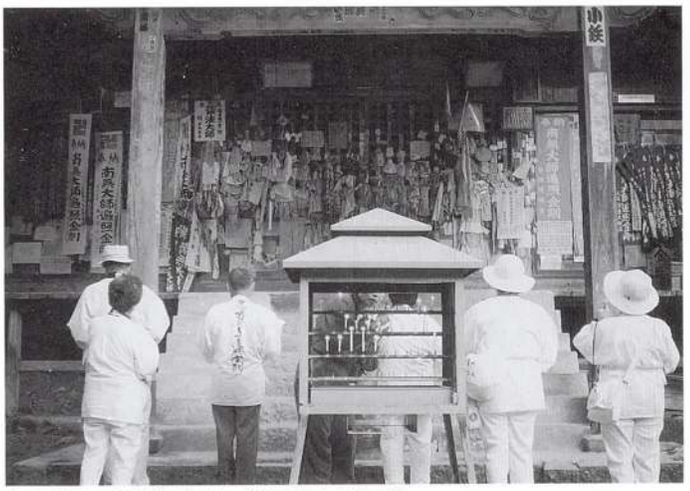
物語はいくらでもある。三十八番・金剛福寺へ向かう途中、道を間違えて40キロも遠回りをした。そんなイラだちも影響したのか、下り坂で頭から転倒してしまった。時速30キロは出ていただろう。かなりの時間の記憶が戻らないし、顔や手足にけがをし、自転車もブレーキなどが壊れていたので、相当な衝撃だったと想像できる。ヘルメットを被っていなかったら、危なかったかもしれない。どのくらい時間がたっていたのか、我に帰った時には、フラフラと歩いていた。いや、そうだったという。それは、「大丈夫ですか」と、声をかけてくれた男性が説明してくれたからだ。声をかけてくれ、応急手当てをしてくれなかったら、車にひかれていたかもしれない。ヘルメットとともに、命の恩人だと思っている。

男性は、愛知県から来た修行僧だった。寺を継ぐことになり、檀家から「四国八十八カ所を２度回るように」と言われ、２度目の修行の最中だった。いい人に助けてもらった。テントや寝袋など30キロを超す荷物を背負っていた。私にとっては、弘法大師のように思えた。ところが、もうろうとしていたためか、男性の名前も寺の名前も聞いていないことに、後になって気づいた。ただ、小さな山を指さして「あんな山のふもとに、信徒の宿泊施設を作るのが夢」と話していたことは、鮮明に覚えている。今は、せめてもの感謝の気持ちを込めて、それが正夢になることを祈っている。

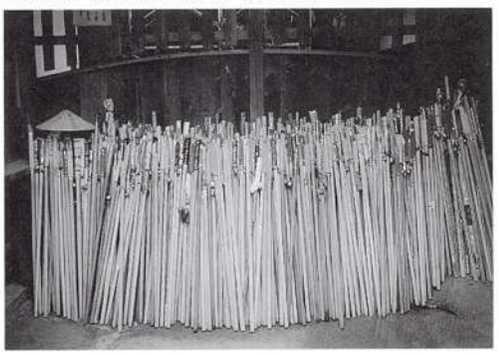
五十四番・延命寺では、自転車遍路の先輩に出会った。友人が子どもを亡くし、その戒名と共に走っていた。遍路同士のうえ、自転車という共通項があり、垣根は一瞬に取りはらわれた。それが、お四国たるところだろう。５分ほど雑談をして、「高松を通る時には寄ってください」と言って別れた。彼はちゃんと訪ねてきた。お接待のつもりで酒を酌み交わし、讃岐うどんの店にも行った。時折、手紙が届く。「がんと闘っている」と書いてある。お四国を５分間ともにしただけで、そこまでの仲になれることがうれしくもある。

「本日家族」

思い出をもう一つ。二十八番・大日寺の近くで、都築靖夫さんのお宅に泊めていただいた。都築さんは納屋を改造して２部屋を造り、歩き遍路には無料で使ってもらっている。私は自転車だが、自力での遍路には違いなく、お許しが出た。ふろに入れてもらい、夕食、朝食をごちそうになり、昼のおにぎりまで用意してもらった。「家族と思うとるから、気兼ねせんでもええ。あるもんを、分け合って食べるだけよ。だから、いつ来ても困らんわけよ」。決して豊かな農家ではないが、それが都築さんの基本姿勢だった。歩き遍路は、ノートに住所と名前を書けばいい。私がお世話になったのは、96年１月



白衣を着て回るお遍路さん（第四番大日寺で）



八十八番大窪寺には、使い終えた遍路杖がたくさん奉納されている

だったが、その前の年のノートには、200人近い名前が連ねてあった。ノートのタイトルは「本日家族　増員名簿」。お四国の神髄が、そこにあった。

八十八番・大窪寺には、たくさんの遍路杖が奉納してある。結願のお礼だ。私は自転車なので杖はない。代わりに、貝のお守りを納めた。その夜は、寺の近くの民宿に泊まった。達成感から、ほっとする瞬間。夕食に赤飯が出た。「お疲れさん。何ちゃできんけんな」。女将の言葉に、思わず熱いものが込み上げる。この瞬間に、達成感は「また回りたい」という気持ちに変わる。

そう思うのは、私だけではない。何度も訪れる人は多い。「都会の生活に疲れると回るんです」という人もいる。遍路の最中に知り合った高松市の男性は、その時点ですでに214回を数えていた。20年前に脳血栓で倒れたという。右半身が十分ではなく、言葉も不自由だが、片手片足で運転できる自動車に乗り、改造した助手席で睡眠をとりながら。リハビリを兼ねた遍路だが、それを受け入れる優しさが、お四国にはあるのではないだろうか。

お四国には、安らぎの装置がある。それは、最近の言葉を使えば癒しであり、ヒーリングである。修行僧ではない一般の人が回る遍路は、江戸時代に定着したとみられる。長い歴史の中で、安らぎの装置は空気のようなものとして遍路道を包むようになった。経済効率や合理性を追求する過程で、各地で地域共同体が崩れていった。その中で、最後のとりでとして残っている共同体が、お四国かもしれない。それは経済効率や合理性とは対極にある、心の結びつきだからだろう。心の共同体の温もりを知ると、時々里帰りをしたくなる。私自身も、次は歩いて回ろうと、心に決めている。

（かじかわ　しん　毎日新聞編集委員）

各論10

癒しの空間ビジネス～サンドセラピーの治癒（砂塩温熱サロン）～

力石秀夫

“癒しの空間ビジネス”の発信

現代人は高度な文明によって、満たされたドリームをイメージしてきました。移動時間の短縮化等の利便な生活や、コンピュータ等の情報社会、充実した医療の高齢化施設等、一見すると科学的に発展した社会は理想的な都市構造を持っているように見えます。しかし、生活の利便性ゆえに忙しく追われる毎日があり、さらに食習慣にもアンバランスな影響が生じています。スピード時代でめまぐるしい速度が求められながら、コンピュータ処理の作業が増えています。リストラも増え、高齢者施設においても公共的な補助事業は元気な老人をつくる余裕がありません。それはシステムをつくろうとする意識が先行した結果、人間の本来の創造性を高めて計画された事業とは、ほど遠い距離にあると思われます。

21世紀にひろがる癒しの空間ビジネスは、「からだとこころ」を解放し、「やすらぎとときめき」を感じることのできる環境ビジネスです。心豊かな意識と創造で「生き生き」とする業態を発信してゆきたいと思います。特に治癒力のあるサンドセラピー（砂塩温熱サロン）を、ここにご紹介します。

“癒しの空間”の展開

リラクセーション環境ビジネス――健康・美・癒しをテーマとする環境事業で、「人間を生き生き」させる新規事業として以下の提案をします。

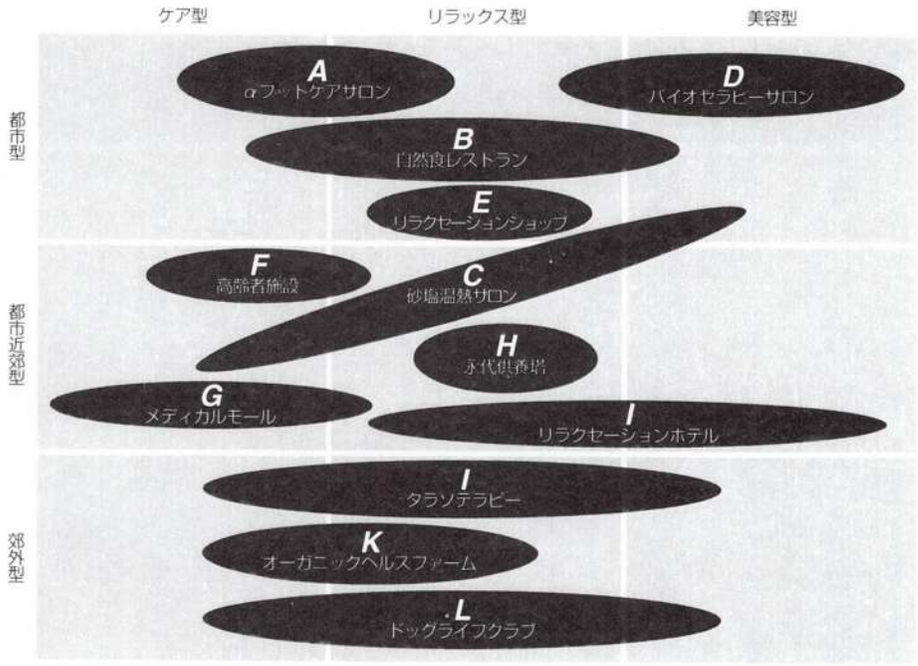
サンドセラピー（砂塩温熱サロン）とは

45°の砂塩風呂に15～20分間埋まり、内臓を十分温めます。その後シャワーを浴び、吸水性の良いガウン等に着替えてリラックスルームで休み、すべて種類の違う薬草茶を7～8杯飲みます。砂塩風呂で一次発汗をし、薬草茶を飲みながら二次発汗を促します。サラサラの汗は気持ちのよい体験です。健康ランドやサウナでは味わえない健康理論に基づく温熱療法です。砂には液体セラミックの触媒作用で脱臭効果があり、優れた抗大腸菌、防カビ作用があり、体験すると新陳代謝が活発になり、体が軽くなります。

環境デザインとのコラボレーション

砂塩温熱サロンは、発汗によりからだ中の毛穴から汗が吹き出してきます。温熱療法の基本は気持ちのよい発汗です。サンドセラピーの特徴は汗臭い匂いがないことです。砂塩温熱室内では特殊処理をした内装がノウハウであり、抗菌・防カビ・毒性のない安全なシステムが組まれています。原塩も入り、タラソ効果も期待できます。

人が失いつつある自然の感覚を呼び起こすために、床材には竹炭を敷き込み、それぞれ異なる質感のフローリングや石材のテクスチャーを使い分けます。足の裏でその素材に触れ、質感と温感の気持ち良さを感じます。壁にもマイナスイオンが発生する素材を使い、心地よい質感とやさしい色彩がリラックス感を与えてくれます。照明も昼間の自然光と夜のシェードのあかりによって雰囲気もまるで



癒しの空間ビジネス

A αフットケアサロン
外反母趾の矯正、足の疲れを取る“足からみた全身健康”サロン

B 自然食レストラン
毎日食べる食事、無農薬・有機野菜を主体に元気になるレストラン

C 砂塩温熱サロン
血液の血行が良くなり、体内の毒素を排出する“出す健康法サロン”

D バイオセラピーサロン
集客力のある場に展開のしやすいリラクセーションサロン事業

E リラクセーションショップ
心のおちつくCDや香り、元気のでるアロマ、映像、グッズなどの生きがいSHOP

F 高齢者施設
人間の人格を重視したシルバーケア、ユニバーサルデザイン

G メディカルモール
さまざまな医療を合理的に再構成した地域型メディカル事業

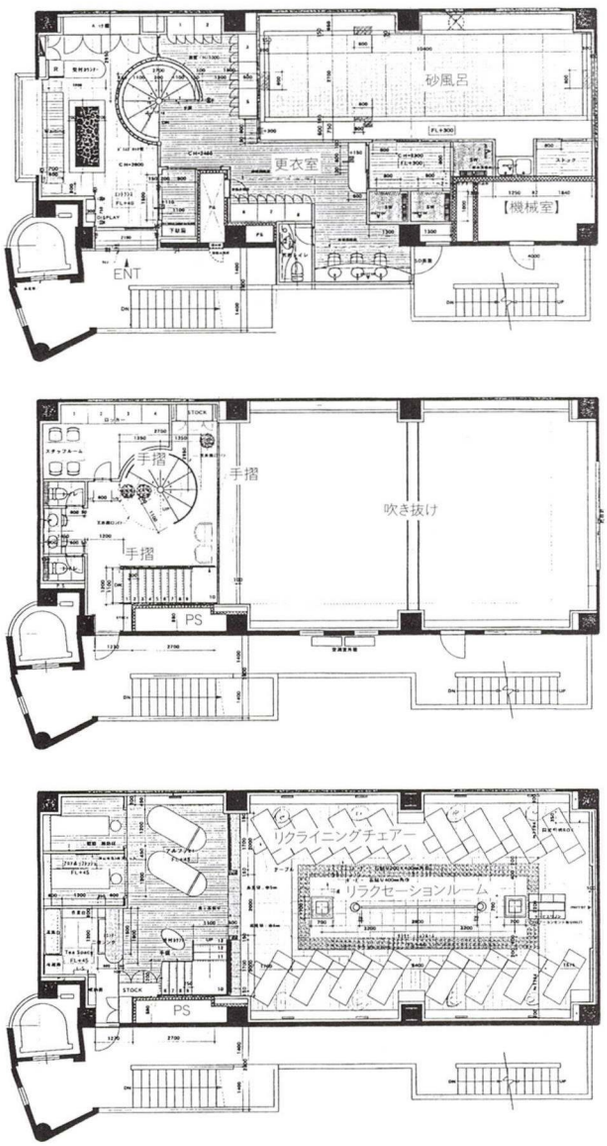
H 永代供養塔
家制が崩壊し、高価格のお墓に代わる安心できる永代供養塔事業

I リラクセーションホテル
究極のリラクセーションを、個性的にサービスする事業

J タラソテラピー
海洋療法のメニューをレジャー志向に楽しめる美と健康の事業

K オーガニックヘルスファーム
都市と農村を結ぶ農業体験型交流の活性化事業

L ドッグライフクラブ
犬と人間の共生をテーマにした、宿泊、育成、イベント関係などで地域の活性化事業



笹塚砂塩温熱サロン



砂塩温熱サロン

変わります。音響にも特別なスピーカーを使い、位相性（定位）が極めて良く、驚異的な忠実性のある音色が体験できます。

砂塩温熱サロンでは、すべての環境の考え方が「癒しの空間」です。

サンドセラピーの治療効果

砂塩温熱の体験者の感想は、「気持ち良かった！」という一言につきます。一次発汗～二次発汗も初めての体験ですし、サービス体制そのものが、コミュニケーションを主体にした親しみやすいシステムになっています。気持ち良さはそのまま体の免疫性向上につながります。新陳代謝が活発になることで免疫性は向上し、血液・体液の流れはスムーズになります。特に女性の冷え性や、すべての世代に蔓延してしまった生活習慣病にも効果を発揮します。アトピー性皮膚炎などの症状も何度か温浴に通うことで改善されています。肩凝り腰痛は、いまやＯＡ機器を扱う20代の人々にも多いのですが、砂塩温熱浴で症状は軽くなり、驚くほど全身の疲れが取れるといわれています。

砂に埋もれ、温熱により人間の心身が治癒されてゆくのですが、古来、土中に埋めてからだを浄化させたり、解毒させる療法は世界中の伝統療法のなかにあります。古くて新しい温故知新の遺産でもあるのです。砂塩温熱浴は、室内型でメンテナンスフリーでオペレーションが楽な点が強調されますが、他の温浴事業より設備投資が少なくてすむ点も魅力的な事業です。まさしく「21世紀の癒しのビジネス」なのです。

砂塩温熱サロンの治療効果

- ●物理療法――100kg～200kgの砂塩が身体を包むことで、血行と体液の循環を促します。
- ●温熱療法――砂塩の温度調節にて体内温度を41°～42°として、幹部に最大限の効果をもたらします。
- ●海塩療法――ドライな塩風呂として、海洋療法の一翼を担います。皮膚及び毛髪に効果があります。
- ●浴中イオン効果――皮膚呼吸により、体内イオンバランスをとります。
- ●空気イオン効果――呼吸により、体内イオンバランスをとります。
- ●電位バランス効果――体内静電気を取り除き、陰陽のバランスをとります。
- ●転地的効果――素朴で自然なリラックス効果があります。
- ●カウンセリング効果―浴中でのコミュニケーションで心をほぐします。
- ●自然心理効果――副交感神経の蘇生により、自律神経のバランスをとります。
- ●触薬効果――砂塩の圧迫で細胞の活性効果があります。
- ●イメージ効果――自然との一体感、地球との一体感があります。

（りきいし　ひでお　株式会社ワンネス代表取締役、日本リラクセーション協会理事長）

力石秀夫プロフィール
リラクセーションの発想をあらゆる空間に計画し、人間の環境・企業の環境・地域の環境に企画・設計・提案するなどトータルなプロデュースをしている。
著書に「リラクセーション・ビジネス」（監修）、「今すぐできる超リラックス法」（監修）、「リラクセーション／ヒーリングビジネス事業計画資料集」（総合ユニコム）など。

みてあるき

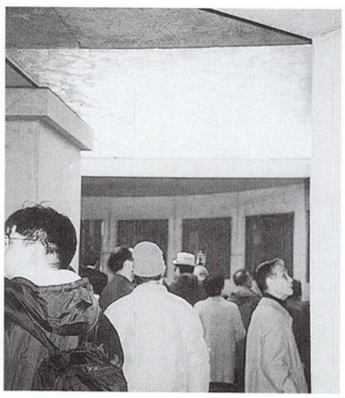
癒しの時・空間

小浦久子／鈴木克彦／田中直人／紅谷昇平／松田奈緒子／吉村英祐

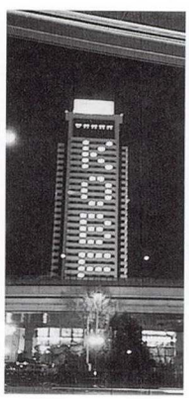
祈る

2000年1月16日に除幕された阪神・淡路大震災の「慰霊と復興のモニュメント」の地下には、震災で亡くなった神戸市内の4,515人の名前が刻まれた。ここで悲しみを新たにする多くの遺族の姿に、しばし絶句（神戸市役所南の東遊園地にて）



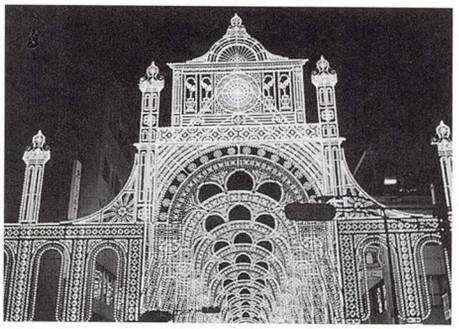


2000年1月17日、3年ぶりに"KOBE"の窓文字を描くホテルオークラ神戸。5年前の、あの気持ちを決して忘れまいとのメッセージ





阪神・淡路大震災から5年たった2000年1月17日の夜、今年も鎮魂の竹灯籠に市民が次々と点灯した（ＪＲ新長田駅前にて）。点灯するセーラー服姿の女学生の心に去来するものは何だろうか

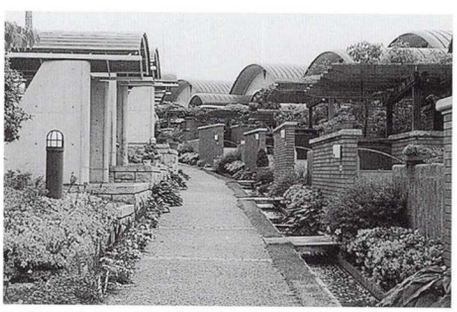


神戸の年末、冬の寒空に輝くアーチは多くの人の心を癒すアートである。復興とともに観光化してきたようだが、多くの人をやさしく癒してくれる環境をもたらすことには間違いない。当初の心を失わずこの地で継続することを願う人も多い

住まう



タウンハウスにはガーデニングがよく似合う。美しい庭は住まい手の心を癒してくれるが、近隣に対する心配りでもある



コモンスペースに咲き乱れた花々は、住まい手による共同社会に対する思いやりである。他人への思いやりほど心を癒してくれるものはない



行き届いた管理で築20年を経たとは思われないタウンハウス。緑豊かなコモンスペースに囲まれた住環境は、いつまでも住まい手の心を癒してくれるパラダイスである

風を感じる



街の雑踏をぼんやりと眺める。これでも都会のOLにとっては唯一の癒し

古びた木の椅子に座ったら、ほっと肩の力が抜けた。風を感じる。去りがたい思いが私を満たした



興じる



商店街の中にある熟年者専用のゲームセンター。「誠に恐れ入りますが、若い方の入場はご遠慮願います」という注意書が貼られた大人の遊び場である。「50歳以上の方に限り」無料のお茶も嬉しい





情報化社会にあっても若者に支えられている占いブーム。街角に居座る人気の占い師の前には連日、若い女性が列をなしている。ゲームセンターにも占いコーナーが設けられているが、このコーナーだけは本物の人間が相手である



ゲームで疲れた時はちょっと休憩…店の一角に設けられた休憩所とマッサージ機。癒しのために必要なのは、ちょっとした空間と心配りである



ゲームに癒しを求めているのか、無機的な音だけが響く中でテレビゲームに没頭する若者二人は「友人」か、それとも赤の他人か



ここは、ゲームを話題に、様々な人の交流を育む場でもある。広々とした見通しの良い空間、明るい照明、音量を抑えたゲーム音やＢＧＭなど、日頃見慣れたゲームセンターと違う和やかな雰囲気が新鮮だ



射撃系ゲームに熱中する中年男性の思う相手は上司か部下か、それとも…。奥にあるレトロコーナーでは30代らしき男性がハマっていた。ここでは「非常口」のサインも意味ありげに見えてくるから不思議である

占う



20代前半の男性が、ベテランらしき女性占い師に見てもらう姿は珍しくない。ドライと言われる現代の若者も、悩みの相談相手が必要なことがある

群らがる



どこでも、なごみ空間に変えてしまう若者たち。生演奏付きのここは、超お気に入りの空間



政治家や事業家も、最後の決断には運命鑑定に頼るというのを聞いたことがある。この「運命学研究所」の門をくぐるにはかなり勇気がいりそうだが、それだけ思い詰めている人が多いということかもしれない



誘蛾灯に引き寄せられる虫のように人が集まってくる深夜のコンビニ。駐車場が十代の若者たちでにぎわうのは、彼らにとって数少ない心やすらぐ居場所なのであろうか



帰宅前の軽い一杯のつもりが、ついつい終電になることも。退社後まっすぐ帰宅できない人にとって、ここは最高の癒しの場なのかもしれない

癒しの時・空間

原点をたどる



生け垣から顔を覗かせているお地蔵さん。街行く人々が思わず足を止めたくなる風景は、街並みに対するやさしさであろうか

癒し系の店が注目を浴びている。占い喫茶、くらげバー、こたつ映画館…。大阪・西心斎橋にあるこの坊主バーは、本物の住職が経営し、店内で働いている店である。いたる所に目に付く「南無阿弥陀仏」の前で、どんな会話が弾んでいるのだろうか

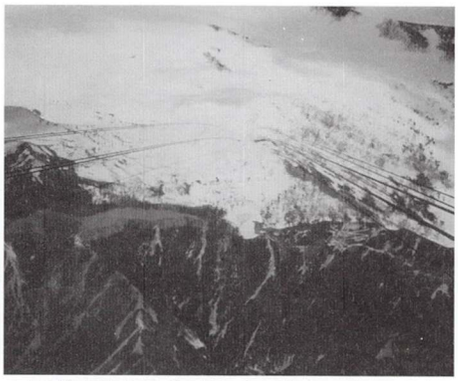




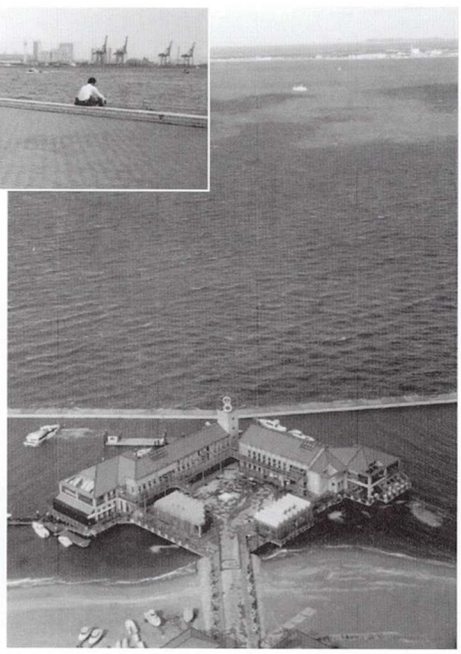
地域の衰退化に対して、その再生の方策として音と映像をアーケードのスクリーンいっぱいに展開。かつての繁栄の時代から現代に至る有名アーチストの名曲が連続する空間は、まさに郷愁を感じさせる癒しの環境となる

自然と語る

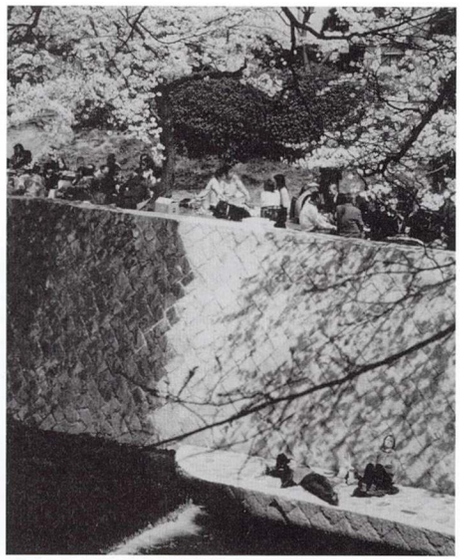




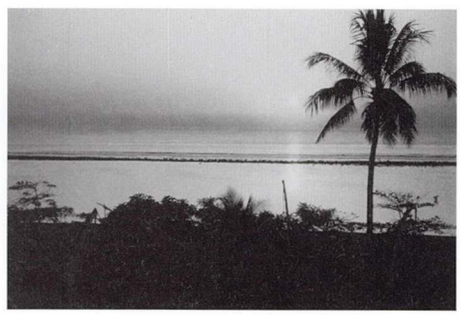
立山の雄大な雪原の前では、人間がいかに小さい存在かを改めて思い知らされるとともに、日頃の悩みも些細なことのように思えてくる



雄大な光景とともに、波の音や汽笛を体感できる海辺は誰もが癒しを求めるスポットである。そんな魅力の場所に商業施設も仲間入りである



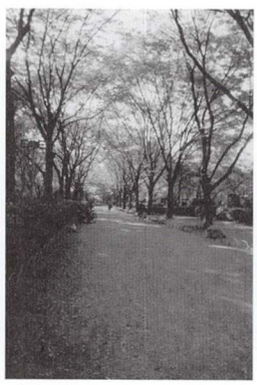
西宮・夙川の桜と土手を枕にお昼寝



バリのプライベート・ビーチの朝日



広大な回遊式庭園を足が向くまま歩くのも、たまにはいいものである。黙ってすれ違う人がみな自分と同じ目的に思えてくるのは、気のせいか（岡山・後楽園にて）



パリで暮らしたことのある友人が、「大阪のリュクサンブルグ公園」と呼ぶ。“大阪の”ピエールが、ジャンが、疲れた心身を癒していく



西の空をオレンジ一色に染めて沈む夕日に、心が洗われる思いがする（大阪ドーム横・岩松橋から）

「建築と社会」誌

特集一覧●1978～1999

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6348-0635、FAX 06-6348-0634）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1978 Vol. 59	●デザインの動向―新旧のコントラスト	●水*	●医療施設―病院建築と情報システム	●外壁塗装材料*	●電波障害と建築*	●組合方式による集合住宅計画*	●住宅設備	●新しい耐震設計	●CAD―設計とコンピュータ	●一般号*	●第25回青年技術者*	●ビル環境
1979 Vol. 60	●転換期の再開発*	●大阪南港ポートタウン*	●商業空間*	●コンクリートのひびわれ	●日影規制*	●ホテル建築と情報システム	●農村施設の変貌*	●建築の終局強度の検討	●庄内のまちづくり*	●80年代のインテリア*	●第26回青年技術者*	●建設業の労務事情*
1980 Vol. 61	●80年代の都市と建築―まちづくりの歴史と展望	●今後の省エネルギーの趨勢 ●建築金物	●最近の銀行建築 ●安井建築設計事務所作品集	●住宅の耐久性*	●建築行政と法規*	●最近の防水工法	●都市景観とアメニティ*	●屋内体育施設の設備*	●水ぎわのまちづくり	●今後の外装吹付仕上材*	●第27回青年技術者 ●転機にたつマンション・集合住宅	●これからの建築設計と新耐震設計法*
1981 Vol. 62	●職能論*	●中国の論文―北京の都市計画*	●ポートピア'81*	●台所まわりの計画と設備*	●シーリング材の知識*	●災害と法―安全な環境をめざして*	●都市住宅―住まい手からの発想*	●建築物と風―デザイナーのために ●日建設計作品集*	●住宅・都市整備公団―関西における都市整備を中心とした新公団の役割*	●間仕切壁の性能評価*	●第28回青年技術者*	●障害者の暮らしやすい環境と設備
1982 Vol. 63	●新たな商業空間の展開*	●省エネルギーと開口部*	●医療施設―地域医療と設備計画*	●近畿の地盤と地質*	●都市景観―まちなみ美観への誘い*	●大阪市庁舎（第一期）*	●ホール建築と音*	●大スパン構造*	●昭和設計作品集*	●絵本にみるすまいとまちづくり ●オー・エム・ホテル日航ビル	●第29回青年技術者 ●地方の庁舎建築*	●風土・空気と人間*
1983 Vol. 64	●関西の建築文化を考える	●マイコンの建築への利用	●多様化する運動施設*	●建築と品質管理	●計画におけるコミュニケーションとプレゼンテーション	●大阪駅とターミナルビル	●維持管理と設備更新	●東海の将来と文化を考える	●オフィス・インテリアの変革	●プレストレスト・鉄筋・コンクリート構造	●第30回青年技術者 ●大阪城国際文化スポーツホール*	●集合住宅と生活音
1984 Vol. 65	●21世紀への関西―魅力あるまちづくりを問う	●関西の超高層ビル*	●ビルのリフレッシュー内外装補修技術の現状と発展―*	●建設産業とロボット開発*	●住環境と法制度	●まちの活性化と商業空間 ●京都駅南口再開発ビル*	●消防設備のポイント	●みどりとそれをとりまく人々	●高齢化社会と生活空間	●床の構工法	●第31回青年技術者 ●ディテールの思想	●光応用システムと建築
1985 Vol. 66	●大阪湾物語*	●東海の現在と近未来	●自由様式への道―建築家安井武雄 ●建築物の基礎を考える	●情報化をめぐる建築・都市事情	●ホール―それが生みだす文化―	●建物の表情―最近の外壁材料	●大阪国際見本市新会場	●建築と水の演出 ●神戸研究学園都市	●都市と健康・スポーツ	●接合―人体と建築にみる― ●日建設計作品*	●村野藤吾の一断章 ●伊勢湾をめぐる東海	●第32回青年技術者
1986 Vol. 67	●これからの住空間―都市型集合住宅にみる	●屋根―そのデザインと素材	●現代デザイン―ポストモダニズム10年 ●これからの防水工法	●インテリジェントビルの建築・設備計画	●自治体営繕と公共建築	●建築防災と法 ●大阪市庁舎（第2期）	●21世紀の住宅と設備	●開発―その創造的仕掛けの鍵をもとめて― ●ツイン21	●CAD―その応用と展開	●オフィス空間の構成	●第33回青年技術者	●インテリア・イクステンションとリニューアル
1987 Vol. 68	●入浴物語	●腐食	●創立70周年記念号	●躍動する東海へ	●貯蔵・保管施設 ●大阪府立体育会館	●室内の仕上床	●駅	●行政建築家の可能性	●シティホテルの設備	●宝塚のまちづくり	●建物と町並みの接点 ●昭和設計作品集	●第34回青年技術者
1988 Vol. 69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統―東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装リフレッシュ*	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明*	●制振*	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ* ●大阪府営繕	●第35回青年技術者 ●800号記念*	●讀賣テレビ
1989 Vol. 70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術*	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備Ⅰ	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店建築設計部作品集	●都市環境創造と設備Ⅱ ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 Vol. 71	●商品化住宅のデザイン*	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館*	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識―中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化―設計の多様化をめざして―*	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営繕の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観*	●高級感―建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 Vol. 72	●新しい都市空間づくりーⅠー	●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくりーⅡー ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念*	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識―複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号*	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木―構造技術の世界― ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 Vol. 73	●夢物語―人がかわる、まちがかわる―	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン―東海支部―	●建築家のための設備知識―集合高層住宅の設備システム―	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り―住宅・都市整備公団関西支社10周年―	●木構造を使ってみませんか―集成材による構造―	●接着―建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」	●屋台―仮設の魅力に学ぶ― ●ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 Vol. 74	●第39回青年技術者 ●東畑建築事務所創立60周年記念作品集	●大阪府営繕	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境―限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生―構造技術の役割― ●大阪市営繕	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境―人にやさしい空間創造をめざして
1994 Vol. 75	●コピー文化の新時代 ●広島の街創りアジア競技大会	●九州のインスタレーションと毅	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かって―会員作品*	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美―建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 Vol. 76	●光がつくる風合の世界*	●音―騒音から操音／創音へ	●飛騨・美濃―まちの活性化と地方文化	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法―会員作品	●新しい「都市・建築」の視点*	●建築構造と社会の接点 ●日建設計*	●ライフラインと建築設備*	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 Vol. 77	●阪神大震災から学ぶ*	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念*	●遠江―その地域振興と文化	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害!非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 Vol. 78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり*	●東海支部会員作品 ●金沢・能登―風土・文化とまちなみ・建築	●創立80周年記念／建築と私と社会―80人の眼―	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興―法・制度の運用と新たな展開へ― ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市整備公団改革への提言	●クロスワード都市OSAKA*	●モザイク都市の住むかたち ●昭和設計40周年	●私の空間作法―会員作品―	●第44回青年技術者 ●京都駅ビル
1998 Vol. 79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州―諏訪とその周辺―	●街並みの演出―最近の外構材料	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備―ビルメンテナンスの立場から	●建築への証言'98―21世紀に向けて	●ゆれをとめる―たえる技術からかわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 Vol. 80	●"らしさ"のデザイン ●建築を綾どる小枠なモノの仕掛人	●大阪市都市整備局	●東海支部会員作品'99 ●北信濃―街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法―まちづくり・すまいづくりへの展開―	●私の目でみた環境問題	●アーバン・インテリア―都市空間としてのインテリア	●木とともに	●私の空間作法	●第46回青年技術者

*は欠号

Watching

建築家の本棚
ー若林広幸氏を訪ねてー

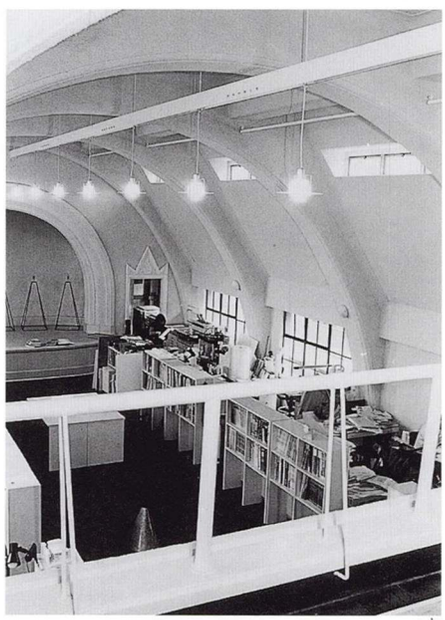


若林広幸建築研究所が買いとり保存している1928ビル

自分の尊敬している、あるいは憧れている建築家は、一体どのような本を読んでいるんだろう…どうしたらあんな作品がデザインできるのだろう…、そんなことを考えたこと、ありませんか？
このシリーズは、現在活躍中の有名建築家の本棚を拝見するコーナーです。
今回は、斬新な発想で、ユニークかつどこか夢のある作品を創りだしてこられた若林広幸氏を取材させていただきました。
若林氏はどのような本を読み、それらが彼の作品づくりにどう影響してきたのでしょうか…。若林氏に質問してみましょう。

質問コーナー

――幼少の頃はどのような本を読まれていましたか？
父が毎月買って帰って来た、確か「科学グラフ」とかいう雑誌をよく読んでたね。小学５、６年頃からは「模型とラヂオ」とかいう電気関係の本をよく読みました。当時はラジオなんかを自分で作るのが流行っていたんですよ。自分で部品を買いに行ってよく組み立てていました。
(男の子はそんなものが好きなんですかね～。女の私には理解できません。でも、何となく若林氏の作品に大きく影響している気がします。)
小説といった文学作品はほとんど読まなかったですね。興味がなかった。
――学生時代はどうでした？
中学生の時は、電気関係と共に考古学に興味があり、「魏志倭人伝」や「古事記」、「日本書紀」なんかを読んでたね。
(すごいんですね～。大人。)
高校の時もやはり考古学に関する本なんかを読んでたな～。
(ほ～、いろんなことに興味があったんですね。)
18歳ぐらいから、世の中とか様々なことに対する不条理について考え始めるようになり、難しい本を読みあさりました。ほとんどわからなかったけどね（笑）
――現在はどうですか？　最近はどんな本を読まれました？
最近はあまり読まないね～。
(やっぱり、お忙しいですもんね～。)
むしろ、映画を観たり、展覧会を観たりして、イマジネーションの増幅につとめています。幅広いジャンルのアートを観てますよ。特に、相反するものが共存しているようなものに興味がありますね。
――いつもどんな雑誌を見られているんですか？
建築雑誌はもちろん、イタリアの「domus」をよく見ます。あれは、建築だけでなく、いろんな分野の情報も載ってるし、すごくきれいな雑誌やね。それから、「ニュートン」とかもよく見るね。





――それでは、本日のメイン、これまでで印象に残っている本、影響された本を教えてください。

(1)「般若心経」
(2)「異邦人」　カミュ
(3)「反抗的人間」　カミュ
(4)「シーシュポスの神話」　カミュ
(5)「アレンギンスバーグ詩集」
(6)「現代人の異常性」(「現代のエスプリ」別冊)
(7)「かくれた次元」　エドワード・ホール
(8)「クロノス・エロス・タナトス」　マリー・ボナパルト
(9)「つくられた桂離宮神話」　井上章一
(10)「法隆寺への精神史」　井上章一
(11)「南蛮幻想」　井上章一
(12)「誘惑するオブジェ」　宇波　彰
(13)「エデンの恐竜」　カール・セーガン
(14)「記号のエコロジー」　宇波　彰
(15)「野生のテクノロジー」　今福竜太
(16)「共生の思想」　黒川紀章
(17)「建築家なしの建築」　B.ルドフスキー
(18)「ドムス」(雑誌)
(19)「ルドー作品集」　LEDOUX
(20)「シュペアー」　SPER
(21)「カルロ・スカルパ」
(22)「白井晟一作品集」
(23)「G・Bピラネージ」
(24)「ナニワ金融道」?　青木雄二

(やっぱり、様々な本を読んでらっしゃるんですね。「ナニワ金融道」ってマンガですよね。マンガも読まれるなんて意外で、おもしろい。)

――お答えいただいた本の中で、特にお好きなもの、印象に残っているものはどれですか?

う〜ん。「般若心経」かな〜。これは、絶対とは相対であるということを教えていて、この経典のおかげでモノの考え方、見方に柔軟性が出来ました。ここで語られていることはすべてのことに通じると思うし、そういう意味で、この本(お経?)は僕のバイブルとも言える。

(う〜ん。分かるような気がします。とっても深いですね。)

――少し、作品についてお聞きします。デザインされるとき、いつもどのような点を一番に考えておられますか?

機能性かもしれません。そして、それに対して不合理な要素を共存させます。しかし、機能性を無視してまで作品化することには反対です。

(「形態は機能に従う」と言ったルイス・サリバンの言葉を思い出しました。)

――最後に、最新のプロジェクトについて少し教えてください。

今は、兵庫県の老人福祉施設とか病院、住宅等を計画しています。

お忙しいところどうも有り難うございました。

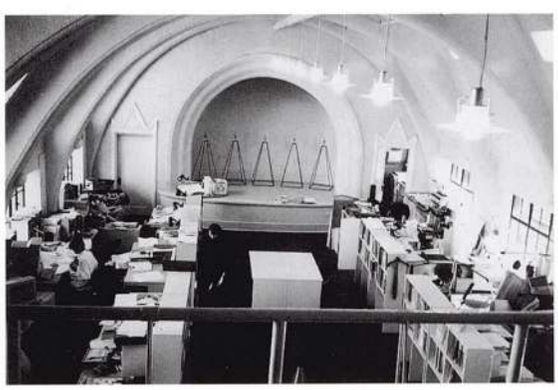
編集後記

取材を終えて、幼少の頃に読んでおられた電気関係の本などは、機能性とともに子供の頃の夢を、また、バイブルと言われていた「般若心経」やその他の哲学書から学ばれた「絶対=相対」は、若林氏の作品の中に隠されているのかもしれません。

また、若林氏のお話を伺っている間、大人と少年が入り交じった、まさに「相反するものの共存」を彼の中に見た気がしました。

(辻川ひとみ/会員企画小委員会)







被災建築物応急危険度判定制度の現状

岡田有資
京都府土木建築部・前建築指導課主任

地震被災建築物応急危険度判定の制度化

応急危険度判定の基本的な技術開発は、昭和56年から建設省総合技術開発プロジェクト「震後建築物の復旧技術の開発」において進められ、平成4年に静岡県及び神奈川県で判定士制度が発足したと聞いている。当時、近畿各府県では制度化の動きは見られなかった。そのような中で、阪神・淡路大震災において応急危険度判定が実施され、混乱の中にあっても判定活動に従事した人々の努力により、建築物の余震による二次災害が防止できたほか、パニック状態の被災地において被災者に安心感を与えたという効果があった。

この判定活動に対する評価を受けて、阪神・淡路大震災以降、応急危険度判定が国や都道府県で積極的に建築物の防災対策の一環として位置づけられたことは、周知のことである。

応急危険度判定制度の推進体制

応急危険度判定制度の推進については、二つの分野がある。

一つ目の応急危険度判定士の養成については、全都道府県において登録制度が設けられ、民間の建築士等の協力を得て、全国で9万人規模の応急危険度判定士が登録されている。

二つ目の応急危険度判定体制の整備については、各都道府県での取り組みに呼応し、平成8年度に全国被災建築物応急危険度判定協議会が設立されたほか、隣接府県における相互応援体制の整備を図るため地域ブロック協議会を各地域で設置している。

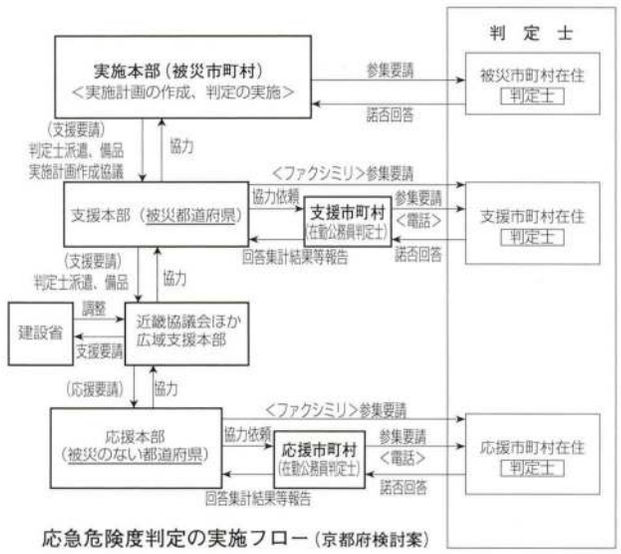
このような協議会の設置は、応急危険度判定制度の効率的な検討を図る上で必要であるほか、応急危険度判定そのものが大規模な地震が発生した場合、他府県から判定士の応援が必要であること、隣接府県の応援を得て実施体制を組織することが必要であること等が想定できるからである。

全国協議会では判定制度の標準化等を図るため、各種マニュアルの作成、判定方法や判定用紙の統一、民間判定士等への補償制度の創設や啓発ビデオの作成等を行っているほか、平成11年度には関東地域における地震被害を想定し、全国の都道府県を対象にした連絡訓練を初めて実施した。

地域ブロック協議会においては、各地域の実情に応じて取り組み状況は様々であるが、全国で初めて平成8年8月に設置した近畿被災建築物応急危険度判定協議会では、相互応援体制の確立に向けての検討、研修会及び連絡訓練の実施等を積極的に行っている。

また今般、各都道府県における協議会の設立が推進されている。これは、応急危険度判定の実施主体が原則として市町村であることから、都道府県と市町村との連携なしには、この制度が機能しないからである。各都道府県協議会の位置づけにはおのおの特色があるが、例えば京都府においては、市町村には応急危険度判定の実施主体としての役割のほか、他府県等に判定士の派遣を行う場合にあっても、判定士が住まう市町村を連絡拠点として位置づけた連絡体制を検討している（図参照）。

京都府協議会においては、京都府地域防災計画の想定地震に沿った対応を図るために、府内を5ブロックに分割して、各地域ごとに実施体制や支援体制の連携方法を検討することとしている。平常時から、より現実的な被害想定に基づいた検討を行うことにより、いざという時においても円滑に対応できると考えており、地域ごとの検討を行うことにより、すべての市町村に応急危険度に関する理解が深まっていくことを期待している。



応急危険度判定の実施フロー（京都府検討案）

応急危険度判定制度の課題

■継続的な検討の実施　学識経験者によると、近畿地方は阪神・淡路大震災により地震の活動期に入ったと言われており、これによれば、大規模な地震が発生する危険性は日に日に高まってきている。一方、民間の人々の防災に対する意識は低下してきている中にあって、判定士登録をした判定士の自発的かつ社会的な責任感による好意に応えるためにも、改めて阪神・淡路大震災の被災状況を行政課題ととらえて、本制度の充実に向けてさらに努力していく必要がある。

■判定シミュレーションや連絡訓練の実施　現在では、各府県の地域防災計画などにおいて想定地震が明記されていることから、想定地震による応急危険度判定のシミュレーションに、支援本部となる都道府県と実施本部となる市町村がおのおのの立場で取り組んでいく必要がある。

判定士に対して連絡訓練を行うことにより、日常から防災意識が啓発されるほか、行政の取り組みも理解される。

また、判定シミュレーションや連絡訓練の実施により、応急危険度判定の課題が明確になり、制度の改善につながる（例えば、大都市圏では、現地の受け入れ体制の整備が課題等）。

■応急危険度判定制度の認知　先に触れたように、応急危険度判定制度は建築構造の観点から新たに制度化されたものであり、防災行政の基本となる災害対策基本法での積極的な位置付けや財政的なバックアップ等制度的な認知が必要である。また、実施主体となる市町村長の理解と担当部局の認識を平常時から保っておく必要がある。

■応急危険度判定制度の検討方法　応急危険度判定制度の検討にあたっては、実施主体となる市町村に円滑な制度の導入を図るためにはどのように検討を進めていけば良いのかという点に特に配慮して、地域に応じた検討を加えるべきであろう。

（おかだ　ゆうじ）

現実となったF14T超高力ボルト

宇野暢芳
新日本製鐵㈱鋼構造研究開発センター

鉄骨構造部材の主要接合法の一つである高力ボルト摩擦接合は、図1に示すように、接合する鋼材同士を高力ボルトにより締め付け、鋼材間に摩擦によるすべり抵抗力を生じさせることで力の伝達を行う接合方法である。接合部のすべり耐力F_sは次式で計算する。

$$F_s = 2\,n\,\mu_s N_0 \qquad (n\text{はボルト本数}) \qquad (1)$$

ここで，N_0は高力ボルトの初期導入張力，μ_sは接合される鋼材同士の接触面のすべり係数である。現行設計の高力ボルト摩擦接合部は0.45のすべり係数と引張強度が100kg/mm²級のF10T高力ボルトの組み合わせで構成される．しかし、現行の接合部では母材の板厚増大や高強度化に対し多量のボルト本数が必要になるため、接合部のコンパクト化や施工の省力化・効率化の観点から、接合部の高すべり係数化や高力ボルトの高強度化が期待されている。

高すべり係数化に対する取り組みとしては以前、本誌のこの欄で高摩擦鋼板という特殊添板を用いる方法[1,2]を紹介した。この方法は，すでに建設大臣の一般認定を取得して実用に供されている。認定対象は高力ボルトの許容せん断耐力であるが、すべり係数に換算すれば約1.0のすべり係数になる。一方、高力ボルトの高強度化も着実に進展を見せ、昨年末に引張強度が140kg/mm²級のF14T高力ボルトが建設大臣の一般認定を取得している。このF14T高力ボルトは、超高力ボルトの意味からSHTB（=Super High-Tension Bolt）と呼ばれている。以下に，このSHTB[3]を紹介する。

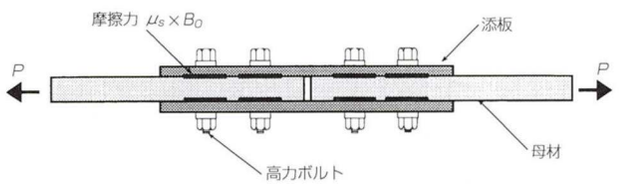


図1　高力ボルト摩擦接合部

高力ボルトの遅れ破壊とその克服

高力ボルトの高強度化を図る上で、最大の課題は遅れ破壊の克服である。遅れ破壊とは、外荷重が作用し始めた時点ではなく、また繰り返し荷重が作用するのでもなく、静的な荷重の下で一定時間経過した時点で突然破断する現象である。かつてJIS規格としてF13Tまで制定されていた高力ボルトが現在のF10Tまで後退したのは、F11T以上の高力ボルトにおいて遅れ破壊発生の危険性を払拭できなかったからである。この遅れ破壊は、鋼材中を自由に動きまわれる拡散性水素による水素脆化が主原因であるとする考え方が現在では定説になっている。このことを踏まえて、建設分野における高力ボルトの遅れ破壊発生のプロセスを模式的に示したのが図2である。

遅れ破壊の発生は，次の(1)～(4)の過程を経て起こると考えられている。

(1) ボルトが腐食し、ボルト中に拡散性水素が浸入する。
(2) 浸入した拡散性水素が、ねじ部等の応力集中部に集積する。
(3) この拡散性水素量が鋼材の許容量を超えると、亀裂が発生する。
(4) 亀裂の成長がある段階に達すると、遅れ破壊が発生する。

したがって、使用期間中の高力ボルトの遅れ破壊発生を防止するためには、上記プロセスのいずれかを遮断するか、あるいは各プロセスの進行をできるだけ抑え、破壊までの期間を使用期間よりも十分長くすれば良い。SHTBは鋼材の許容できる拡散性水素量を高めることと、応力集中を緩和する目的でボルト各部の形状を改良することの2つの対策で、耐遅れ破壊性能の向上を図っている。それでは、具体的にSHTBの耐遅れ破壊性能を見ていこう。

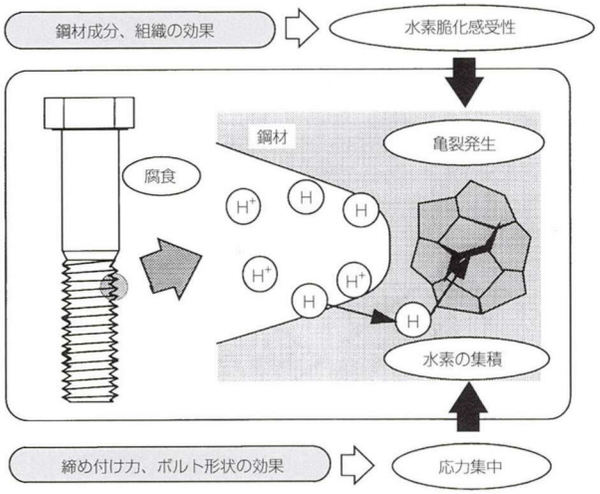


図2　遅れ破壊発生プロセス

耐遅れ破壊性能評価法

高力ボルトの耐遅れ破壊性能の評価法には様々なものが提案されているが、現在、最も有力な方法は、鋼中の拡散性水素量を用いた遅れ破壊の感受性評価法[4]である。その基本的な考え方を図3に示している。この評価法は、ボルトが許容できる拡散性水素の鋼中濃度（以下、限界拡散性水素量Hc）と、使用期間中にボルトに蓄積される拡散性水素の鋼中濃度He（以下、侵入拡散性水素量He）を比較して、Hc＞Heであれば遅れ破壊が発生しないと判定する方法である。

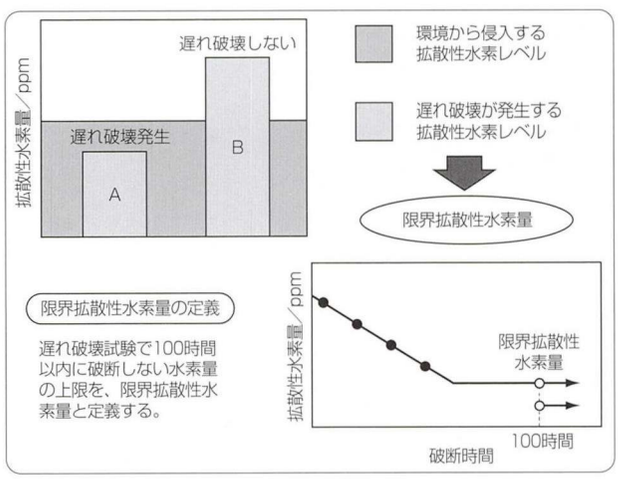


図3　耐遅れ破壊性能評価法：限界拡散性水素量法

SHTBの耐遅れ破壊性能

上記の評価法に基づけば、高力ボルトに使用する鋼材の限界拡散性水素量Hcの増大が最も直接的な遅れ破壊対策となるため、SHTBには標準的なF10T用鋼材よりもずっと大きな限界拡散性水素量を有する鋼材が開発されて使用されている。一方、侵入拡散性水素量

Heは鋼材の化学成分や強度によって同一環境にあっても異なるため、その定量化を行うためには、ボルトを実際の使用環境下で暴露して測定する必要がある。そこで、SHTBへの侵入拡散性水素量の測定調査とともに、直接ボルト製品そのものの耐遅れ破壊性能を調査するために、SHTBの促進暴露試験と屋外暴露試験を行っている。

促進暴露試験は3.5%食塩水中へのSHTBの繰り返し浸積試験で、**写真1**に示すように、SHTBは回転する車輪上につり下げられており、1時間に1回食塩水中に浸かるようになっている。試験は鋼材ロット、熱処理ロットおよび時期を変えて実施している。現在、暴露を開始して5年以上経過するが、いまだ1本の破断もない。次に、屋外暴露試験は沖縄から北海道にかけ全国4カ所で実施中である。沖縄での試験状況を**写真2**に示す。沖縄ではすでに暴露試験を開始して4年半を経過しているが、まだ1本も破断していない。

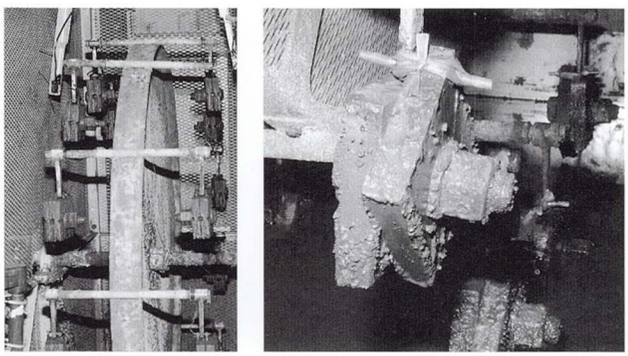


写真1　促進暴露試験状況

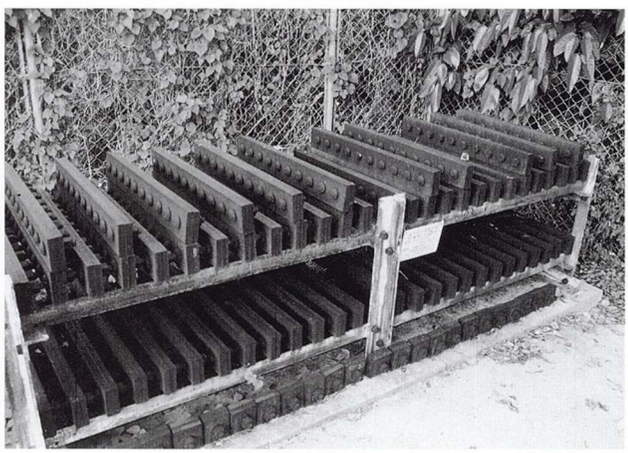


写真2　屋外暴露試験状況

上記の暴露試験では定期的に資料を回収して、SHTB中の侵入拡散性水素量Heの変化を調査している。促進暴露試験の場合では、Heは暴露開始後半年程度で飽和状態になり、最大でもSHTBの限界拡散性水素量Hcの1/2程度である。沖縄の屋外暴露試験の場合では、Heは暴露開始後約2年で飽和状態に達し、最大でもSHTBのHcの1/4程度である。このように、SHTBが暴露試験で1本も遅れ破壊を起こさないのは、遅れ破壊評価法からも当然の結果となっている。

以上から，通常の建築物における高力ボルトの使用では、ボルトの腐食環境が促進暴露試験や屋外暴露試験と比較して非常にマイルドであるため、SHTBの遅れ破壊発生確率は極めて低く、実用上遅れ破壊の問題は生じないと判断されている。

SHTBの形状

SHTBはトルシア形高力ボルトであり、基本的な形状寸法はJSS II 09-1981およびJIS B 1186-1979によっている。ただし、遅れ破壊対策の万全を期し、ボルト各部に生じる応力集中、歪み集中の緩和を図るために、ねじ部形状の改良、ボルト頭部首下アールの増大、ボルト軸からねじ部への移行部の形状改良およびナットの形状変更といったボルト形状の改善が実施されている。一例として、最も大きな改善点であるSHTBのねじ部形状を、JISのねじ形状と対比して**図4**に示す。SHTBねじ部の応力集中は、JIS規格の高力ボルトの約60%に、また塑性歪み量は約10%へと大幅に低減されている。

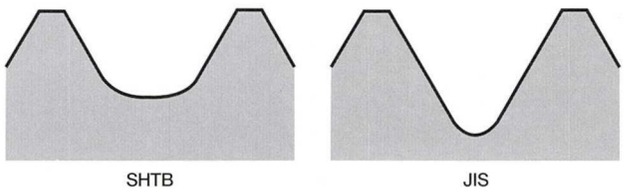


図4　ねじ形状

SHTBの設計ボルト張力、最大引張耐力

SHTBはM16、M20、M22、M24の4種類の径について一般認定を取得している。径ごとの設計ボルト張力と最大引張耐力を**表1**に示す。ともにF10Tの規格値の1.5倍弱の強さになる。規格強さの比1.4倍よりも大きくなる理由は、ねじ部形状の改良の結果、SHTBのねじ部の有効断面積がJISのねじ形状に比べ数%増大しているためである。

表1　SHTBの設計耐力

(ton)

ボルトの呼び径	設計ボルト張力	最大引張耐力
M16	15.5（10.6）	23.0（15.7）
M20	24.2（16.5）	35.8（24.5）
M22	29.9（20.5）	44.2（30.3）
M24	34.9（23.8）	51.7（35.3）

注）カッコ内はF10T高力ボルト

おわりに

遅れ破壊を克服したF14T超高力ボルトであるSHTBを紹介した。耐力はF10Tの約1.5倍である。さらに高摩擦鋼板と組み合わせれば、現状の高力ボルト摩擦接合の3倍の耐力になる。このような高耐力高力ボルト接合が、今後鉄骨構造の種々の部材接合に活用されていくことを期待したい。

[参考文献]

1）宇野暢芳，井上一朗，志村保美，脇山広三：硬さが異なる鋼材間の摩擦係数に関する基礎的研究，日本建築学会構造系論文集，No.494，1997.4
2）宇野暢芳，井上一朗，竹内一郎，東清三郎，北卓也：高摩擦係数高力ボルト接合部の耐力に関する実験的研究，日本建築学会構造系論文集，No.502，1997.12
3）日本建築学会：鋼構造接合部の力学性能と設計法，p173-179，1996.10
4）山崎真吾，高橋稔彦：高強度鋼の遅れ破壊特性の定量的評価方法，鉄と鋼，Vol.83（1997），No.7

（うの　のぶよし）

水栓器具からの鉛溶出低減技術

後藤　晶
東陶機器㈱本社水栓・機器生産技術グループ

青銅材料のＣＡＣ406（ＢＣ６）や黄銅材料のC3604などは、耐食性、加工性が優れることより、水栓器具の主要材料として長年使用されてきているが、これらの銅合金材料には数パーセントの鉛が含まれている。この鉛は微量ではあるが、水道水中に溶出するため、飲用することで人体の健康への影響が懸念されている。

厚生省は、ＷＨＯ（世界保健機構）の飲料水水質ガイドラインの改正を背景に、平成４年の厚生省令で水道水の水質基準を大幅に改正し、鉛の基準値を0.1mg/ℓから0.05mg/ℓに強化した。さらに同年12月の厚生省水道環境部長通知により、10年後（平成14年）までには、0.01mg/ℓ以下まで強化することを目標として掲げた。

この動きに伴い水栓等の給水装置は、平成９年の厚生省令で耐圧、防食、逆流防止性能などとともに、溶出量を浸出性能としてＪＩＳ（日本工業規格）に定め、その試験方法も明確化された。その中で銅合金を主要部品の材料としている器具については、鉛の溶出量が0.047mg/ℓ以下であることが規定され、現在に至っている。

鉛溶出低減水栓の開発の経緯

ＴＯＴＯでは、平成14年予定の鉛規制強化に対応するために数年前より「鉛溶出低減技術」の開発に取り組んできた。**表１**に、鉛規制強化に対応できる水栓として考えられる方法を示す。

① 構造変更により、鉛を含まない材料（パイプ・樹脂）で、通水路を構成する方法

② 材質変更により、鉛を含まない鉛レス銅合金を新規に採用し、鉛の溶出を抑える方法

③ 表面改質により、通水路表面をコーティング（めっき）する、または表面に存在する鉛のみを除去する方法

上記の方法には、次のようにそれぞれ一長一短があり、③の表面改質法が最も優れると判断し、この方法で技術開発を進めた。

① 構造変更は鉛を含まないパイプ・樹脂等の材料での構成となり、すでに一部の商品にこの方法を採用しているが、水栓のデザイン上の自由度が制約され、お客様が望む商品を提供できなくなる。

② 鉛レス銅合金は、不純物として鉛を0.1%程度含有しているため、鉛溶出量はゼロにはならない。しかも、切削性等の加工性が鉛含有銅合金のレベルまで達していないことによる生産設備投資、生産性低下によるるコストアップが懸念される。

③ 表面改質では製品設計変更はほとんどなく、商品開発費用などのコストアップは抑えられる。ただし、水栓からの完全な鉛の除去は不可能である。

表１　水栓類の鉛溶出対応策

対応策	概　要	課　題	評価				
			技術難易度	効果の持続性	コスト 開発費	コスト 加工費	総合
構造変更	鉛を含まない材料で（パイプ・樹脂）通水路を構成する	デザインが制約され、高品位の外観確保が困難となる	△	◎	×	◎	△
材料変更	鉛を含まない材料を新規に採用する	ビスマス等はレアメタルのため材料確保が困難	△	◎	◎	×	△
表面改質	① 通水路表面をライニングする	内面のみのライニング加工が難しい	×	△	◎	×	△
	② 通水路表面をめっきする	内面のみのめっき加工が難しい	△	△	◎	△	△
	③ 通水路表面の鉛を除去する	－	◎	○	◎	◎	◎

◎←○←△←×　の４段階評価（◎ほど、技術的に優れ、コスト安）

表面改質技術（ＮＰｂ処理）の概要

鉛の化学的特性として、両性金属という性質があげられる。これは、アルカリにも酸にも容易に反応し、溶解することを意味する。

ＴＯＴＯでは、この両性金属という性質に着目し、**図１**に示す特殊アルカリ液中に一定時間浸漬させ、通水路表面上に存在する鉛、および鉛酸化物等を溶解・除去し（アルカリエッチング工程）、アルカリ処理で一部除去できなかった残存鉛を、次工程の安定化処理により完全に除去する工程を見いだした。

この処理工程をＮＰｂ処理（Non-Pb処理の略：Pbは鉛の元素記号）と名付け、既存のめっき工程内に追加導入した。

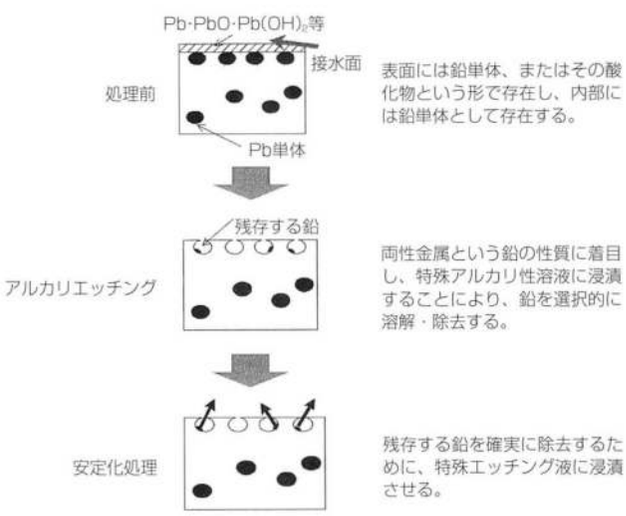


図１　ＮＰｂ処理技術概要

従来の水栓とＮＰｂ処理水栓の比較

■ＮＰｂ処理水栓の通水路表面状態

図２に、黄銅鋳物材の、ＮＰｂ処理前後の表面のＥＰＭＡ（電子線マイクロアナライザー）解析像を示す。

処理前の通水路には鉛が表面に合金化せず存在しているが、ＮＰｂ処理することにより、その鉛がほとんど除去されている。

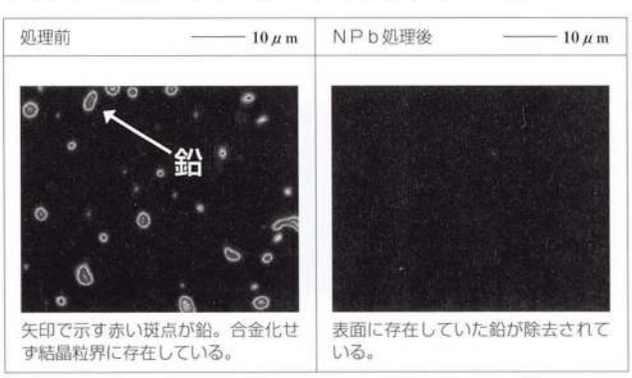


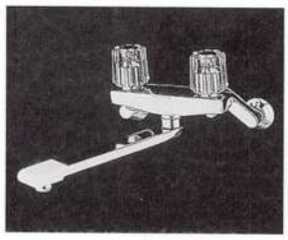
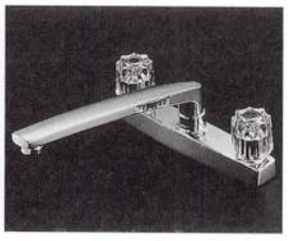
図２　水栓通水路内部のＥＰＭＡ解析像

■各種ＮＰｂ処理水栓の溶出量

表２に、実際に当社の飲料用水栓をＮＰｂ処理した結果を示す。ＮＰｂ処理品は従来の水栓と比較して、各製品とも鉛溶出量は約1/2～1/5に低減している。この４品番以外の各種製品でも溶出試験を実施したが、すべての製品について同様に溶出量は低減しており、平成14年制定予定の、鉛の水質基準：0.01mg/ℓ以下は確実にクリアできることが確認されている。

また、鉛以外の亜鉛、銅等についての溶出量は従来の水栓と同レベルであり、ＮＰｂ処理は、銅合金中の鉛のみに効果のある工程であることも確認されている。

表２　各種製品試験結果

洗面所用シングルレバー混合栓			台所用シングルレバー混合栓	
				
0.025mg/ℓ	従来水栓	鉛溶出量	従来水栓	0.019mg/ℓ
0.004mg/ℓ	NPb水栓		NPb水栓	0.008mg/ℓ
台所用（壁付き）２バルブ混合栓			台所用（台付き）２バルブ混合栓	
				
0.014mg/ℓ	従来水栓	鉛溶出量	従来水栓	0.022mg/ℓ
0.004mg/ℓ	NPb水栓		NPb水栓	0.005mg/ℓ

■従来の水栓とＮＰｂ処理水栓の経時変化

図３に、使用期間と鉛溶出量の関係を加速試験により評価した結果を示す。

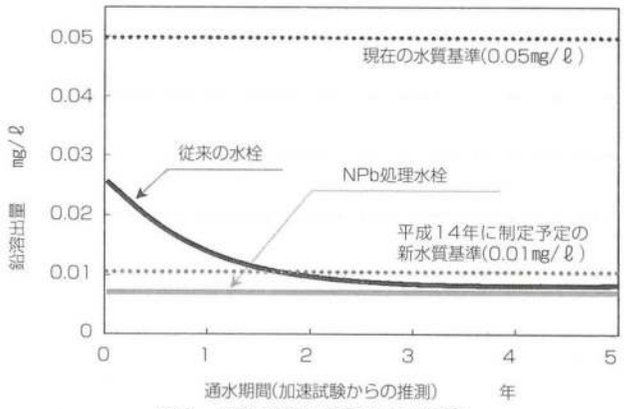


図３　使用期間と鉛溶出量の関係

ＮＰｂ処理品は、水栓設置直後でも、平成14年に制定予定の水質基準：0.01mg/ℓ以下であり、さらに使用を続けても鉛溶出量はほとんど変化しない。一方、従来の水栓は、水栓設置当初は通水路表面に存在する酸化物等の被膜の影響により鉛溶出量は現在の基準値である0.047mg/ℓ以下を満足しているものの、ＮＰｂ処理水栓と比較すると、溶出量は大きくなっている。

しかし、その後使用を続けると、鉛溶出量は低減しながらも飽和し、実用試験に換算して、約３年で0.01mg/ℓ以下になる。これは、従来の水栓では、通水路表面に存在する酸化物等の皮膜が、水道水によって徐々に溶解（腐食）し、銅合金母材に存在する鉛単体の溶出へと変化しているためと考えられる。

まとめ

ＴＯＴＯでは、本報でご紹介したＮＰｂ処理が必要な対象製品を順次拡大し、2000年の春までには、飲料用水栓すべてをＮＰｂ処理水栓とする予定で推進している。

このＮＰｂ処理は、構造変更および鉛レス材を採用する方法に対し、製造コストのアップを最小限に抑えられる点が特長である。また、既存の材料がそのまま使えることより、リサイクルの観点からも有効な手法である。今後とも、“より安全な水をお客様に提供する”ことを目的として、更なる技術開発を行うとともに、要望があれば、この技術を同業他社へ提供することを考えている。

（ごとう　あきら）

文章は細心にして大胆な暴走がいる

山田　修
修　建築事務所

1）「大阪文化の50年史」を点検する

写1は，大阪文化服装学院（A4版104頁）編集後記の拙文である．2頁にわたるので少し長すぎたかなァと思ったが，紙の残り枚数に合わせて作った．

〔起〕→〔承〕→〔転〕→〔結〕は，ふまえたつもりである．

文末の奥付けの前が少しあいたので，駄句を二ついれ，キョウチクトウを描いた．これで季節感が出ている．この花一輪により編集後記のおも苦しさが救われていよう．冒頭がキョウチクトウの文字で始まったから，末尾はその絵で終えた，という意図もある．

いまから考えると「50年史を一人で一ヶ月でよく制作した」と思う．活力が新鮮さを呼び，新鮮さを保つために簡潔に記した，といえようか．

それよりも，こういう仕事が苦にならず，苦は喜びの前段階と心え「命をかけて，そのくせ楽しみながら仕事をしたからだ」と考える．苦しい仕事でも，仕事にほれないと楽しいアイデアは出てこない．楽しいアイデアは，筆者としてどうしても見つけださねばならないものだ．

2）モノ作りには暴走がいる

「一生に一度しかない」このような機会を与えてくださった理事長の森　三郎氏には感謝している．彼はそれだけ，わたしを信頼し，周囲の反対を押しきって暴走していただいたからだ．それに答えて，わたしも暴走した．暴走は，ときにはすごい結果をもたらす．

それは，スピードとエネルギーを合わせもつからだ．

モノ作りに，暴走は必要である．それも細心にして大胆な暴走がよい．暴走をおそれている者に，面白く，かつよい仕事はできない．

なお，表紙デザインもわたしが担当した．カバーデザインの説明として表紙裏面に小さく「濃紫（厳粛・優艶を意味する）の厚い基礎上に，どっしりとした白亜の学び舎が屹立する．緑院にふさわしい学舎の窓枠の中に校章を配し，緑色の濃淡で学院の成長を示した．二つの窓枠は，シンボルの2本の大クスノキにも通じる」と記している．

ほんとうは，読者に表紙を見ていただきたかったが，誌面の都合で割愛せざるを得なかった．お許しをこう次第．

（やまだ　おさむ）

編集後記

キョウチクトウのくれないが，真夏日の太陽の下で燃えたっている．そんな日（'96.7.29）わたしは，堺筋本町交差点にある某会社の社長室へ突然に呼ばれた．そして理事長の森三郎さんより「50年の記念誌的な小冊子を作るので協力してほしい」と頼まれた．あぜんとした．

「無から有を明日まで作れ」という，とてつもない仕事を受けた，と同じ状態である．

その事情を詳記してみよう．

当日，学院長白井俊男さんが同席し「理事長の回想形式の小冊子を作るので，口述速記してほしい」という．とりあえず，理事長の回想話を口述筆記する．同じことがくり返されて，ひとつも面白くない．たとえ演出して，わたしがまとめたとしても「こんな小冊子なら誰も読むまい．作ったわたしでも読まない」と判断した．

学院長は退席した．午後の理事長との対談上「50年史を作りましょう」と話を転換する．目の前には，わたしが主になって作った新しい形式の「兵庫県立工高校90年史（4年前に刊行）」があった．

両者のやりとりがあって，これと同じ形式のもの（頁数は半分になる）を作ることに決定する．やはり，目の前に作品を持参したことが決め手となった．百聞は一見にしかず，だった．

そのあと，わたしは理事長に念を押した．「記念史は，10月4日のヒルトンホテルの記念式典の引出物にしたい．そのためには期間がない．人がない．予算がない．したがって印刷所は，わたしの教え子が社長をしている昭英印刷（兵庫県立工高校90年史を作製していた）しか頼めない．それらを含めて記念誌制作の全責任をわたしに与えてほしい．それなら今からでも引き受けましょう」と．今から思うと，こんな冒険的な発言をよくしたものだ．猪突猛進もいいところである．

理事長は，ちゅうちょしながらも「よろしい．君にすべてをまかせる」と決断をくだす．まさに，緊急事態が発生した．

しかし，資料・写真など何も見えない知らない段階での申し出は，暴走だった．はたして，わたし一人で学院の50年史ができるだろうか……と，不安になる．一般的には記念史なるものは，数名の選ばれた委員が協議を重ねながら長期間かけて出版するものである．それを一人で一月でするとは，けた違いの暴走だった．

これにつられて，理事長も暴走し出した．結果的に，この暴走が記念誌を作ることになるのだが……．

不安ながらも，キョウチクトウのくれないが，わたしの心の中で燃えたった．

出版・編集が得意のわたしは，無から有を生じる仕事，すなわち創造的な仕事をするのが大好きである．これは，わたしの歩んできた出版・建築の道にも通じる．「創造とは既成事実への挑戦である」この言葉が一瞬あたまの中をよぎった．

8月1日，大阪文化に初出勤する．まず，印刷屋と漫画家を呼び出す．いずれの人も，目をパチクリして緊急事態が起きたことを知らされ，かつ動き出した．

理事長室に積まれた古いアルバムをひっくり返し，年代別に写真の選抜から仕事が始まった．気の遠くなるような仕事である．写真はあるが，文章類の資料がない．行き先の見えない船出だった．理事長も見え「あとは，よろしく頼むよ」という．簡単に頼まれても，仕事の内容はとてつもなく大きく，かつ重い．いうは易く行うは難し，だ．わたしは「この仕事に一命をかけてみよう」と覚悟を決める．

それから，真夏の連日を理事長室で，記念誌作りに一人で悪戦苦闘する．そんななかで苦悩することが起こった．「お前はプロだろう．プロなら泣きごとをいうな．仕事は結果で勝負しろ」と，くじけそうになる自分を叱咤激励する．白井学院長・玉井事務長はじめ事務室の人たちも気持ちよく応援してくれた．これに力を得て，善戦奮闘する日びに発展していく．

ようやく調子の上がりかけた8月中旬，お盆休みのため9日間の学校閉鎖（機械警備）となった．これは痛かった．その間，自宅で博覧強記の宮本愛子先生より聞き書きした写真物語を参考にして，写真説明文を作る．

古い先生の原稿依頼は，むずかしかった．数人を選び，それぞれの先生から当時の学院内の状況を電話で聞き出す．A先生からB先生，さらにC先生がよいと，電話を回り持ちさされ，やっとC先生に落ちつく．「原稿のしめ切り期間は一週間後です」と告げた途端にC先生から断られた．女の人の選別は，年をとっても容易ではない．電話の応答だけで一日がつぶれ，頭の心が痛くなった．

善戦奮闘しているときに，強烈なジンマシンにおそわれた．かゆくて眠れない日が続く．医者に診断してもらうと「ストレスによるジンマシン」とのこと．注射を打ちヌリ薬と飲み薬をもらう．生まれて初めて，こんな病気になった．すごいプレッシャーを受けていた模様．

そういうと，朝の出勤時に十三～三国間の一駅間で瞬間に眠ってしまい，三国駅で下車するのを忘れ次の庄内駅まで行きすぎたことが2回あった．ショウナイなァー．ボケが回ってきたのかなァとも反省し，休養の大切さを知らされる．夜は夕刊も見ずに眠ることに徹した．夜のスナックもオフリミットである．自分の本業は，一切しなかった．というより，できなかった．

以上が，仕事の途中段階の一抹である．こんな経過をへて，曲芸的ともいえる作業を行い，9月6日に最終の原稿を印刷会社の田村さんに渡す．体力の限界に挑戦したわたしは，ヘトヘトに疲れていた．「田村君，あとは突貫作業をお願いするよ．まことに申し訳ない．わたしの命を助けると思ってやってくれ」と．まさに以心伝心……．

教え子の田村君は，よう頑張ってくれた．ありがとう．田村静士君．

ここで，50年史に取り組んだ基本姿勢を示しておこう．

学校の年史は，ともすれば学校と余り関係のない人の空ぞらしい挨拶文が続く．美辞麗句を重ねた挨拶文は人を感動させない．さらに長ったらしい座談会や創設者の自慢話が披露される．過度の宣伝的なちょうちん記事の座談会は面白くない．自慢話は退屈する．

こんな視点から，わたしは第三者的（読者）な立場で宣伝臭のない，しかも写真を主にしたビジュアルな年史を企画した．50年の歴史を刻んだ大阪文化の姿を，写真を通してありのまま表現したつもりである．虚飾は捨てた．

とくに昭和20年代に中心を置いたのは，老令の理事長の要請と，その年代の資料が皆無だったためだ．したがって，近代の歴史がやや粗になったきらいがある．この点は学院長からお叱りをいただいた．何分の超特急の仕上げのためと，お許しを願いたい．

当本は，画期的といわれた兵庫県立工高校90年史を台本にしている．また，古い時代からずっと当学院に外からかかわってきた強みもあった．考えれば，大阪文化はわたしの心のふるさとであり，若き日の楽しい学園でもあった．

それにしても，老兵のわたしを励まし助けてくれた学院職員の利見恵津子・大橋雅子先生，旧職員の宮本愛子・上杉智津子先生，学院広報室のみなさん，昭英印刷のみなさん，漫画家の木村芳子さん（教え子），ほんとうにありがとうございました．

みなさんの協力なしでは，こんな短期間に，こんないい物ができるはずがありません．これらの関連の皆様に，心より御礼を申しあげます．深謝を捧げます．もう一度いわせて下さい．ありがとうございました．と．

（1996年9月6日　山田　修記）．



キョウチクトウ　心（しん）の中でも　燃えたぎり
年史おえ　　見上ぐクスノキ　　秋のかぜ

発　行　1996年10月3日
発行所　学校法人ミクニ学園
大阪文化服装学院
〒532 大阪市淀川区三国本町3丁目35-8
電話　06-392-4371㈹
印刷所　昭英印刷株式会社
〒564 吹田市芳野町5-12
電話　06-338-2113㈹

写1

電気系防災設備の概論

西尾　勇
松下電工㈱電材分社

先月までの消火設備に引き続いて、今月からは、電気系の防災設備の中から代表的なものをご紹介しますが、その前に、電気系防災設備の防災システム全体における位置づけを明確にしたいと思います。

防災設備の種類

一般に、防災設備とは消防法施行令第７条に規定されている『消防用設備等』を指し、図１の分類に分けられます。

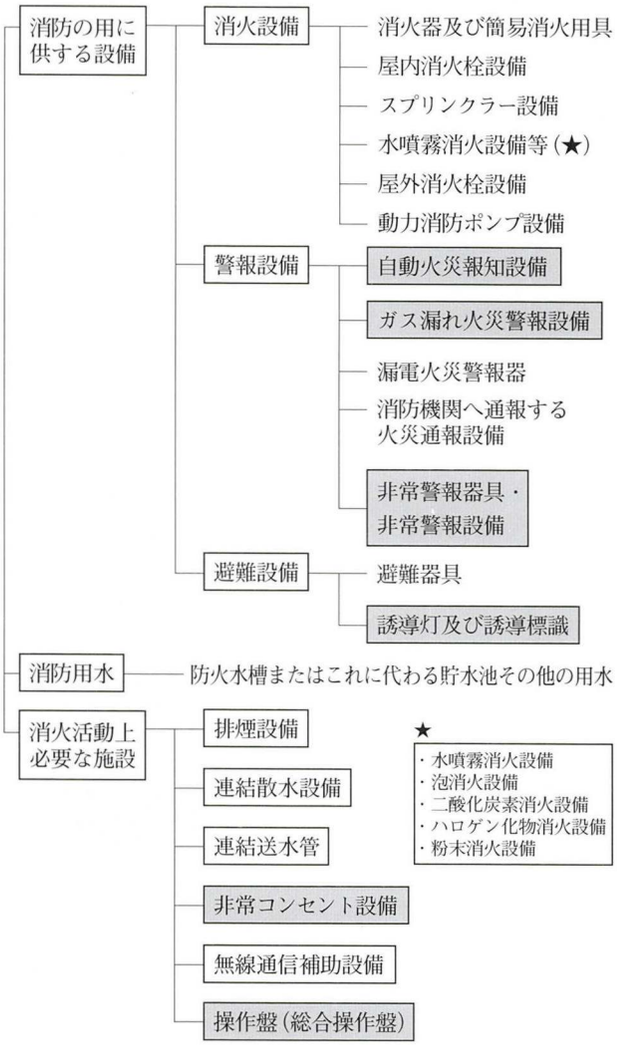


図１　消防用設備等

すなわち、消防法は建物の火災予防である防火管理に始まり、いったん火災が発生した場合、感知通報、避難誘導、消火活動そして救助活動を実行するための基準を定め、それらの設備の設置を義務づけているといえます。

防災システムの概念

火災の発生から感知、警報、通報、避難誘導、そして消火活動への一連の流れの代表的なものを図２に示します。

これらシステムの機能を分担する防災設備を設置するためには、前もって十分な調査を行い、その防火対象物に最も適した設計を行わなければなりません。特に大切なことは、消防関係法令ならびに

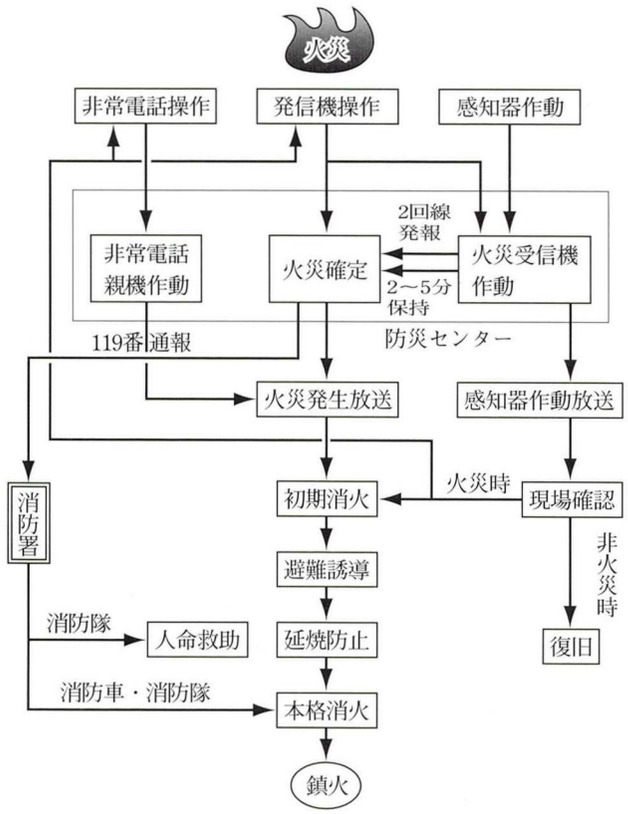


図２　防災システム図

各種通達及び指導事項などの関係条項を十分に理解し、かつ設置すべき対象物の用途・構造に適合するよう設計することです。

電気系防災設備の設計において関係する法令は、第21条、第23条、第24条などの施行令及び施行規則第23条、第24条、第25条などと関係通達がありますが、消防署によっては若干異なった指導を行っている場合があり、注意が肝要です。また、特殊な物件に対してもあらかじめ消防機関と十分打ち合わせのうえ設計を行うことは当然のことといえます。

＊

次回からは、図１に示す　　部分の設備について説明してまいります。

次頁に、防火対象物の種類と、消防法による設置義務を一覧表にまとめました。ただ、代替設備の設置により設置免除される設備がありますので、詳細については市販されている各種解説書をご覧ください。

［参考文献］
建築消防 advice '99　建築消防実務研究会

（にしお　いさむ）

1. 単位のない数字は㎡を単位とし、以上を表す。
2. 〔 〕は耐火構造で内装制限した建築物の場合。（ ）は耐火構造の建築物または内装制限をした簡易耐火構造の建築物の場合
3. 令○○条は、消防法施行令第○○条を表す。
4. 漏電火災警報器の場合は鉄網入りの壁、床、または天井を有する建築物のみである。
5. 特定防火対象物とは(1)項から(4)項まで、(5)項イ、(6)項また(9)項イの用途に供するもの。
6. ㊨は特定防火対象物の用途に供される部分が存する階の床面積を表す。
7. 特定施設とは、(6)項ロのうち身体又は精神上の理由で自力避難困難者が入所する施設
※1　延面積が500㎡以上でかつ特定防火対象物の用途に供される部分の床面積合計が300㎡以上のもの。
※2　(1)項～(15)項までそれぞれの用途部分の設置基準に従って設置する。
※3　(2)項又は(3)項に掲げる防火対象物の用途に供される部分の床面積の合計が100㎡以上のもの。
※4　1契約電流が50Aをこえるもの。
※5　火災通報装置の設置義務がある。
※6　地階の床面積の合計が1000㎡以上で、特定用途に供される部分の床面積の合計が500㎡以上。
※7　(2)項又は(4)項の用途に供される部分の床面積の合計が1000㎡以上のもの。
※8　延べ面積が1000㎡以上で、特定用途に供される部分の床面積の合計が500㎡以上。
※9　主要構造部を耐火構造とした建築物の2階を除く。
※10　下階に(1)項から(4)項まで、(9)項、(12)項イ、(13)項イ、(14)項又は(15)項に掲げる防火対象物が存する場合は10人。
※11　3階以上の無窓階又は地階の場合。
※12　消防長又は消防署長が必要と認めた場合設置。

防火対象物の種類と消防法による設置義務 (1)

| 消防用設備の種類 / 防火対象物の別 | | | 警報設備 | | | | | | | | | | | 消火設備 | | | | | | | | | | |

防火対象物の種類と消防法による設置義務 (2)

防火対象物の別			消火設備			避難設備																						消火活動上必要な設備				操作盤							
消防用設備の種類			令17条	令18条	令19条	令25条			令26条 誘導灯・誘導標識																			令28条	令28条の2	令29条	令29条の2	令29条の3	平成9年3月21日消防庁告示第1号							
			ハロゲン化物消火設備	粉末消火設備	屋外消火栓	避難器具			避難口誘導灯			通路誘導灯(室内に設けるもの)			通路誘導灯(廊下に設けるもの)			誘導標識	客席誘導灯										排煙設備	連結散水設備	連結送水管	非常コンセント設備	無線通信・補助設備	地下街	地階の床面積の合計が5,000㎡以上	地上5階以上で延面積が20,000㎡以上	地上11階以上で延面積が10,000㎡以上	地上15階以上で延面積が30,000㎡以上	延面積が50,000㎡以上		
						一般	2階以上の階又は地階	3階以上の階又は地階	一般	当該階の床面積 1,000㎡以上	当該階の床面積 1,000㎡未満	一般	当該階の床面積 1,000㎡以上	当該階の床面積 1,000㎡未満	一般	当該階の床面積 1,000㎡以上	当該階の床面積 1,000㎡未満	一般	一般																					
(1)	イ	劇場、映画館、演芸場、観覧場	1)自動車の修理又は整備の用に供される部分で床面積が 地階 200㎡ / 1階 500㎡ / 2階以上200㎡ 以上のもの 2)駐車の用に供する部分の存する階でその部分の床面積が 地階 200㎡ / 1階 500㎡ / 2階以上200㎡ / 屋上 300㎡ 以上のもの 3)昇降機等の機械装置により車両を駐車させる構造のもので 車両収容台数 10台以上 4)発電機・変圧器その他これらに類する電気設備が設置されている部分の床面積200㎡以上 5)鍛造場・ボイラー室・乾燥室等多量の火気を使用する部分の 床面積200㎡以上 6)通信機器室の 床面積500㎡以上 7)指定可燃物を危政令別表第4で定める数量の1000倍以上貯蔵し取扱うもの(この場合スプリンクラー設備を設置した場合、その有効範囲内の部分は代替できる) 注) 上記2)の場合、駐車するすべての車両が同時に屋外に出ることができる構造の階は除く	1)飛行機又は回転翼航空機の格納庫 2)屋上部分で回転翼航空機又は垂直離着陸航空機の発着の用に供されるもの 3)自動車の修理又は整備の用に供される部分で床面積が 地階 200㎡ / 1階 500㎡ / 2階以上200㎡ 以上のもの 4)駐車の用に供する部分の存する階でその部分の床面積が 地階 200㎡ / 1階 500㎡ / 2階以上200㎡ / 屋上 300㎡ 以上のもの 5)昇降機等の機械装置により車両を駐車させる構造のもので 車両収容台数 10台以上 6)発電機・変圧器その他これらに類する電気設備が設置されている部分の 床面積200㎡以上 7)鍛造場・ボイラー室・乾燥室等多量の火気を使用する部分の 床面積200㎡以上 8)通信機器室の 床面積500㎡以上 9)道路と建築物とが一体をなすと認められる構造の道路部分につき、その面積が 屋上 600㎡ / その他400㎡ 以上のもの 10)指定可燃物を危政令別表第4で定める数量の1000倍以上貯蔵し取扱うもの(この場合スプリンクラー設備を設置した場合、その有効範囲内の部分は代替できる) 注) 上記4)の場合、駐車するすべての車両が同時に屋外に出ることができる構造の階は除く	1階又は1階及び2階までの床面積の合計が三、〇〇〇(六、〇〇〇)㎡以上のもの(他の消火設備代替による設置免除)	3階以上の階(2)項、(3)項、(16)項イで2階に(2)項(3)項の用途に供される部分が存する場合は2階)で避難階段又は直通階段が二以上設けられていない階で収容人員10人以上のもの	収容人員50人以上 ※9	全部	※13	全部	※15	全部	全部	※16	全部	全部	※16	全部	全部	舞台部床面積200	舞台部床面積合計700	1.地階を除く階数が十一以上のもの 2.地下街で延面積が一、〇〇〇㎡以上のもの 3.地下街で延面積が一、〇〇〇㎡以上のもの 4.道路の用に供される部分を有するもの	1.地階を除く階数が五以上で延面積六、〇〇〇㎡以上のもの 2.地階を除く階数が七以上のもの	1.地階を除く階数が十一以上のもの 2.地下街で延面積が一、〇〇〇㎡以上のもの	全部	全部								イ	(1)
	ロ	公会堂、集会場																																				ロ	
(2)	イ	キャバレー、カフェ、ナイトクラブの類																																				イ	(2)
	ロ	遊技場、ダンスホール																																				ロ	
(3)	イ	待合、料理店の類																																				イ	(3)
	ロ	飲食店																																				ロ	
(4)		百貨店、マーケット、物品販売店舗、展示場																																					(4)
(5)	イ	旅館、ホテル、宿泊所																																				イ	(5)
	ロ	寄宿者、下宿、共同住宅																																				ロ	
(6)	イ	病院、診療所、助産所					20人以上 ※10		地階、無窓階 地上11階以上		※14	地階、無窓階 地上11階以上		※16	地階、無窓階 地上11階以上		※16																				イ	(6)
	ロ	養老施設、救護施設、授護施設等																																				ロ	
	ハ	幼稚園、盲学校、ろう学校、養護学校																																				ハ	
(7)		小、中、高等学校、大学、各種学校					50人以上 ※9		全部			全部			全部																									(7)
(8)		図書館、博物館、美術館																																					(8)
(9)	イ	熱気浴場、蒸気浴場等							地階、無窓階 地上11階以上			地階、無窓階 地上11階以上			地階、無窓階 地上11階以上																								イ	(9)
	ロ	その他の公衆浴場																																				ロ	
(10)		車両の停車場、船、航空機の発着場							全部		※13	全部		※15	全部																									(10)
(11)		神社、寺院、教会の類																																					(11)
(12)	イ	工場、作業所						150人以上 ※11 100人以上	地階、無窓階 地上11階以上		※14	地階、無窓階 地上11階以上		※16	地階、無窓階 地上11階以上																								イ	(12)
	ロ	映画スタジオ、テレビスタジオ																																				ロ	
(13)	イ	自動車の車庫、駐車場																																				イ	(13)
	ロ	航空機の格納庫																																				ロ	
(14)		倉庫																																					(14)
(15)		前各項に該当しない事業場																																					(15)
(16)	イ	特定防火対象物が存する複合用途防火対象物							全部		※13	全部		※15	全部																								イ	(16)
	ロ	上記以外の複合用途防火対象物							地階、無窓階 地上11階以上			地階、無窓階 地上11階以上			地階、無窓階 地上11階以上																								ロ	
(16)の2		地下街							全部		※13	全部		※15	全部																									(16)の2
(16)の3		準地下街																																					(16)の3
(17)		重要文化財等の建造物																																					(17)

「エットレ・ソットサス展－その仲間たちとの軌跡」

サントリーミュージアム［天保山］のギャラリーは、戦後の世界の建築およびデザイン界をリードしてきたエットレ・ソットサスと、1980年に友人と共に設立したソットサス・アソシエイツの、約20年の活動を取り上げる。イタリアン・デザインシリーズの第一弾。

本展は、昨年3月～5月にイタリア・プラート市のルイジ・ペッチ現代美術センターで開催された“Ettore Sottsass e Associati 1980/1999”展の世界巡回展であり、ソットサス自身がデザインした家具、ガラス器、陶磁器、アソシエイツが取り組んだプロジェクトのドローイングや写真、建築模型など約300点が展示される。

会期　2000年4月1日(土)～5月21日(日)
10：30～19：30
月曜休館(4月3日、5月1日は開館)

会場　サントリーミュージアム［天保山］
大阪市港区海岸通1-5-10　TEL06-6577-0001
地下鉄中央線・テクノポート線大阪港駅下車

入場　大人1000円、高・大学生700円、小中生400円


ウルフ邸(コロラド州リッジウェイ)　1987～1989年


電話機(エノルメ社・アメリカ)　1986年

特別展「万博開封」と「万博遺跡探検隊」

1970年、大阪の千里丘陵で日本万博博覧会が開催されてからちょうど30年。大阪市立博物館では、6400万人余の入場者を集めたこの万博ゆかりの思い出の品々を展覧会に先立ち公募し、140名を超す人々から記念品、土産物、写真とその思い出が寄せられた。

「万博開封」展ではこれらの品々とともに、大阪市立博物館に保管されているタイムカプセルEXPO'70本体と内容物の同型品の一部を公開する。

会　期　2000年3月1日(水)～5月28日(日)
9：30～17：00(入館は16：30まで)月曜休館

会　場　大阪市立博物館
大阪城天守閣前

入場料　大人600円
高大生350円
小中生無料

展示品　万博イラスト入りマッチ、壊されたパビリオンのカケラ、コンパニオンの制服、ガイドブック、パンフレット、外国人との思い出など


応募されたパンフレット類

■見学会「万博遺跡探検隊」

大阪市立博物館学芸員の案内で、万博の跡地を訪ね、今も残る「太陽の塔」やパビリオン、外国館跡の碑を再発見する。

日　時　2000年5月13日(土)13：30～16：30
場　所　万博記念公園
参加費　無料
ただし、交通費、入園料は自己負担
定　員　60名(応募多数の場合は抽選)
申込み　往復ハガキに住所、氏名、年齢、電話番号を記入して、4月21日必着で下記へ。
大阪市立博物館「万博遺跡探検隊」係
〒540-0002　大阪市中央区大阪城1-1
TEL 06-6941-7177

大地の記憶－いのちのかたち「山本正道展」

横浜市山下公園の《赤い靴はいてた女の子》、江ノ島の《エドワード・S・モース記念碑》、狛江駅《たまがわ》など、山本正道の彫刻作品は風景彫刻と呼ばれ、親しまれている。彫刻家・山本正道(1941－)氏の初期から最近までの彫刻約50点と、試作や素描約50点により、その創造の過程を紹介する展覧会が開かれる。

会　期　2000年4月5日(水)～5月6日(土)
9：30～17：00(入館は16：30まで)月曜休館

会　場　安田火災東郷青児美術館
東京都新宿区西新宿1-26-1
安田火災会場本社ビル42F

入館料　一般500円、大高生300円、小中生無料

出　品　《帽子をかぶった肖像》《追憶》《古代への夢》《ニューヨークの王様》《旅の記憶》等

「フェルメールとその時代」展

日蘭交流400周年を記念して、ヨハネス・フェルメールの代表作5点と、17世紀のオランダの市民生活を描いたデルフト派の画家たちの名品、あわせて40点を集め、大阪市立美術館で特別展覧会が開かれる。

フェルメール(1632～1675)の作品は、現在確認されているのはわずか35点にすぎず、いずれもヨーロッパやアメリカの美術館では門外不出のもの。

めったに貸し出されることのないフェルメールの作品を中心とする展覧会は、日本はもちろん、アジアでも初めての企画である。

会　期　2000年4月4日(火)～7月2日(日)
9：30～17：00(入館は16：30まで)月曜休館

会　場　大阪市立美術館　TEL06-6771-4874
大阪市天王寺区茶臼山町1-82　天王寺公園内

入館料　一般1500円(1200円)、中学生以下は無料、
高大生1200円(1000円)　(　)内は前売り料金

主　催　大阪市、毎日新聞、毎日放送


ヨハネス・フェルメール「天秤を持つ女」1664年頃

アルヴァ・アアルトを訪ねて

54年にわたる創作活動でアルヴァ・アアルトが残した建築物を中心にした、フィンランドへの視察旅行が企画され、参加者を募集している。講師として、大阪芸術大学建築学科専任講師・杉本真一氏が同行予定。

期　間　2000年6月10日(土)～6月18日(日)
の9日間

訪問先　ヘルシンキ、パイミオ、セイナヨキ、ユヴァスキュラ、イマトラなど

旅　費　ひとり398000円

募　集　25名(募集締切日は4月28日)
－催行人員10名－

主　催　日本旅行関西海外旅行支店
TEL 06-6344-1891　FAX 06-6348-1237
http://www2..nta.co.jp/theme/course/world/tourlist.cgi

第３回近代建築講座

保存された近代建築や、取り壊しが予定されたり心配されるものを中心に、スライド100枚程度を上映。21世紀へ保存したい近代建築10選も紹介する。

テーマ『近代建築の保存と破壊＝スライドで見る明治・大正・昭和戦前の建築の生と死②』
講　師　柴田正己氏（明治建築研究会代表）
日　時　2000年４月28日（金）18：00～
場　所　小泉産業ビル会議室
　　大阪市中央区備後町３-３-７
主　催　JICX（日本インテリアクリエイター交流協会）
　　TEL 06-4707-6400

福祉住環境コーディネーター２級

今年の３月に開講した「福祉住環境コーディネーター＜３級＞対策講座」がクラスを増設するほどの人気を得た大阪ガスインテリアデザインスクールは、７月２日に各商工会議所（大阪を除く）で実施される２級検定試験に向けて、さらに＜２級＞対策講座を開講する。

日時　毎週木曜日／18：45～21：05／同スクール教室
　　①５月25日、②６月１日、③６月８日、④６月15日、⑤６月22日、⑥６月29日一模擬テストー
講師　田中直人氏（摂南大学教授）ほかを予定
定員　100名（先着順）
受講　一般４万円（税込み、テキスト代実費は別途）
申込　FAXまたは郵送で、大阪ガスインテリアデザインスクール（FAX06-6262-7202、〒541-0051　大阪市中央区備後町３-６-14）へ。

そごう百貨店の保全・活用を要望

今年春、閉鎖・売却が決められたそごう百貨店について、明治建築研究会は、将来ともその価値を生かした保全・活用を検討してほしい旨、要望書をそごう百貨店、大阪府知事、大阪市長、文化庁に提出した。

そごう百貨店（設計／村野藤吾、施工／大倉土木、竣工／1935年、構造規模／SRC造、８F、Ｂ３）はインターナショナルスタイルで、昭和57年に日本建築学会がとりまとめた近代建築リストでは、建築学的に見て貴重であると位置づけられている。

建築指導課和泉分室の設置

平成14年４月１日を目途に進められている大阪府和泉市の特別行政庁への移行準備のため、本年４月１日より和泉市に分室を設置し、同市内の建築確認等の事務を行うこととなった。

問い合わせは、大阪府建築都市部建築指導課（TEL 06-6941-0351）か和泉市都市産業部開発調整課（TEL 0725-41-1551）へ。

分室設置　和泉市府中町２-７-５和泉市役所内
設置期間　平成12年４月１日～和泉市が建築主事を設置する日の前日まで

「住まいとコミュニティづくり活動助成」の助成対象者決まる

㈶ハウジングアンドコミュニティ財団（会長／豊蔵一）の第８回「住まいとコミュニティづくり活動助成」事業の公募に対して、昨年を大幅に上回る181件の応募が34都道府県からあった。

活動内容は、コレクティブハウジングやグループホームなどの新しい試みから民家の再生やマンションの建て替えにからむ問題まで、また、まちの資源探しからまちづくりワークショップまで多岐にわたった。

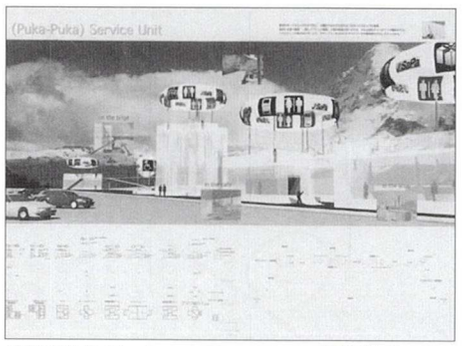
選考委員会（委員長／西村幸夫東京大学教授ほか６委員）で選考の結果、17件の助成を決定した。

助成金総額は1000万円。助成期間は平成12年４月１日～平成13年３月31日まで。

近畿圏を対象とした活動とそのグループは以下の４件。

- 公営住宅における住民組織の確立／千本ふるさと共生自治運営委員会（略称じうん）・京都市
- 住宅地・商店街をつなぐコミュニティリンクとウォークイベント／神戸復興塾・神戸市
- 自助努力で暮らす住職接近型のライフスタイルの実現／加齢クラブ・京阪神
- つながりあおう！ノコギリ歯形の街並みと町家の再生をめざして／黒江ワイワイ連絡協議会・和歌山県海南市

J-SaPa施設デザインコンペティション受賞作決定



最優秀作品：(puka puka)service unit/田辺雄之

㈶道路サービス機構（J-SaPa）は、高速道路のエリアにふさわしい建築空間のあり方を募集した。

213の応募作品は審査会で選考し、最優秀作品１点、優秀作品２点、佳作４点を決定。選ばれたデザインは、同機構のエリア施設づくりの参考として活用される。

- 最優秀作品「（Puka Puka）service unit」
田辺雄之／専門学校ICSカレッジオブアーツ
- 優秀作品「無題」
清水雅和／銭高組十遠藤葉子／東京理科大学大学院
- 優秀作品「self service delivery kit」
浦　俊弥／工学院大学大学院

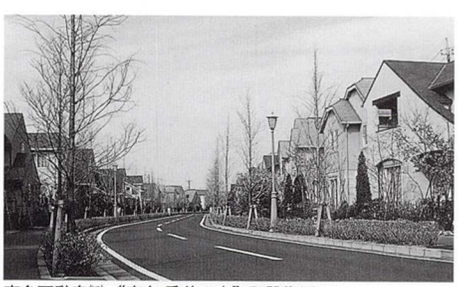
「環境共生住宅団地」を初めて認定

㈶住宅・建築 省エネルギー機構が昨年３月11日に環境共生住宅認定制度を発表して以来、この２月末までに30社35種類の「環境共生住宅」と認定している。

「環境共生住宅団地」は、建設地が決まっている団地で、共用部分に対して環境共生技術が提案されているものをいう。

この「環境共生住宅団地」として、当機構は３件を３月６日に認定した。

①東急不動産㈱「東急 季美の森 ヴィー・ナチュレール」
②西武不動産販売㈱「所沢 松が丘 ウエストエリア」
③山口県「下関 一の宮県営住宅」


東急不動産㈱ “東急 季美の森”既設街区
千葉県大網白里町にある65%がオープンスペースの団地。メイン道路に電柱はなく、緑による境界で開放感あふれる街並み景観となっている

平成12年度「建築設備診断技術者」講習

建築設備の総合的な知識と省エネルギー、機能劣化、耐震性等を視点とした診断手法に精通した技術者を育成する「建築設備診断技術者」講習（ビルディングドクター＜建築設備＞）が、㈳建築・設備維持保全推進協会（BELCA）と㈶日本建築設備・昇降機センターとの共催で、東京・大阪の２会場で実施される。

すでに、過去５回の講習を通じて約2600名の資格者が誕生し、第一線で活躍している。

申込受付　2000年４月３日（月）～５月31日（水）
　　BELCAホームページ
　　（http://village.infoweb.ne.jp/~belca/belca.htm）
　　で受講申込書をダウンロードすることも可。
受講料　52500円（テキスト料・消費税を含む）
■東京会場（定員200名）
期間／2000年７月４日（火）～７日（金）
場所／総評会館　千代田区神田駿河台３-２-11
■大阪会場（定員150名）
期間／2000年７月11日（火）～14日（金）
場所／大阪YMCA会館　大阪市西区土佐堀１-５-６
受講資格、その他についてはBELCA事業推進部へ問い合わせられたい。TEL 03-5252-3873、FAX 03-5252-3871、E-mail;belca@mb.infoweb.ne.jp

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

商品は空気です。



熱と空気のエンジニア
株式会社
大気社

●営業種目
空気調和設備　給排水衛生設備　塗装設備　公害防止関連設備の設計・製作・施工

本社・東京本店　東京都新宿区西新宿2-6-1　☎03—3344—1851(大代)　大阪本社☎06—6448—3603(代)
大阪支社　☎06—6448—5851(代)　名古屋支店　☎052—211—1535(代)　中国支店　☎082—247—5541
九州支店　☎092—431—2147(代)　営業所：北関東・横浜・神戸・京都・岡山・四国

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営 業 所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出 張 所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

空気調和　搬送機設備
給排水衛生　設計施工

人に優しい環境づくり

第一工業株式会社

大阪支店　〒530-0047 大阪市北区西天満3丁目6番14号
電話 06-6364-6661（代表）
本　　社　〒100-0005 東京都千代田区丸の内3丁目3番1号
電話 03-3311-8511（代表）

空気調和設備　産業設備
給排水設備　水処理施設
電気設備　環境施設

三機工業株式会社

取締役社長　大島　剛
取締役関西支店長　本木　満

関西支店　大阪市中央区北浜2—2—21　電話 06(6202)7554
本　　社　東京都千代田区有楽町1—4—1　電話 03(3502)6103
支　　店　北海道・東北・関東・千葉・横浜・北陸・名古屋・京都・神戸・四国・中国・九州

ガス設備の設計・施工のご相談は
大阪ガス指定工事会社・大阪ガス住設機器特約店

大晃設備株式会社

本　　社
大阪営業所　大阪市此花区西九条2丁目13番28号　電 06—6466—2268
枚方営業所　枚方市甲斐田東町9—3　電 0720—49—2128

空気調和設備
衛生設備 設計施工

三建設備工業株式會社

大阪支店　大阪市北区紅梅町3番5号　電話(6352)1131(代)
本　　社　東京都中央区日本橋蠣殻町2—22　電話(3667)3431(大代)
支　　社　名古屋・仙台・札幌・広島・福岡・金沢・新潟・横浜

給・排水・衛生・消火・空調設備

株式会社 西原衛生工業所大阪店

大阪市北区中津6丁目8番4号　電話大阪(6458)3628番
支店・営業所　福岡・京都・天理・川西・神戸

空気調和・衛生設備・設計施工

株式会社三晃空調

本　　社　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1671
東京本店　東京都新宿区西新宿　新宿住友ビル　電話03-3344-7911
大阪本店　大阪市北区西天満3丁目13番20号　電話06-6363-1371
支　　店　仙台・横浜・名古屋・京都・神戸・広島・福岡

OKUJU
スペース クリエイター

建築に革命をもたらした技術がある

「大規模天井無足場工法」

内外装創作パネル・システム天井・間仕切

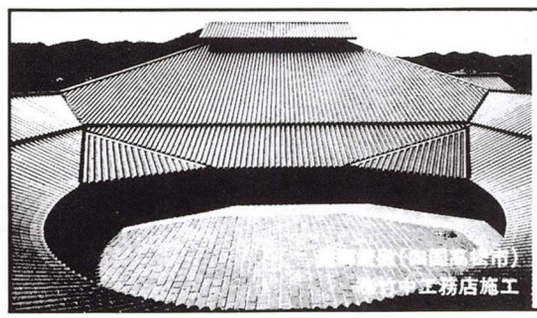
株式会社 オクジュー

本　社
大阪市北区西天満5丁目3番7号　〒530-0047
TEL(06)6312—4131　FAX(06)6312—7998
東京・九州・横浜・名古屋・南九州・京都

空調衛生・冷凍冷蔵・地盤凍結
よりよき環境へ技術で挑む

株式会社精研

本　　社　大阪市中央区瓦屋町2丁目11番16号(オートセンタービル1・2階)
〒542-0066 電話 大阪 (06) 6768—5031代表
メンテナンス　電話　大阪（06）6768—1651代表
東京支社　東京都文京区小石川1丁目12番14号(日本生命小石川ビル7階)
〒112-0002　電話 (03) 5689—2351代表

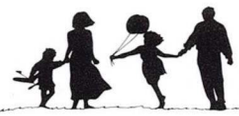


〒556-0024
大阪市浪速区塩草一丁目二番三号
☎ 六五六一〜七四一六
ファックス 六五六一〜七四五四

ナニワ瓦株式会社

あらゆる屋根工事の相談は、

夢×技=∞ 無限大
何時もあなたの街で
お会いしている
クリハラの技術



電気・計装・空調・土木
栗原工業株式会社
本社/〒530-0017大阪市北区角田町1-1(東阪急ビル)
TEL06(6313)1101
創業1919

人と都市の快適な環境をつくります

営業種目 設計・施工・監理
● 電気設備
受変電・幹線
動力・制御装置
電話、放送、インターホン
防犯、防災
中央監視制御
システム計装

● 空調・給排水・衛生設備
空気調和
工場配管
水処理
コージェネレーション
クリーンルーム
● プラント
プラント計装
システムエンジニアリング

● 情報通信設備
情報通信ネットワーク
情報処理
通信システム
放送システム
● 電力流通設備
受変電
架空送配電
地中送配電

あらゆる場所にあふれるクリエイティブカンパニーをめざす。
住友電設株式会社
大阪本社 〒550-0011 大阪市西区阿波座2-1-4 ☎(06)6537-3400
東京本社 〒105-0014 東京都港区芝2-2-17 ☎(03)3454-7311

電気設備設計施工
株式会社 三興社
代表取締役社長 上田正雄
本社 大阪市中央区北浜3−6−13（日土地淀屋橋ビル）
電話 06（6205）3671（代）
支店 東京都中央区日本橋茅場町2丁目17番3号
電話 03（3666）1478（代）
営業所 堺・泉州・泉南・滋賀

CHOYO
人がいる多彩なフィールドで、
新しい限界に挑戦しています。
電気設備設計施工
朝陽電気株式会社
代表取締役 山本貴士
本社 〒530-0005 大阪市北区中之島三丁目2-4(朝日ビル)
TEL 06(6385)1361(代) FAX 06(6385)1050

電気設備・計装制御設備・空調設備・クリーンルーム設備・プラント設備
給排水衛生設備・エネルギー集中監視システム…設計施工
三宝電機株式会社
SANPO
取締役社長 嘉納秀一
本社 〒530-0047 大阪市北区西天満2-6-8(堂ビル) TEL.06(6364)1471・FAX06(6364)5533
東京支社 〒105-0003 東京都港区西新橋3-3-5(ランディック第3ビル) TEL.03(5472)3311・FAX03(5472)0085
名古屋支店 〒462-0847 名古屋市北区金城3-12-14 TEL.052(991)5131・FAX052(914)7535
神戸支店 〒657-0035 神戸市灘区友田町3-6-11K・Tビル TEL.078(842)6411・FAX078(842)6416
堺研究所 〒590-0906 大阪府堺市三宝町七丁369 TEL.0722(27)8408・FAX0722(27)1424

電気設備工事設計施工
東光電気工事株式会社
関西支社
取締役支社長 伊藤義信
大阪市中央区高麗橋4丁目3番7号 電話大阪(6202)0325〜9番
本社 東京都千代田区西神田1丁目4番5号
支社 北海道・東北・丸ノ内・新宿・神奈川・東関東・北関東・中部・九州

学校建築のトータルアドバイザー
二葉工業株式会社
黒板・掲示板・家具
電動黒板装置・サイン・スクリーン
〒547-0001 大阪市平野区加美北3−4−5
TEL06(6792)5858 FAX06(6792)2810

Construction chemistry for the future.
コンクリート用混和剤／コンクリート用補修材
高性能無収縮材／コンクリート用高性能床材
Master Builders Technologies
株式会社 エヌエムビー
株式会社 ポゾリス物産
本社：東京都港区六本木3−16−26
大阪支店：大阪市中央区北浜3-2-23(信愛ビル)
TEL06-6202-3294

Digital Pri-Press
AOBA PRINTING CO.,LTD.,
代表取締役社長 依藤孝行
青葉印刷株式会社
〒534-0027 大阪市都島区中野町2丁目10番11号
Phone.06-6351-5428 Fax.06-6351-5299

＊奉仕感謝の店
タイル及び規格石一式施工
株式会社 川岸窯業商店
本社 大阪市西区西本町1の13の33
TEL.06−6532−0641(代表)
FAX.06−6535−5181
天理営業所 天理市丹波市新町49

●情報処理●企画・制作●編集●画像処理●印刷・製本
人と技術をクリエイティヴで結びます
日本データネット株式会社
本社 〒530-0043 大阪市北区天満1-1-10 TEL.06-6352-7502 FAX.06-6355-2714
制作部 〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19 TEL.06-6352-0943 FAX.06-6355-5533
印刷工場 〒530-0043 大阪市北区天満2-5-15 TEL./FAX.06-6352-1551

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充塡モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・綱野（07727）2−2220
舞鶴（0773）76−0133

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332−6861
TEL 東京（03）3272−8501

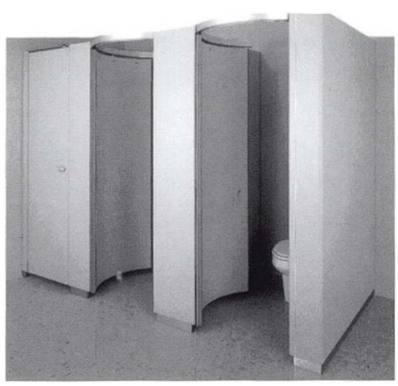
小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443−6181

光洋物産株式会社
TEL 大阪（06）6252−6000

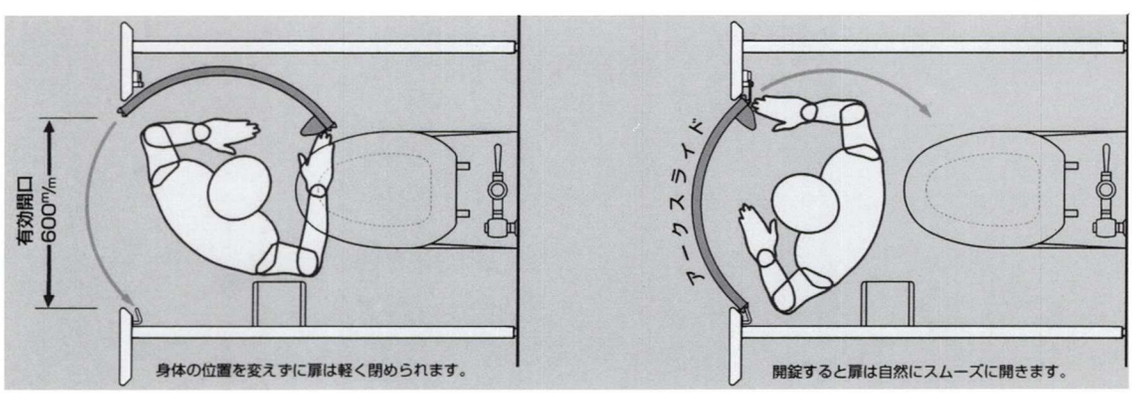
東郷化成株式会社
TEL 滋賀・守山（0775）83−2381
TEL 大阪（06）6877−1581

画期的な扉の開閉（アークスライド）方式を採用した

トイレブース　ウェイブレット



スペースの限られたトイレブースでは、扉の間口寸法が小さい内開き扉が主流ですが、扉の開閉の為に、どうしても使う人の動作が大きくなりますし、外開き扉では、急に扉を開けると通路にいる人と接触する危険があります。そのような問題を解決するために、扉のあるべきカタチと、動きを追及して生まれた（アークスライド）の扉開閉方式。扉は使う人のまわりをとり巻くように動きますので、開け閉めが大変ラクでスムーズに行えます。
操作性と安全性に優れたウェイブレット。やさしく、快適なトイレ空間が構成できます。



よい品は結局おトクです
オカムラ　株式会社 岡村製作所　〒460-0008 名古屋市中区栄2-11-30 セントラルビル1F　TEL 052(221)6291

お問い合わせ・ご相談は◎お客様サービスセンターへ
フリーダイヤル☎0120-81-9060 月曜〜金曜（祝祭日を除く）9：00AM〜6：00PM

三協アルミ

障子框にロール網戸を内蔵

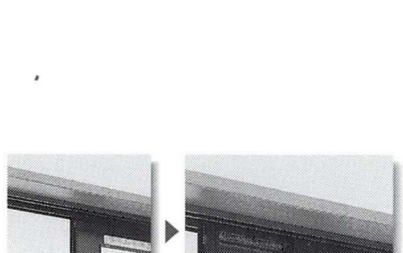
必要な時だけ引き出せます



網戸　　網戸

快適・安全・省メンテ…
集合住宅サッシの新基準

眺望を損なう―脱落が心配―オフシーズンの保管場所に困る…これら従来の網戸の難点を解消したのが「ミッテプラス」です。障子框内蔵のロール網戸を引き出す画期的な集合住宅用サッシで、左右の障子に網戸が付き、自在な採風が居住性を高めます。



網戸の収納時　　網戸の引き出し時

POINT

- ●網戸を引き込めば広がる眺望が楽しめます。
- ●網戸が框内におさまりスッキリした意匠です。
- ●オフシーズンの取り外しが不要となり、保管場所がいらず、網の汚れも軽減できます。
- ●網戸の引き出し幅は、自在に調節できます。
- ●網戸のロールはワンタッチで外せ、メンテが容易です。

集合住宅用網戸内蔵サッシ

ミッテプラス

三協アルミニウム工業株式会社

本社／〒933-8610 富山県高岡市早川70 ビル建材部 TEL.0766-20-2201
関西ビル建材支店 ／〒550-0004 大阪市西区靱本町1-9-15 近畿富山会館ビル TEL.06-6448-5451

三協アルミホームページ　Web MAGAZINE
http://www.sankyoalumi.co.jp/
三協アルミの商品ガイド・技術レポート・ダウンロードサービス・Mr.プランナーCD-ROM受付・ニュースリリースなど、わかる・使える情報サービスを行なっています。

Vol.81 通巻937号　2000年4月1日発行　毎月1回1日発行　昭和24年9月19日第3種郵便物認可　ISSN 0912-8182

社団法人 日本建築協会　〒550-0004 大阪市西区靱本町1-9-15 近畿富山会館内　TEL.06-6445-0781　FAX.06-6445-0784　振替口座 大阪 00980-0-00

定価1,200円（●本体1,143円●消費税57円●送料共）正会員の購読料は会費に含めて徴収

雑誌　03379-4